"GANN"

The Japanese Journal of Cancer Research.

Founded by Prof. Dr. K. Yamagiwa and

Edited by Prof. Dr. M. Nagayo.

Editorial Office: The Pathological Institute of The Tokyo Imperial University. Published Quarterly by The Japanese Society of Cancer Research, Tokyo.



法社

人團

癌

研

究

會

第 第

四十八

册年

大正十三年十一

月

刊行

"GANN"

The Japanese Journal of Cancer Research.

Founded by Prof. Dr. K. Yamagiwa and

Edited by Prof. Dr. M. Nagayo.

Editorial Office: The Pathological Institute of The Tokyo Imperial University. Published Quarterly by The Japanese Society of Cancer Research, Tokyo.



法社

人團

癌

研

究

會

第 第

四十八

册年

大正十三年十一

月

刊行



就是我们就是这个人的,也是是一个人的,他们也是这个人的,他们也是一个人的,他们也是一个人的,他们也是一个人的,他们也是一个人的,他们也是一个人的,他们也是一个人的

類ノ幸福ヲ增進スル上ニ於テ刻下ノ 緊要ナル事業タルヤ り、之本會ノ設立ヲ企テ國際癌研究會ニ加盟シタル理由ナリ。 スル、實二國際的時運ノ風潮ニ鑑=科學近時ノ發達ヲ移シテ人 タラシメ、又同時ニ治療所ヲ設立シ最新ノ研究結果ヲ應川實驗 設立シ、特殊ノ設備ライスル研究所ヲ附圏シ癌研究ノ中央機関 祉ラ增進セシメンが為メニ特ニ國際的性質ラ有スル稿研究會ラ 於テモ上記世界二於ケル現代醫學ノ趨勢二順セ又一面人類ノ福 亦其研究へ忽諸二附スルコト能ハザルモノアリ、サレバ本邦ニ 本病ノ爲メニ鬼籍ニ登ルモノ數萬ヲ下ラザルが故ニ國家的ニ 結果习癖心質歐スルコト動カラザルベク且少我國二於テモ年々 學者二向テモ先年斯ノ如主意味ヲ以テ此國際的共同研究二加盟 ノ之レニ加リテ此研究ラ積ムノミニテモ或ハ比較研究上望外 土竝二生活、慣習、體質等ニ著シキ差異アルヲ以テ本邦研究者 センコトヲ經感シ來レリ、蓋シ我邦ノ如キハ歐米各國ニ比シ 増セシメントシテ研究ノ歩武ヲ進メ來リシガ更ニ数年前主トシ テ獨逸國學者ノ主唱ニョリ國際福研究協會問設セラレ爾來各國 ナルモノヲ設ケ完備セル研究設備ノ下二上記各方面ノ研索ヲ分 其偽同研究ヲ遂ゲシメンコトヲ金テ特ニ稿研究會又ハ稿調查會 研究團體互二聯絡ヲ保ナ之が研究ヲ進メントスルニ至リ

一新ごんぎろねーまノ寄生ニ因ル鼠前胃

食道舌及口腔粘膜ノ表皮癌ニ就テ

]1]

神經切断ト移植腫瘍ノ發育增殖トノ關係

定…量

致及ピ相違

報

中本 岩 二]……」

理事會

十ヶ月ノ男子ニ於ケル腹膜後畸形腫ノー

錄

大串市郎右衞門 : 豐量 會員名簿

稿第十八年原著及抄錄總目次

就テ

胃硬性癌ノ神經纖維索內浸潤經過ニ

頸動脈腺ノ腫瘍ニ就テ

n 金

夫 晁……元

子 部

義 費

> 抄 錄

癌細胞ノ反應ニ就テ

ウオグ 5

n

まうす子宮ノ原養性腫瘍

多發性原發生惡性腫瘍

7

自然發生腫瘍と質驗的發生腫瘍トノ基本的

ラ

7

1

事務所ニ申込ムヘシ 會員タラント欲スルモノハ其氏名現住所ヲ記シ本會

退會セント欲スルモノハ其旨本會事務所ニ屆出ツへ

第十八條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會 総 事事頭頭裁裁

名(內理事長一名)

H 若干名

第十九條 本會ハ皇族ヲ推載シテ總裁トス

會頭、副會頭ハ會員中ヨリ總會三於テ之ヲ選舉ス 副總裁ハ評議員會ノ決議二由リ之ヲ推鼓ス

嘱託ス、但監事ハ他ノ役員ヲ狼ヌルコトヲ得ス 理事長、理事、監事、評議員ハ會頭ノ推薦ニ由リ總裁之ヲ

第二十條 會頭、副會頭、理事長、理事、監事、評議員/任期 ハ二箇年トス、但滿期再選又ハ再嘱スルコトヲ得

第二十二條 會頭ハ本會ヲ總理シ且總會,評議員會ノ議長トナ 第二十一條 會頭 員ノ任期ハ前任者ノ殘期間トス 員ヲ生シタルトキハ補飲選舉义ハ嘱託ヲナスコトヲ得、補缺 副會頭、理事長。理事、監事及評議員二缺

> 第二十三條 副會頭ハ會頭ラ輔佐シ會頭事故アルトキハ之ラ代理ス 評議員ハ木會幅要ノ事項ヲ評議ス

第二十四條 理事長ハ本會一切ノ會務ヲ處理ス

理事長事故アルトキハ他ノ理事代テ其職務ヲ行フ

第七章 音

第二十五條 總會、評議員會へ東京ニ於テ之ヲ開ク、但時宜ニ 依り變更スルコトラ得

第二十六條 定期總會ハ毎年四月之ヲ開ク、但開會期ハ時宜ニ

第二十七條 佐り變更スルコトラ得 總會ノ招集ハ會報义ハ新聞若クハ通知書二依ツテ

第二十八條 之ラ行フ 總會ノ決議ハ出席會員ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス

第八章 評議員ハ必要ニ應シ會頭之ヲ招集ス

第三十條 本會ハ必要ニ應シ支會ヲ設クルコトヲ得 支會二關スル規程ハ評議員會ノ決議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム

第三十一條 本會ニ書記若干名ヲ置ク 書記ハ上長ノ命ヲ受ケ庶務會計ノ事務二從事ス

書記ハ會頭之ヲ任免ス

第三十二條 本會二全品ラ寄附シタルモノアルトキハ其氏名ラ 無別二登録シテ永り本會二保存ス

第三十三條 會誌「癌」ハ毎年五回之ヲ發行シ內一回ヲ歐文會 誌ハ無料ヲ以テ會員ニ頭布ス 誌トス但シ歐文會誌ハ希望二依り實費ヲ以テ配布シ、邦文會

第三十四條 本定款/變更ハ總會ニ於テ出席會員三分ノ二以上 ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

法社 **烟癌研究會定款**

第一章 目的及事業

本會ハ痛ニ關スル研究及研究ノ獎勵ヲ爲スヲ以テ目的

本會へ前條ノ目的ラ達スル為メ懸賞論交ラ募集シ痛研 癌治療院ヲ設立シ又ハ學術集談會ヲ開催スル等ノ實行

但懸賞論文、稿研究所、癌治療院、學術集談會等ニ關スル 規程ハ評議員會ノ決議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム

第三條 本會八社團法人癌研究會下稱不

本會へ事務所ヲ東京市本郷區本富士町武番地ニ躍り

本會ノ資産ハ左ノ如シ

癌研究會ヨリ引機キタル資金

前項以外人諸收入金 會員ノ會費

本會へ前條資産ノ一部ヲ基本金トナスコトヲ得

大正十一年四月 改 正大正三年二月法 改登記 大正三年二月 改登記 安正 正安 二月 改登記 第七條 基本金ハ評議員會ノ決議ヲ經ルニ非サレハ處分スルコ トラ得ス

節八條 本會ノ資産ハ有價證券ヲ買入レ又ハ郵便官署若カハ確 實ナル銀行二預ケ入レ之レヲ保管ス トラ得 但場合ニ由リテ評議員會ノ決議ヲ經テ不動産ヲ買入ルルコ

第九條 本會收支ノ決算八祭年ノ定期總會二於テ之ヲ報告スへ 第十條 本會ノ會計年度ハ毎年一月一日ニ始マリ十二月三十一

第十一條 本會ノ目的ヲ赞成幇助スルモノハ内外國人ヲ問ハス 日二終ルモノトス

何人タリトモ會員タルコトラ得

第十二條 本會員ヲ分チテ左ノ三種トス 會員八本會二於テ發行スル會報及報告書等ヲ無料ニテ受ク 名譽會員 一、特別會員

第十三條 名譽會員ハ學術上特二功績アルモノ又ハ特二本會ノ 事業ヲ贊助スルモノ及電子園以上ヲ皆附シタルモノニ就キ評

第十四條 特別會員ハ會費トシテー時ニ百圓以上ヲ納ムルモノ 議員會ノ決議ヲ經テ會頭之ヲ推薦ス

第十五條 通常會員ハ會費トシテ毎年金五回ヲ前納スルモノト

原

一新ごんぎろねーまノ寄生ニ因ル鼠前胃・食道・舌及口

腔粘膜ノ表皮癌ニ就テ

臺灣總督府醫學專門學校病理學教室

]1]

醫學博士

乙、家鼠二於ケル本蟲ノ寄生率ヨリ見タル 見タル分布狀況 定

分布狀況

余ノ臺灣二於テ發見シタルごんぎろね

本蟲ノ發育史及臺北地方ニ於ケル本蟲

第四章 本蟲ノ寄生ニ因ル扁平上皮癌ノ實驗的

ーまノ種別

目

緒 次

分布

第一、實驗方法

實驗動物ニ於ケル胃底部(前胃)ノ變化

○横川・一新ごんぎろれーまノ寄生ニ因ル鼠前胃・食道・舌及口腔粘膜ノ表皮癌ニ就テ 中間宿主ニ於ケル本幼蟲ノ寄生率ョリ

三五五

A 長 頭頭裁裁 男醫醫 學 博博 男際 際 日本の日 學博 學博 學博博 學學 博 博博 士 + 士爵士士 士士士爵 + 爵士士 仁西服林林磯稻磐井入今森鹽稻佐高木細長佐本澁見 田山部 村垣瀨上澤村村田田人木村野與多多澤博 太次雄之達繁開廣龍隆喜德 直光郎维曄郎郎一助吉三作重吉與寬衛順郎彥夫 法社 人图 同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同 癌 醫醫 學學學 轉 時 時 時 時 醫醫醫學學學學 學學學博博 醫學學學 學學學 轉轉 醫學學 學學學 博博博博 學學學 博博博 士士士置士士士 土土土土 士士士爵 ±±±± 二福山草矢久宇中中中鶴田吉吉金大大緒岡 岡 遠土本西 勝間野保 山肥田野 濱原島田代本井杉橋,槻方田 栫慶五次 謙政一 一太萬次義太三五太菊三

同同同同同同同同同

東京 京市 帝 國本 大鄉 法社學區 人團醫本 部當 研病士

块

學或 宝香

醫醫學學學學

博博博博

士士士

醫學

博

+

振替口座東京三〇〇七一番 內地

森樋平平鹽鹽南宮三三 北 岸木佐 佐 佐阿 青 雨朝有近小 川田浦里 下藤藤族人山宮倉賀藤林 安口山井谷原 謹柴敬 津 達 連繁金政二又大米定之三二正恒次三三徹七文長次 吉次藏遒雄策曹次則助 郎 郎中丸 郎 吉郎 藏 郎三文繁幹

三一郎滋太郎朗郎郎吉郎德郎郎郎郎男郎郎 卿 吉藏郎郎

醫醫醫男醫工醫醫學學學學學 博博博博/博博博博

員

學學

+

博博博

土土士爵士士士士爵士士士爵士士士

造ヲ精査シ、之ヲ曩ニ油蟲ノ筋肉内ニテ證明シタル幼線蟲ノ構造ト比較シ、以テ該幼蟲ノ寄生發育シ 粘膜上皮ニ小線蟲ノ寄生ヲ證明セリ。兹ニ於テ余ハ余ノ豫想ノ誤ラザリシヲ喜ブト同時ニ、該蟲ノ構 レタルガ如キ、鼠前胃ノ表皮癌ヲ形成セシメ得タレバ、左ニ其槪要ヲ記載報告セントス。 タルモノナルヲ確メ得タリ。仍テ更ニ本實驗ヲ續行シ、其一定數ニ於テハ嘗テフ氏ニ依リテ記載セラ

第二章 余ノ臺灣ニ於テ發見シタルごんぎろねーまノ種別

ノごんぎろれーま、れおぶらすちくむトノ主ナル相違點ヲ表示シ、以テ参考ニ資セントス。 木蟲ノ構造及簽育史ニ關スル詳細ナル記載へ、之ヲ楽浔醫學會雜誌第二三六號ニ譲り、本章ニ於テハ只木蟲トフィビーゲル氏記載

第一表

雄		1		性別
狀 交接囊 / 形	尾端	食道ノ長サ	大サ	比較點
幅○・一七○耗 おから ・一七○耗 おから ・一七○耗 おおい 見き方ニ かき ・ アリ 平均長 ・ 四六二 にかケルョリモ後方ニアリ 平均長 ・ 四六二 に かりい リー・ の ・ 一	螺旋狀二捻轉ス	全體長ノ約四分ノー	幅徑 ○・一一─○・一三粍	ごんぎろれーま・れおぶらすちくむ
○・○四一○・○五粍 ○・○四一○・○五粍 「塩カナラズ、長翼ノ長サ○・四二一○・五三粍、塩が、一分・○五粍	僅カニ捻轉ス	全體長ノ三分一乃至六分一ニシテ平均四分ノ一	幅徑 ○・○九五一○・一五粍	本

○横川・一新ごんぎろはーまノ寄生ニ因ル鼠前胃・食道・舌及口腔粘膜ノ表皮癌ニ就テ

肉眼的所見

實驗動物ニ於ケル食道、口腔及舌ノ變 微鏡的所見

> 肉眼 顯微鏡的所見 的 所見

第五章 總括及考案

ticum ノ中間宿主トシテ知ラレタル、油蟲ノ筋肉内ニ 一種ノ小線蟲ヲ證明シ、構造上ごんぎろねーま 同蟲ノ發育史ヲ闡明シテ之レガ實驗的研究ヲ遂ゲントシ、其中間宿主ト思ハル、モノヲ集メテ檢査セ テ、半パ失望セシモ該幼蟲ノ構造ハ正シクごんぎろねーま屬ノ幼蟲ナルベキヲ信ジ、更ニ四匹ノ白鼠 屬ノ幼蟲ナルベキヲ知リ得タルヲ以テ、之ヲ二匹ノ白鼠ニ與へ試驗後二十一日乃至五十三日目 ノ胃ニ寄生シテ肉芽性腫瘍ヲ形成スル事實ヲ證明シ、第十二囘病理學會總會ニ於テ之ヲ報告セリ。爾來 解剖セ H ニ臺北地方ニテ採集シタル油蟲ノ多數ヲ餌食セシメテ、其當否ヲ確メントシ、大正十一年三月二十五 3 余号ハ一昨々年ふいさろぶてらノ一新種ふいさろぶてら•ほるもざな Physaloptora formosana ノ臭鼠 H y ラテ或 シニ、 未ダ確實ニ之ヲ證明シ得ズ、然ルニごんぎろねーま、ねおぷらすちくむ Gongylonema neoplas-5ハ箸シク肥厚シ、嘗テフィビーゲル氏(三)ノ記載ニ見ルガ如キ乳嘴腫性變化ヲ 呈シ、鏡檢上 IV 同年五月八日ニ至ル期間 不明ノ原因ニテ斃死シタルモ、他ノ二匹ハ比較的長ク生存シ、死後剖檢ニ依リ、胃底部(前 胃ニ於ラ何等ノ變化ヲモ認メザリシノミナラズ、一隻ノ寄生蟲ヲモ證明シ得ザリシヲ以 二二於テ、多數ノ油蟲ヲ餌食セシメタルニ、中二匹ハ試驗開始後暫ク 二屠殺

	蜡	
मा	卵輸出管 Ovijector.	子
耗,内ニ仔蟲ヲ有ス 大サ長徑○・○六耗,幅徑○・○四 正権國形ニシテ比較的厚キ透明ノ耶殼ヲ有シ兩極	腟ハ直ニ前後ノ子宮ニ運リ明輸出管ヲ有セズ	へ陰門ノ直後ニアル受精囊ヨリ起ル 前子宮ハ食道ノ直後ニアル受精囊ヨリ起リ後子宮
內ニ仔蟲ヲ有ス 大サ,長徑○・○五七粍・幅徑○・○三四粍 形,同一	出管アリテ前後ノ子宮ト連接ス 出管アリテ前後ノ子宮ト連接ス	端ニ近ク位セル受精囊ヨリ起ル前子宮ノ起始部ハ尾

ぎるねーま、れおぶらすちくむト別種ノモノナルヤ否ニ就テハ後日標本ヲ送リテ同氏ノ鑑定ニ委センコトヲ期ス。 故ニ、今暫ク同蟲ノ一變種ト認メ,木蟲ヲ Gongylonema neoplasticum Orientale ト命名セントス。前シテ本蟲ノ果シテフ氏思載ノこん 學的性質ハ全カ同一ニシテ鼠ノ胃底部(前胃)、食道、舌及日腔粘膜ニ寄生シテ、粘膜上皮ノ肥厚增生等ニ癌腫ヲモ發生セシメ得ルガ トレーヴセン Fibiger a Ditlevsen 氏のノ記載ニシテ誤リナキ限リ、本種ハ未ダ記載セラレザル一新種ナルコト疑ナシト難、其生物 ルマデニハ,二ケ月ヲ要スト 云 ハ ル 、モ。本種ニ 於テ ハ 餌食試驗後三十五日乃至四十二日ニシ テ,宿主ノ糞便內ニ本蟲卵子ヲ認 メ得 ルモノナリ。加之雄蟲ニ於 テ ハ試験後二十日前後ニテ 成熟シ、精証内ニ精蟲 ヲ職ス ルモノ 少カズ、從 テフィピーゲル及デイ 斯ノ如ク種別判定上重要ナル諸點ニ於テ差異アルノミナラズ,ごんざろねーま,ねおぶらすちくむニ於テハ同蟲ノ發育シテ排卵ス

第三章 本蟲ノ發育史及臺北地方ニ於ケル本蟲ノ分布

油ª(わらんごきぶり Periplaneta americana L. 及こわもんごきぶり Periplaneta australasiae L.)ニ攝取セラン、実腸管内ニテ孵化脱穀 皮ニ寄生シ、是等ノ臓器内ニテ成熟シ、仔蟲包有期子ヲ産出ス。卵子ハ脱落上皮ト共ニ糞便内ニ排出セラレ、本蟲ノ中間宿主ナル、 シ腸壁ヲ穿通シテ體腔内ニ出デ,夫レロリ諸所ノ構紋筋内ヲ徘徊シ一定ノ發育ヲ遂ケタル後、同筋内ニ於テ螺旋狀ニ卷屈シ其周圍ニ 本蟲ハごんぎろれーますねおぶらすちくむト同樣ノ發育ヲナスモノニシテ,鼠ノ前胃及食道ノ扁平上皮内ニ。稀ニ日腔又ハ舌粘膜上

〇横川・一新ごんぎろれーまノ寄生ニ因ル風前胃・食道・舌及口腔粘膜ノ表皮痛ニ就テ

雌						100		
腔	陰	食道	大	精	サ輸	副	棘	衰 交
	"]	ノ長サ	サ	4	管ノ長	棘	短棘	a 長 棘
陰門ヨリ僅二前方ニ延ブ	體ノ後端ニ近ク位ス。外面ニ凸隆セズ	全體長ノ約九分ノー	幅徑 ○・一七一○・三二六粍	小球形	平均 〇・〇七粍	記載ナシ	如シ長サ約○・○九三粍、最大幅徑○・○○九粍レリ背腹面ヨリ見ルトキハ中央ニ於テ肥厚セルが帶劍狀ニシテ尖端ニ向ヒテ徐々ニ狭小シ鈍端ニ終	對シ直角ヲナス 外ニ提出セラレ、外方ニアル部ハ内部ニアル部ニ外ニ提出セラレ、外方ニアル部ハ内部ニアル部ニ
せり體長五五・○耗ノモノニ於テ○・八七六粍ヲ有長サ體長五五・○耗ノモノニ於テ○・八七六粍ヲ有	體ノ後部ニ位ス。唇狀ニ凸隆ス	全體長ノス分ノ一乃至十三分ノ一	幅徑 ○・二六一○・三五○粍	四の五年、尾ノ長サ○・○○三五─○・○○四・○○五年、尾ノ長サ○・○○九年、幅徑○・○○四─○・回門形义ハ梨子狀ニシテ一本ノ尾ヲ有ス體ノ大長	長 ○・○八五――〇・一〇粍	競字通過セシム 短交接棘ニ對向シテくろあげノ腹側ニ位シ舵形ニ 短交接棘ノ尖端ヲ闡ミ兩者ノ間ニ小孔ヲ存シ長交接 を接棘ノ尖端ヲ闡ミ兩者ノ間ニ小孔ヲ存シ長交接 を接棘ノ尖端ヲ闡ミ兩者ノ間ニ小孔ヲ存シ長交接	形、類似ス、長サ〇・〇七三―〇・〇九四粍 「一一八八円代」	長サ、平均○・六二二粍ニシテ常態ニ於テハ體外ニ歴出スニアリテ綱キ鞭狀ヲナシ、加壓シテ體外ニ歴出スルトキハ尖端ハ直角ヲナシテ提出ス

斯クノ如ク肉眼的變化ナカリシモノニ於テハ、一疋义ハニ、三疋ノ本蟲ヲ寄生シ居リシモノニシテ、稍く高度ノ變化ヲ呈シタルモ 於テモ十疋乃至十六疋ヲ寄生シ居リシモノニテ,二十疋以上寄生シタル場合ハ極メテ稀ナリキ。

蟲二於ケル本幼蟲ノ寄生率ト對比シテ本蟲蔓延ノ少カラザルヲ知リ得ベシ。 ノ如ク剖檢上、本蟲寄生ノ爲メニ起ル病變へ比較的輕微ナルモノ多カリシモ、本蟲ノ寄生率ハ質ニ全例ノ約三十%ニ相當シ、

界四章 本蟲ノ寄生ニ因ル扁平上皮癌ノ實驗的研究

種々ナル故障ノ爲メニ衰弱シ、到著後日ナラズシテ死亡スルモノ多ク、爲メニ實驗ニ併用シ得ザリシ 本蟲ハ序説セシガ如ク、フ氏ノ發見シタルごんぎろねしま・ねおぷらすちくむニ近似セルノ ミ ナラ 其生物學的性質ハ互ニ相一 購入シテ實驗ニ供用セリ、 致スルガ放二、フ氏ノ實驗方法二從上復試セントシ、內地ヨリ多數ノ 然ルニ氣候風土ノ關係上白鼠ハ當地ニテハ飼育シ難ク、且ツ航海中

第一 實驗方法

少カラズ。

弱スルカ、又ハ油蟲ヲ嫌忌スルニ至レバ、一時之ヲ中止シ、健康ノ恢復ヲ俟チテ更ニ油蟲ヲ與ヘ、以 幼 テ ハ二匹宛白鼠ニ與へ實驗動物ノ健康ヲ害セザル限リ、成ル可ク長ク油蟲餌食ヲ繼續シ、實驗動物ノ衰 其結果ヲ知ラントセリ。此方法ハ必ズシモ完全ナルモノニ非ズ、何トナレバ油蟲ハ常ニ必ズシモ本 フィビーゲル氏ノ實驗ニ做ヒ、臺北市又ハ其ノ附近ヨリ採集シ得タル油蟲ヲ毎日又ハ隔日ニ一疋又 蟲ヲ宿シ居ラザルハ勿論、タトへ是ヲ宿スモノト雖、寄生蟲数ノ多寡等全々不明ニシテ、正確ニ本

○横川・一新ごんざろねーまノ寄生ニ国ル鼠前胃・食道・古及口腔粘膜ノ表皮痛ニ就テ

胃ト稀シ、扁平上皮ニテ被ハレ全胃ノ三分ノ一乃至二分ノ一ヲ占メ、幽門部トノ間ニ輕キ皲蘗アリ、幽門部ハ固有胃腺ヲ有ス)食道、 包藏リ有スル完成仔蟲トナル。斯ル完成仔蟲ヲ有スル油蟲ヲ鼠ニ與フルトキハ、該幼蟲ハ鼠ノ消化管殊ニ胃底部(鼠ノ胃底部ハ一ニ前 行蟲ノ多寡及本蟲ノ鼠二於ケル寄生率ヲ知ラザルベカラズ。 口腔及舌粘膜ノ重層扁平上皮内ニ寄生ン發育シテ成蟲トナル。故ニ本蟲ノ分布ヲ知ラントセパ其ノ中間宿主ナル油蟲ノ筋肉内ニアル

す 中間宿主ニ於ケル本幼蟲ノ寄生率ヨリ見タル分布狀況

きぶり及こわもんごきぶりノ雨種二就キ檢査シタルニ、何レノ方面ニ於テモ大差ナク、主トシテ内地人ノ居住セル城内ヨリ採集シタ 該幼蟲ヲ證明シ、臺北市ロリ約二里ヲ隔テタル景尾及涭子日庄方面ヨリ採集シタルモノハ、其ノ二十三――三十九%ニ於テ本幼蟲ヲ ルモノニハ約三十%ニ於テ,艋舺方面ヨリ採集シタルモノハ約三十七%ニ於テ,大稻埕方面ヨリ採集シタルモノニハ約十七%ニ於テ シ。今舊價ニ從ヒ臺北市ヲ城内(京町通)・艋舺(新宮町方面)・及大稻埕(大平町方面)ノ三區域ニ分チ、右區域ヨリ採集シタルわもんご 臺北市及其附近ヨリ採集シタル油蟲 Periplaneta americana n. Periplaneta australasiae ニ於ケル本蟲ノ寄生率ハ略同樣ニシテ大差ナ 明セリ。從テ臺北市及其近郊二於テハ騰の本蟲ノ蔓延セルコトヲ知り得べシ。

乙 家屋ニ於ケル本蟲ノ寄生率ヨリ見タル分布狀況

本蟲寄生ノ爲メニ起リタル病變ヲ見ルコト意外ニ少カリシモ、斯クテハ油蟲ニ於ケル本幼蟲ノ高キ寄生率ヲ説明シ得ザルヲ悟リ、毎 日衞生試驗室ヨリ十正位宛家息ノ胃ヲ貰ヒ受ケ、之ヲ分離シテ本蟲寄生ノ有無ヲ確メシニ驚クベキ多數ノ寄生率ヲ示セリ。斯ク叮嚀 ザリキ。而シテ前記六十八例中,稍く著明ノ乳嘴膣性變化ヲ呈セシモノ二十一例ニシテ未ダ確實ニ癌性變化ヲ呈シタルモノ一例モナ 及本蟲ノ寄生ヲ想像シ得ル程度ニ粘膜ノ肥厚シ居リシモノ合セテ六十八例、即全例ノ約十%ニシテ他ハ殆ド何等ノ變化ヲモ證明シ得 二檢査シタル家鼠へ實ニ六百二十九疋ニシテ内本蟲ヲ寄生シ居リシモノ百八十八疋即全例ノ約三十%ニシテ、肉眼的ニ著變アルモノ 於テハ知人ニ依賴シテ、捕獲シタル野鼠及「ペスト」防遏ノ爲メ毫北市衞庄試驗室ニ於テ、買收檢査セラレタル家鼠ノ遺骸ヲ檢シテ、 然ニ野鼠又へ家鼠ニ寄生セル、本蟲ハ極メテ少敷ニシテ爲メニ胃底部粘膜ニ特殊ノ變化ヲ見ザル場合多シ、從テ本蟲發見ノ初期

五七	五五	_	11111	西五〇		+	+	-	-
ъ.	五九——	=	三四	八七·〇	カ〇・〇	±	±	+	-
五〇	7	==	三九	四三-〇	五四	++	##	++	-
	第	Ξ	表試驗開	驗開始後七十乃至百	至百五十日	ヲ經過セシ	シモノ		
動物	實驗開	始	f F I I	禮	重	胃底部(前	(前胃)ノ變化	食道ノ變化	口腔及舌
	後ノ日	數	餌食油盐製	試驗開始時	剖檢時	肉眼的所見	鏡檢的所見	1	が變化
四二	4::	_	五二	大三-0	五〇〇	++	++	++	-
二七	411-	-	五三	八三·O	入〇・〇	+	+	±	-
五三	431-	三三	三七	四七〇	五〇・〇	##	+++	++	_
六一	九二	七四	一八	五四・〇	五〇・〇	+	+	-	-
六〇	九八—	<u> </u>	九	五五〇	六四·O	++	++	+	-
三八	100-	1 =	六二	三八〇	三八〇	++1	+++	++	±
0	101	八三	11111	七五・〇	六七・〇	+	+	±	±
三七	104	1111	六二	mm•0	五四・〇	++	++	++	-
四八		七五	三五	ス三・〇	七四・〇	++	++	+	-
五四		八四	三四	七六・〇	八五·O	#	++	-	_
五六	一三五	八五	三七	E0.0	五四・〇	#	##	+	_

〇横川・一新ごんぎろれーまノ寄生ニ因ル鼠前胃、食道、舌及口腔粘膜ノ表皮痛ニ就テ

三四三

年餘ヲ要スベキヲ以テ、從來ノ方法ニ依リテ行ヒタル實驗成績ヲ一括シラ報告スルコト・セリ。 蟲寄生ノ時日及其多寡ヲ指定シ得ザレバナリ。然レドモ當時ハフ氏ノ實驗ニ捕ハレ不完全ト知リツ、 V 二混ジラ與フルトキハ、極メラ容易二本幼蟲ヲ餌食セシメ得ルコトヲ知リ、目下此ノ方法ニ從ツヒテ ・バ、次囘ニハ是等ノ點ニ關シ一層精確ナル報告ヲナシ得ルヲ信ズト雖モ、 ラ行 6行シ來リシモ、最近二至リ油蟲ヲ分離シテ其體内ニアル被囊幼蟲ヲ集メ、之ヲ鼠ノ愛好スル燒芋 行シ、 且腫瘍ノ發生ニ及ボス食餌ノ影響ヲ知ラントシ、 種々ナル食品ヲ與ヘテ試驗シ 所期 目的 ヲ達 ツ・ア 1

化少の参考ニ資スベキ點モ亦少キヲ以テ、之レヲ省略シ試驗開始後三十日以上生存セシモノ・ミニ就 今囘報告セントスル實驗例ハ、六十一例ニシテ試驗開始後三十日以内ニテ死亡セシモノハ、 先が肉眼的並ニ顯微鏡的所見ノ大要ヲ表示セントス。 概シテ變

第二表 試驗開始後三十日乃至七十日ヲ經過セシモノ

y E	五八	-	二九	五二		動物
四八一一一	四三一	三八	= - =	= - =	後ノ日數	實驗開始
九三二	四四四	_ - t	=======================================	11	1100	耳金由品致
七八・〇	四三・〇	六O·O	五九・〇	四二.0	試驗開始時	All His
八五・〇	四三.0	五六・〇	五二〇	四0.0	剖檢時	重
++	++	+	+	+	肉眼的所見	胃底部(前
++	++	+	+	+	鏡檢的所見	胃)ノ變化
+	±	+	±	_	1	
±	-	-	,-	-	ノ變化	口腔及舌

_	-	++	++	九七・〇	ス六・〇	ス〇	二七八—— 四三	二七	八
_	±	+	+	九六・〇	九六・〇	七七	0— 八七	三五〇	0
-	+	#	+++	八三・〇	八三・〇	九九		三五〇	三六
_	+	++	++	40.0	六八・〇	九四	九一九八	二四九	三九
±	+	***	##	八五・〇	±0.0	九二	三六————	11111	四四

第五表 試驗開始後三百日以上ヲ經過シタルモノ

_	++	#	+++	1011.0	八七·〇	ニホー	三元	五七五	===
-	+	1111	+++	四二・0		一七九	40	10	一八
-	+	***	##	0.01111	- 〇班· 〇	七九	四二	五〇七	七七
-	+	#	+++	九五・〇	七六・〇	一三七	四 〇	四二一	1111
±.	±	+	+	九七・〇	- Off.	ホー	二五四	三九三	1:1
-	_	+++	+++	1四〇・〇	10110	九一	一四二	三〇六	
ノ變化	10 10 1	鏡檢的所見	肉眼的所見	剖檢時	實驗開始時		日數	後ノ	番號
口腔及舌	道へ続	胃)ノ變化	胃底部(前日	重	H.V.	師食油蟲數	開始	實驗	動物

前表中(二)ハ本蟲ノ寄生及病變ナキラ示シ

(十)ハ本蟲ヲ寄生セルモ病變ナキヲ示シ

(+)ハ本蟲ノ寄生及粘膜上皮ノ輕度ナル肥厚ラ

〇横川・一新ごんぎろれーまノ寄生ニ因ル鼠前胃、食道、舌及口腔粘膜ノ表皮癌ニ就テ

_		1				1	
1111	79	10	=	五五五	三四	九	四七
一四五	四三	一三九	111111	1 = 1	二三九—	三八一	二二六
	-						
=	七二	-	四一	九三	四二		八七
七七	五六	九〇	五九	四〇	六九	七八	三五
六三-〇	七五・〇	M Fi.	六七.0	五九。〇	四 O	五 三 • ○	×0.0
六〇・〇	七0.0	六四·O	六五·O	五八・〇	七八・〇	六三・〇	九二・〇
++	+	+111	+	++	++	##	##
++	+	##	+	++	++	##	##
+		+	±	++	±	+	
±		_	-	_	_	±	

四表 試験開始後百五十日乃至三百日ヲ經過セシモノ

第

動物	實驗開始	村	體	重	胃底部(前	胃)ノ變化	4	口腔及舌
番號	後ノ日敷	百了江北東	試驗開始時	剖檢時	肉眼的變化	鏡檢的所見	食証ノ製化	ノ變化
1111	1 * * 1 * 1 *	六一	七五	八五·〇	+	+	+	-
七	-八〇—-五〇	五七	七八・〇	九〇・〇	+	+	±	±
1111	二〇四— 四1	七八	六0.0	九五・○	##	+++	++	_
三五	110七— 四四	九〇	五三・〇	七五・〇	##	***	++	-
11111	二〇九——一四七	九〇	411.0	九五・○	++	++	±	-
四三	44Om!!	八四	三五。〇	八五·〇	##	+++	+	-

野風二 底部粘膜ノ全汎ニ亙リテ瀰漫性ニ起リ、又ハ一部ニ限局シテ斑點狀ヲ呈ス、 於テハ、其變化ノ顯著ナランコトヲ望ミテ、油蟲ヲ過食セシメタル結果本蟲ノ寄生數多ク、殆ド ニ亙リテ粘膜上皮ノ瀰漫性増息ヲ來タシ、唯局部的ニ多少其程度ヲ 面 於テ、本蟲ノ極メテ少數ニ寄生シタル場合ニ見ラル、モノニシテ、本報ニ記載セントスル實驗例 ハ灰白色不透明トナリ、粗糙ニシテ絨毛狀ノ外觀ヲ呈ス、斯ル變化ハ寄生蟲ノ多寡ニ依リ、 多クハ本蟲感染ノ初期二見ルモノニシテ、 粘膜上皮の僅カニ肥厚シ、 異ニシタルモ 然レドモ後ノ場合い多ク 表層上 ノ多カリキ 皮ノ角化二依

成シ、輕キ腦廻轉狀ヲ呈シ胃壁ハ一般ニ肥厚シ、切檢スルニ肥厚增生セル粘膜ハ深ク、 中, ラ 及ビ、是等ノ部ハ胃ノ外面ョリ、 ハ粘膜面ニ屢~限局性ノ乳嘴腫ヲ認メ得ベシ。 粘膜上皮ノ増生肥厚漸ク顯著トナルニ從ヒ、粘膜面ハ益;粗糙トナリ堤狀或ハ縱走ノ敏襞ヲ 乳白色乃至帶黃灰白色ノ斑紋トシテ透見セラレ得ベク、 粘膜下膜乃至 野鼠

力 ·〇乃至一·五糎三 ノ内腔ハ縮小セラレ、時トシテハ全々充塞セラル、コトアリ、斯ル場合ニハ胃底部 トアリ、 乳嘴腫狀 全胃ノ三分ノ二以上ヲ 切檢スルニ胃底部ノ粘膜ハ深ク胃壁内ニ進入シテ、割然タル胞巢ヲ形成シ、 粘膜上皮殊二角層ハ著シキ瀰漫性増息ヲ營ミ、 層顯著ニシテ、粘膜ノ腦廻轉樣皺襞ハ益ト、顯著トナリ、其間 ノ鈍突起ヲ形成シ、 至ルコトアリ。 領有シ、 又幼若ナル實驗動物ニ本蟲ノ多數寄生シ、 胃底部粘膜ノ増厚ト共ニ、胃壁モ亦著シク増厚シ、 硬固ニシテ漿膜面ヨリ黄白色ノ扁平ナル膨隆又ハ廻轉ヲ 胃底部ノ內腔ヲ充塞シ、 而 二噴火口狀 モ比較的 (前胃)ハ著シク 粘膜下層乃至 長の生存シ 胃壁ノ全厚 為メニ胃底 ノ凹陷ヲ生

(十)ハ中等度ノ肥厚る

(丗)ハ粘膜上皮ノ肥厚ノミナラズ上皮細胞ハ深ク胃壁内ニ進入シ、全胃壁ノ肥厚ヲ

(冊)ハ粘膜下ニ進入シタル上皮細胞ノ癌移行型、癌初期及癌腫ラ示ス

合シテ 經過シタルモノニ於テ、 7 3 y モ 表 ハスモノアリシト雖、鏡檢上ニハ異型的乃至異所的增生ノ域ヲ脱セズ、實驗開始後二百日以上ヲ 記載 顯 ノ實驗成績ヲ通覽スルニ、胃底部(前胃)ニ於ケル變化ハ常ニ食道・舌並ニ口腔粘膜 著 セントス。 2 テ、 肉眼的 始メラ癌性變化ヲ呈スルモノアルヲ知レリ。 ニハ實驗開始後七十日以上ヲ經過シタルモノニ於ラハ可成リ高 今便宜上各例ニ於ケル變化ヲ綜 ニ於ケル變化 度ナル變化

第二 實驗動物ニ於ケル胃底部(前胃)ノ變化

中 肉眼的所見

三十日以後 粘膜上皮ノ肥厚ヲ來タス場合ハ極メテ少ク、若キ實驗動物ニ於テ本蟲ノ多數寄生シタル場合ノミ、 -胃底 リ乳嘴腫及癌性變化ヲ呈スルニ至ルマデノ階級的變化ハ肉眼的所見ノミニテハ之ヲ確ムル 各例ニ於ケル 胃底部 從ラ肉根的ニハ之ヲ輕・中・强ノ三度ニ大別シラ記載スベ 概シテ餌食油蟲敷ト餌食後ノ經過日數トニ比例スルモノニシテ、油蟲餌食開始後二十日 部 膜 於テ、 肥厚ヲ來タシ、表層上皮ノ角化ニ依リ灰白色ヲ呈ス、 始メテ粘膜上皮ノ肥厚増生ヲ來タスモノナリ、 (前胃)粘膜ノ 變化ヲ觀察スルニ、 個體ニ依リ 多少ノ 差異アルコト 20 而シテ粘膜上皮ノ單 然レドモ多ク 八油 餌 IV コト能 肥厚增生 以内ニテ 食開始後 ナット

記ノ如 層ヲ認 アリラ 化セル上皮層ハ互ニ膠著シテ微細纖維素狀ヲ呈シ、或ハ無構造ニシテえおじんニ濃染スル 蟲ノ多數ヲ寄生シタル場合ニハ、特殊ノ變化ヲ呈スルモノニシテ、増生セル粘膜上皮ハ著シク角化 メテ厚 h ノ角化層 环 向 ノ發育ヲ營ム傾 7 ハ角質變性ニ陷リツ、アル上皮細胞 有 1 2 ノ進ムニ從ヒ、 層 膜上皮ノ肥厚ヲ見ルニ過ギザ 得ベク 染三、 時 侵サレ易ク、 1 P 25 性ニ依り著シキ差異アルモノニシテ、或者ハ油蟲餌食開始後百日以上ヲ經過シタル ルモ、 常ノ厚ニ 肥厚增生 トシ 同時 ノ移 厚丰密層 核ハ變形萎縮 ラ 行 二多核白血球ノ遊出及本蟲卵子ヲ認ム。 角層 普通 部 ハ二粍以上ニ 向 達 二依ルモノナレドモ、 ヲ -粘膜上皮ノ肥厚増生モ亦從テ顯著ナルモノ、如シ。 アル細胞 7 ス 胞核モ亦著シク變形シ、 成スコトアルモ、多クハ其間ニ不正 ノ角質變化ト多少趣ヲ異ニシ、 普通 IJ n E 1 ノモ 2 及ブ + シ ノ、如ク 叉い顆粒狀 コトアリ。 極メテ不正形且不規則 ルモノアリ、 有核層ノ肥厚増生ト 鱗片又い層板狀ヲナシ、 角層を亦從テ增厚シ、 ノ胞膜ハ、特ニ濃染シテ網狀ヲ呈シ、 = 之二反シ、 胞體內又ハ 破壞シテ胞體內又ハ胞體 然レドモ概シテ幼若ナル動物ハ、 鱗片又ハ層板狀ヲナシテ剝 斯ル特殊ノ角質變性ヲ見ル場合ハ、角化層極 胞體 共二固有膜 老動物ニア = 形ノ空隙ヲ存シ粗網狀ヲ呈ス、 シテ特ニ顆粒層ト認ムベキモノ無ク 外ニ粗大顆粒狀ノ 有核層トノ間ニ多少 表層ヨリ次第 1 リテハ粘膜上 増生ヲモ伴 外二集積 而シテ幼岩 胞體ハえおじんニテ = 核染性物質ヲ不規則 ス (第六圖) 雕 E 剝脫 老イタル 皮 ス 絾 規則 ルコトナク、 ノ肥厚 ナル動 毛狀乃至 ス E iv Œ 而シテ角層 二七不拘 カブ 斯 物 動 シ ハ主ト 故二 丰 ル特殊 深部 物ョリ 前 角 角 本 3

シテ恰 モ 心室 21 7 瘍ヲ形成シ、 開 海 スルコトアリ。 綿様ノ構造ヲ呈スト雖モ、一様ニ増厚セル爲メ粘膜ノ堤狀皺襞又ハ凹窩ヲ見ルコトナク、恰 + 1 13 充 M IV カジ セ 如 ル為メル 他ノ胃底壁モ亦一般ニ中等度ニ肥厚シ、 丰 觀アリ。又他ノ一例ニ於テハ胃底壁ノ一部翻轉シ之レヲ核心トシテ小指頭大 切檢スルニ胃底部 漿膜面 八淡紅 ハ略圓錐形ニシテ内腔ハ著シク狭小セラレ、上皮層 色ヲ呈シ、 一般 = 抗 輕キ堤狀皺襞ヲ呈シ 抵 强ク表面滑 澤 ニシテ恰 タル E Æ 心臟 , 7 リキ い厚ク

顯微鏡的所見

顯微 第一期 粘膜上皮ノ増生及强角化 只便宜上左ノ四期ニ分テ記載セント 全ク 鏡的變化ハ、大體ニ於ラ肉眼的變化ト、 ifii シテ 的 單 ニシテ彼此相通ズルモノアリ。 純 ナル粘膜上 皮 ノ肥厚増 生ョリ、 其所見ヲ同クシ、唯其ノ病的變化ノ成立ヲ詳細 從テ各時期二於ケル 變化ヲ 截然分離記載 異型的增息乃至癌性變化ニ至ル、 諸階級へノ移 スルヲ得 ニスル

ノ如 ヲ見 形 ア五里は形ノ空隙(最近マデ本蟲ノ寄生シ居リシ痕跡)又ハ空隙内ニ本蟲ノ橫斷、 見ルコト " 1 本 E 如 ルク本蟲 蟲 ノニシテ、空隙ノ周圍ニアル細胞ハ蟲體ノ為メニ壓迫セラレテ扁平トナリ且ッ多少濃染ス。 25 少カラズ。 ク上皮層内ニ寄生シ、 21 常二 粘膜上皮、 特二 脉 其部ニテ排卵スルガ故ニ、表層上皮又ハ角質内ニ於ラ、本蟲 芽層ニ近ク寄生スルガ故ニ、切片標本ニ於ラ 斜斷又ハ縦斷 此 部

- 膜上皮ノ肥厚増生ハ、本蟲感染後ノ經過日數ト寄生蟲數ノ多寡トニ因ル モノ ナ ルハ勿論ナリト

瑚 シテ上皮索 ハ上皮細胞ノ極メラ容易ニ且ッ自動的(原發性)ニ深部ニ向ラ發育増生スルヲ示スモ 接也 樹狀ニ増息スルトキハ、 1. Blastom Æ 斯 ル上皮索ノ間ニ痕跡狀ヲナセルニ 肥厚増生セル粘膜筋、叉ハ固有膜ノ結綿織纖維内ニ侵入シ、 Ŀ ル定型的 トラル ノ粘膜下層中へノ侵入ヲ妨グ 皮細胞索 ムベキ構造ヲ呈 乳嘴腫ノ形成ハ稀ニシテ、多クハ間質ヨ ノ自主 夫レニ伴フ粘膜上皮ノ増息アリテ粘膜面ハ絨毛狀乃至乳嘴腫狀ヲ 的二深部 スルコトアリ ^ 向テ發育增生スルト共二、 過ギ ルトキハ、 べ (第六圖)。 多数ノ上皮細胞群ハ長短種 之ニ反シ 固有膜 リモ上皮細胞ノ増息顯著ニシテ、 、其部ニアル固 所謂纖維上皮性腫瘍 Fibrocpith-1 表面二 ヤナ 有膜並ニ粘膜筋ノ増 in 向ラ樹枝狀又ハ ノナレ ŀ ノ小突起 モ 呈ス 他

期、 癌腫・同初期及同移行型ノ發生

n 1 Ŀ = カブ 性間接分剖像 7 如キ癌 皮性腫 シテ癌 デノ移行 胞 期 癌腫・同初期及移行型ニ属スル組織的所見ハ大體ニ於テ山極・市川(町山)氏等ノ分類 ノ性狀 及第 初期及同移行型トセル者ハ、上皮索基底ノ限界平等ナラズ、 瘍 ノ如キ、造構ヲ呈スル 大體生理的ノモノト大差ナ 期ニ於テ ニシテ、 願ル徐 性狀ヲ獲得 な二 異型的分剖 ハ上述セル 2 セルモノナ テ明確ナル境界ナク、 像ヲ ガ如ク モノアリシト 呈 カリキ。 ク、上皮索基底層ニ存在スル多數 ス n 粘膜上皮ノ Æ ノナ 雖、 然レドモ上皮増息ノ初期 然カモ各例(各動物)ニ依リ其經過 7 未ダ所謂 肥厚增生、 其排列 異型 Æ 亦略 的 强角化、 凹凸参差シ、其部ョ 異所 ~ 生理的 ヨリ癌性變化ヲ 上皮性陰窩、 ノ核分剖像ハ、 的 増生ノ域ヲ脱 ニシ ラ 同 = 무 以下記載 リ不規則 何レモ相 從ヒシ ナラズ。 スルニ至 セ 嘴 べ。 腫 Ŀ æ

○横川・一新ごんぎろれーまノ寄生ニ因ル鼠前胃、食道、舌及口腔粘膜ノ表皮痛ニ就テ

C 期二 好 好細胞が 細血管 於テ 八上 1 充張えおじん 上皮 細 胞 1 嗜好細胞 肥厚增生上共二固 冰 巴細胞及ぶらすま細胞 有膜及粘膜下層二 IV = þ ノ浸潤ヲ見ル 1 常二 多少 1 Æ 炎 ノニ 性 浸 2 潤 テ、 7 伴 特 = え E お

第、 =, 期、 E 皮ノ深部増生・上皮性陰窩及乳嘴腫形と皮層ノ基底部ニ近ク固有膜内ニ集積ス 成

粘 繞 斯 初 胞 細 膜 " 片 索 セ 如如 標本 膜上 F ラ 7 胞 層 形 索 V 其 = 1 皮 " 成 r 粘膜下ニ 7 間 ス 10 定數 表面 iv リテハ、 = え 細 斯 --血管及淋巴管 おじん嗜好細胞 iv 侵入シタル細胞群ノ周圍ハ、粘膜筋 細 固 间 胞 有 粘膜下 ラ發育増生スルト共ニ、其一部ハ深 索 膜 並 21 層二 抵 = 粘膜 抗 25 充張シ是等細 圓形、 少キ ・淋巴細胞・ぷらすま細 筋ヲ 粘膜 橢圓 歴 追シ、 下 形 ニア 又ハ梨子狀形 胞 リテ、急ニ擴張性 ノ浸出 終ニハ之ヲ壓開 ノ一部及織 胞 7 見 及纖 部 1 IV = 細胞 維形成 间 7 ŀ テモ シラ粘膜下二及ビ葱根狀ヲナセル細 維 島 = 117 性 増息シ ŀ 紅細胞 71 亦 結 3 ラ 發育増生スルモ テ 締織 ズ ノ浸 認 球形乃至蕪狀ヲ呈 ノ肥 × 潤 ラ 7 厚增 iv 見 • IV 生 7 ノニ Æ F 1= 依リテ、園 少 2 71 ス、從テ 2 テ、 ラズ、 1:

ラ ラ 近 1 1: 該囊腫 規 3/ 17 ラ 位 則 IV 終二 細胞 2 E 1 陰窩內 3 不斷其 21 島 1 大ナ 部 25 角 周 1 = 部 常 層 邊部 ,, IV ノ上皮ヲ刺戟 殆常ニ本蟲 囊 ŀ 胃 有 腫 = 向 腔 核 7 テ、 層 形 ŀ 成 交通 þ ス 擴張 1 ノ寄生ヲ 2 移 7 更二 粘膜下 IV 行 スルト ガ故 部 見 周 -·共二其· 圍 H IV = -フ氏 500 アル細 組 E 織 1 内 11 U 1/1 之レ 央部 1 胞島 -あ ラ、 6 向テ其増生ヲ ん顆粒 ヲ上皮 ノ角化 11 次第 此 ノ場 性 7 現 = 陰窩 角化 合 有 像 慫慂 = ス 21 實驗 於テ シ、 IV Epithelkrypten 顆 ス 粒 角化 n Æ 動 過體 層ヲ 物 Æ 物質 10 1 見 長 28 主 如 iv 幼 21 次第 F h -7 = C 2 關 PF: ŀ 斯 テ 3 12 ~ = り。 ノ如 肧 2 ズ 共 茅層 中 概 井 多 而 = 所 老 7 3

N テ被 肝臟及雨肺 7 ハ紡錘形ノ上皮細胞群アリテ其中心部ニアル上皮細胞 ガ如キ 余ノ實驗ニ於テ癌腫ト認ムベキモノ三例中、二例ニ於テハ腹腔淋巴腺ノ腫大、附近臟器トノ癒著及 ハシ 氣管枝上皮ノ化生ニ依リ斯 ニテ圍マレ、 = ハレ居ル 小膿瘍ヲ認 4 像ヲ示セリ(第十二圖)。從テ本例ニ於テハ前胃癌 = モ, 抵抗強キ 必ズシモ癌轉移竈ノ乾酪化シ 内二乾酪化物ヲ充セリ。 メシモ、 數個ノ灰白點ヲ認メシモノニシテ、鏡檢上是等ノ灰白點ハ、比較的厚キ新生結 鏡檢上 ル所見ヲ呈スルコト稀ナラザレバナリ。 |癌腫ノ轉移ヲ證明セシモノ一例(第二十四號)ニシテ、 而シテ肺ニ於ケル乾酪化竈ノ周壁ハ、一部重層扁平上皮ニ タル モノト い著シク扁平トナリ将ニ 斷ズルヲ得ズ。何トナレ ノ轉移ニ依 ルモ 然ルニ其周壁ニアル淋巴隙内 ノト解 癌珠ヲ形成 ス バ斯ル慢性炎ノ結 ルノ正當ナルベ 同例ニ於テハ ント 丰 ス

見二於テ記載セントス。 -本蟲ノ寄生ニ 依ル癌腫・癌初期及移行型ト認ムベキ モノヲ 表示シ、更ニ其肉眼的及顯微鏡的 所

第六表 癌腫・癌初期及移行型ニ属スルモノ

	1110.0		七九	五〇七——四二一	+	癌
巴腺腫大 巴腺腫大	九五・○	七六•0	一三七	四二一四〇	=======================================	B
腺腫大腺腫瘍腹部淋巴	八五・〇	六0.0	九二	二三六———	= [79]	重
	七五・〇	五三・〇	九〇	二〇七 四四	三五	癌
備考	剖檢時ノ體重	ノ鷺シ	餌食油蟲數	實驗開始後ノ日數	動物番號	

○横川・一新ごんぎろれーまノ寄生ニ因ル鼠前胃、食道、舌及口腔粘膜ノ裘皮痛ニ就テ

Ti.

4: ナ ラ 3 紡 4: 1) 此 錘 1 的 細 セ 1. 較的 囊腫 形 厚 N 連 長 又ハ管狀ヲ 續 叉 粘 皮性 セ 壁 膜 健 IV 3 y, 固 上皮 陰窩 紡錘 全ナル上皮細 3 1) 有 自 膜 周 形 1 7 基底部 働的 粘 圍 有 呈シ其一 1 細 膜筋 2 ノ粘膜下層ニ向ラ同 胞 = 粘膜 性突起 胞 解 乃至粘膜下層二 ョリ不規則 定數 放 3 リモ淡染スル部ヲ生ジ癌 下 2 ·層中二 7 ニアリテ 出 個々二 ナ シ、粘膜筋ヲ突破 比較 ル細長又ハ紡錘 分離發育セント 向テ 21 樣 既二中心 的 浸潤 突起ヲ派出ス。斯ル突起ハ互ニ相連絡シテ網狀ヲ呈シ、 高 度 11: 1 炎性 部 = 2 珠 發育增生シ、或者ハ既ニ其部ノ淋巴隙ニ入リ = 形 テ粘膜下層ニ 形成 スル 浸潤ヲ 角 ノ細胞性突起ヲ出 體 ノ傾 ガ 癌 有 如 珠 ス 向 + ル場合 7 7 傾 浸潤 形成 向 ルモノラ云フ。 ヲ有 性 シ、 = せ = 見 IV 2 增 又ハ ル -E 息 -E ノア シ、 大ナル上皮性陰 ノニシテ、 まどきしりん り。 細 斯ノ如キ 胞 自己モ其 變化

他 波 胃 12 癌 庇 性 斯 第 例 突起 部 膜 巢 IV 四、 歸 變化ハ更ニ進ミテ、組 F ノ如キ、 期、 重層 於テ 膜二 於テハー " 癌腫轉移 粘膜下 沿ヒテ、 漏 胃壁內二上皮性陰窩乃至囊腫 in 平 Ŀ 個 粘膜下層 乃 形成 唇二向 見 皮 浸潤 至 IN 數 7 テ、 幽 性 個 will ŀ 門 於 織 -T 角體 ケル 發育シ胃底 顯著ナル IJ 部 的 諸 -性狀 向 浸潤性發育 癌 ラ 珠 浸潤性發 擴 ノ具備 7 張 部 性 形 3 ノ多數ヲ有 " 成 セ ŀ 發育 幽門部 共 育ヲナシ、擴張セル淋巴隙ニ 2 IV 癌腫ト 增 粘膜下層二 粘膜 息 -ス 万リテ iv ナルモノニ 2 ÷E 鲌 爲 ノニアリテハ、 = 於テ 擴 メニ 於テ固 延 シテ、 幽 毛 3/ 本 有ナル 門 ツ・ア 蟲 部 上述ノ如キ不規 一ノ寄 = 沿ヒテ増息シ、 囊腫 癌 ルヲ見 7 生二 IV 腫 固 間 ノ像 有 因 IV -胃腺 殘 テ、 (第十圖)。又 ヲ呈シ、 存 増生セ 稍一大 則 セル橋状 1 萎縮壞 ナ iv

ヲ形成シ、其一定數ニ於テハ中央部ニ角體 Hornkörperchen ヲ形成セルモノアリ。

筋繊維ハ更ニ上皮索ノ,浸潤性增息ニ依り不規則トナリ,爲メニ上皮性陰窩,細胞島ノ間ニ殘留セル粘膜下層中ニハ,新生結締織ノ 胞ヲ見ルモノニシテ、同時ニ細血管ノ新生、充張及淋巴隙ノ擴張セルモノ少カラズ。 他,不規則ナル筋織維ヲ見ルモノニシテ,其ノ間ニハ多數ノふいぶろぶらすてん,えおじん嗜好細胞,少數ノ淋巴細胞及ぶらすま細 上皮索ノ深逸性增息ニ伴ヒ、粘膜筋モ亦不規則ニ增生シ,上皮性陰窩ノ周闍ニハ,不規則ナル紡繊維ノ増息ヲ見ルモノニシテ,斯ル

癌初期 第一例(動物番號第十七號)

實驗《大正十一年七月十五日ヨリ,同年十月二十五日ニ至ル期間,毎日又ハ敷日日ニ一疋乃至三疋ノ油蟲ヲ娯ヘタルモノニシテ,

大正十二年十二月四日死亡,實驗開始後五〇七月乃至四一一日。

監重 實驗開始時ノ體重百○五瓦。

解屍時ノ體重百三十五。

肉眼的所見(第三圖)

體格大,榮養比較的良

澤ナルモ胃底部ハ一般ニ抵抗強ク、乳白色ノ皺襞及斑點アリテ、其部ハ僅ニ膨隆セリ。胃ヲ開橡スルニ胃底部ノ粘膜ハ奢シク肥厚シ、 大小種々ナル上皮性陰窩乃至細胞島ヲ認ム。 表面組織ニシテ 絨毛標ヲ呈シ,胃壁ハ○•八乃至一•三糎ノ厚ヲ有シ胃底部ノ内腔ヲ殆ンド充塞セリ。粘膜下層ハ著シク増厚シ共部ニ 腹腔ヲ開楡スルニ胃底部ハ蓍シク増大シ、全胃ノ三分ノ二ヲ占メ、幽門部ハ僅カニ其一部トシ認メラル、ニ過ゼズ。漿膜面ハ濕潤滑

新得數的所見

ノ増生ニ及パブ。從テ切片標本ニ於テハ個々ノ上皮索ノ間ニ、微量ノ結縮總纖維ヲ見ルモノニシテ、上皮細胞ハ是等ノ結縮機纖維ヲ 胃底部粘膜特ニ上皮層ノ著シキ肥厚増生ト共ニ固有膜モ亦表面ニ向テ琦息シ乳鳴腫狀ヲ呈ス。然レドモ固有膜ノ增生ハ遙ニ上皮層

〇横川・一新ごんぎろれーまノ寄生ニ因ル泉前門、食道、舌及口腔粘膜ノ表皮癌ニ就テ

一八三・〇	ス三・〇	九九) - 7.t	五〇	三六	福移行型
1011.0	八七〇	二六二	一 ラ	五七五	=======================================	拟
	0.1110	一七九	10	五〇九	元	初

癌腫移行型 第一例(動物番號第三十六號)

大正十二年七月二日ョリ、同年十二月十二日ニ至ル期間、每日又ハ敷日日ニ、木蟲ノ中間宿主ナル油蟲ヲ一疋又ハニ疋宛。

與ヘタルモノニシテ餌食シタル油蟲ノ總數九十九正。

大正十三年三月八日屠殺實驗開始後生存期間二五〇日乃至八七日。

解屍時ノ體重百八十三五。重 實驗開始時ノ體重八十三五。

区眼的所見

漿膜面ハ滑澤ナルモ、帶黄灰白色ノ結節樣斑點アリテ,其部ハ僅カニ膨隆シ抵抗强シ。胃ヲ開檢スルニ粘膜ハ肥厚シ、且ツ中等度 體格大,榮養比較的良,腹腔ヲ開檢スルニ胃底部ハ蓍シク增大シ全胃ノ約牛ヲ占メ幽門部ハ縮小シテ肝臓下ニ退縮セリ。胃底部ノ

顯微鏡的所見(第八圖)

腦廻轉樣皺襞ヲ呈セリ。

周邊ニ向テ多數ノ綱長ナル突起ヲ出シ、爲メニ上皮層ノ基底部ハ凹凸参差シ、頗ル複雑ナル構造ヲ呈シ、細胞自己モ其生理的連續ヨ リ自働的ニ解放シ、個々ニ分離發育セントスルが如キ傾向ヲ有シ、自由ニ粘膜下層中ニ浸潤性ニ發育シ、其部ニ大小種々ナル細胞島 モ本例ニ於テハ、特ニ粘膜上皮ノ深逢性增息著シク、粘膜下層ニ著大ナル上皮性陰窩ヲ形成シ、同陰窩ノ周壁ニアル上皮層ハ、更ニ 胃底部ノ粘膜ハ著シク肥厚シ、普通ノ三、四倍ニ逢シ、部位ニ依リ固有膜ノ堵生ヲ伴ナヒ、乳嘴腫樣增息ヲ替メル所アリ。然レド

剝脱シ、其ノ部ヨリ一圧ノ雌蟲ヲ露出セリ。 り。胃腔内ニ突出シタル球形ノ腫瘤ハ、胃底部ノ一部熱轉シテ生ジタルモノニシテ、其表面ハ糜擦セラレ易ク、爲メニ一部ノ粘膜へ

期得翻的所見

索ハ自働的ニ分離増息ノ傾向ヲ示シ,其間ニ浸潤性ニ擴ガリ,深部ニ於クルモノハ中心部ニ角體ヲ形成シ組織的諸性狀ノ全ク癌性化 長ナル突起ヲ出シ、爲メニ粘膜筋ハ著シク其ノ排列ヲ鼠シ、結締織纖維モ亦※少硝子榛變性ヲ呈セルモノアリ。其間ニ侵入セル上皮 継い膨大シ細胞ニ芝シク粘膜上皮モ亦朝離シ、僅ニ粘膜筋ノ間ニ、不正形ノ細胞群トシテ認メラル、ニ過ギス。之レニ反シ他ノ一牛 ハ浮腫性變化少り、粘膜上皮ハ廣キ上皮性陰窩トシテ脳凹シ、更ニ他ノ部ニ於テハ上皮層ノ基底ヨリ、粘膜筋乃至粘膜下層ニ向テ細 張シ、粘膜下層ハ省シク浮腫狀トナリ、靜脈細枝及淋巴瞭ノ擴張セルモノ少カラズ。特ニ其一半ハ著シキ鬱滯性變化ノ爲メ結締機機 層ニ於テ大小種々ナル上皮性陰高乃至細胞島ヲ形成シ,一部ハ粘膜筋及固有膜ノ省シキ増息ニ依り,繊維上皮性腫瘍ノ如キ構造ヲ ルモノアリ。之レニ反シ他ノ胃底部ニアリテハ一部ハ表面ニ向テ乳嘴腫様ノ増息ヲ營ミ,一部ハ深部ニ向テ擴張性ニ増息シ、粘膜 胃底部ノ一部翻轉シテ生ジタル、球形ノ腫瘤部ハ他ノ胃底部ト共所見ヲ異ニシ、筋層ハ蓍シク肥厚シ、漿膜面ニ於ケル細血管ハ充

細胞及ぶらすま細胞ノ浸潤アリシモ、概シテえおじん嗜好細胞ノ發現少カリシハ多少注目ニ値ス。 本例ニ於テモ亦他ニ種々ナル寄生蟲ヲ宿シ居リシニ拘ラズ粘膜及粘膜下層ニ於テハ部位ニ依り多數ノふいぶろぶらすて人又ハ淋巴

播教製 第三例(動物潛號第十三號

實驗 | 大正十一年五月十九日ヨリ、翌年一月二十四日ニ至ル期間,及大正十二年五月十日ヨリ,同三十日ニ至ル期間,及同年八月 二十三日ョリ九月二十七日ニ至ル期間,及同年十一月三日ヨリ同八日ニ至ル期間,隔日又ハ數日ヲ隔テ、油蟲ノ、一疋又ハ 二正ヲ餌食セシメタルモノニシテ、與ヘタル油蟲ノ總數ハ箕二二百六十一正ノ多數二上レリ。

大正十二年十二月十五日死亡,實驗開始後生存期間,五七五日乃至三八日

體重 實驗開始時,體重八十七五

〇横川・一新ごんざろれーまノ寄生ニ因ル鼠前胃、食道、舌及口腔粘膜ノ表皮痛ニ就テ

基底トシテ増生スルガ故ニ、横斷面ニ於テハ相觸接セル多角形ノ上皮細胞群ヲ見ルモノニシテ肧茅層ハ周邊部ニ、角化層ハ中心部ニ 見ヲ呈ス。斯リノ如り粘膜上皮ハ表面ニ向テ肥厚增生スルノミナラズ、深部ニ向テモ亦、發育增生スルモノニシテ、粘膜下層ニ於テ 位シへまときしりん、えおじん染色ニテハ周邊部ハ紫色ニ中心部ハ紅色ニ,兩者ノ間ハ淡紫色ヨリ淡紅色ニ移行シ、頗ル美麗ナル所 二向テ多数ノ細長ナル突起ヲ出シ、浸潤性増息ノ傾向アルモノアリ。 ハ直徑五粍以下ノ上皮性陰窩乃至細胞島ヲ形成シ、更ニ是等ノ上皮性陰窩乃至細胞島ノ間ニアル粘膜下層中ニ網長ナル突起ヲ出シ、 於テ、旣ニ角體ヲ有スル上皮細胞群ヲ見ルコトアリ。又上皮性陰窩ノ或ルモノハ規則正シキ細胞ヨリ被ハル、モ、或モノハ周邊郡 ルモノハ細胞楽ヨリ離レテ浸潤性ニ増息シ、或ル部ニ於テハ上皮細胞群ノ靜脈細枝ヲ栓塞セルモノ、或ハ違ク、幽門部ノ粘膜下層

少シ,然モ本例ニ於テハ本蟲ノ他,肝臓ニハ Cysticercus fasciolaris ヲ,腸ニハ Hymenolepsis diminuta u. Hymenolepsis murina ノ多 數ヲ寄生シ居リシモノニシテ、えおじん嗜好細胞ノ發現多カルベキ筈ナルニ却テ少キハ多少注目ニ値ス。 粘膜及粘膜下層ニ於テハ、多數ノふいぶろぶらすてん、淋巴細胞及ぶらすま細胞ノ浸潤アレドモ、えおじん嗜好細胞ノ浸潤極メテ

癌初期 第二例(動物番號第十八號)

實驗 大正十一年七月十五日ヨリ、翌年一月二十九日ニ至ル期間及大正十二年五月十日ヨリ、同年九月二十七日ニ至ル期間、 大正十二年十二月六日死亡、實驗開始後生存期間,五〇九日乃至七〇日 父ハ籔日目ニ、一疋父ハ二疋ノ油蟲ヲ與ヘタルモノニシテ餌食油蟲ノ總敷ハ實ニ百七十九疋ニ逢セリ。

割檢時體重百四十二五。重 實驗開始時ノ體重百十二五

肉眼的所見一第一圖

體格大, 祭養比較的

1/中央ニハ、略ポ豌豆大ナル球形ノ腫瘤アリテ、共内腔ヲ充タシ、他ノ粘膜面ハ粗糙ニシテ僅ニ肥厚シ、輕キ腦廻嘛樣皺襞ヲ呈セ 胃底部ハ俗凹シ且ツ胃全體ハ縮小シテ肝臓下ニアリ。漿膜面濕潤滑澤ニシテ、僅ニ帶黄灰白色ノ皺襞ヲ透見ス。胃ヲ開檢スルニ胃底

脳廻轉標皺襞ヲ透視ス。開檢スルニ胃底部ノ粘膜ハ肥厚シ,輕キ腦廻轉標隆起及其ノ間ニ大小種々ナル不正形ノ凹窩アリ、表面粗糙 ニシテ絨毛狀ヲ呈ス。

顯微鏡的所見(第十一圖)

二於テ浸潤性ニ増息シ、敷個ノ細胞ハ一群ヲナシテ組織間隙ニ擴がり、稍大ナル細胞群ニアリテハ一個又ハ敷個ノ角體ヲ形成シ、 層ノ基底部ハ細長ノ突起ニ分レ、粘膜筋層ニ向テ侵入シ、爲メニ粘膜筋ハ其排列ヲ亂シ、上皮細胞ト共ニ違ク。粘膜下層ニ及ベルモ ぶらすま細胞及少數ノえおじん嗜好細胞ノ浸潤アリ更ニ他ノ部ニアリテハ、前述ノ如キ乳嘴腫機増息ノ傾向少ク、多少肥厚セル上皮 底部ョリハ網長ナル突起ヲ粘膜筋乃至粘膜下層ニ向ケ發生シ、爲メニ粘膜筋ハ其排列ヲ亂シ、其間ニふいぶろぶらすてん、淋巴細胞: ノアリ。粘膜下層中ニアル上皮細胞ハ"他ノ比較的健全ナル上皮細胞ヨリモ肥大シ"へまときじりんニ淡染シ,肥厚堵生セル結締織内 薄の炎性浸潤モ亦隨テ少シ。 癌腫ノ特徴ヲ具備セルモノアリ。而シテ腦廻轉樣隆起ノ間ニ介在セル凹陷部ハ、本蟲ノ寄生アルモ粘膜上皮ノ肥厚少ク、粘膜下層 臘翅轉模隆起部ニ於テハ、粘膜上皮ハ著シク増厚シ、癌初期第一例ニ見タルが如キ特有ナル乳嘴腫模増息ヲ警ェ、更ニ上皮層ノ基

痛腫 第二例(動物番號第二十四號)

轉移形成第一例

食油蟲總數九十二正。 實驗大正十一年九月十五日ヨリ,翌年一月二十六日ニ至ル期間,毎日又ハ數日日ニー疋乃至數疋ノ油蟲ヲ與ヘタルモノニシテ、餌

大正十二年五月九日死亡。 餌食試驗關始後 / 日數,二三六日乃至一三一日。

剖検時ノ體重八十五五。

實驗開始時ノ體重六十五。

肉眼的所

體格中、榮養極メテ不良。

〇横川・一新ごんぎろねーまノ答生ニ因ル鼠前胃。食道、舌及口腔粘膜ノ表皮癌ニ就テ

剖檢時體重一〇二五

夾腿的所

體格大、榮養極不良。

少量ニ含有ス、殘渣内ニニルノ本蟲ヲ證明セリ。 **歪帯狀斑ヲ透見ス。開楡スルニ粘膜面ハ粗稔ニシテ輕キ腦廻轉樣皺襞ヲ呈シ,其間ニ不規則ナル凹窩ヲ見ル,胃内ニ咖啡殘渣機物ヲ** 胃底部の増容セルモ、胃の空臓ナルタメ全體トシテハ其ノ増容著シカラズ、紫膜面の滑澤ニシテ、胃底部ニ於テハ乳白色ノ點狀乃

顯微鏡的所見(第九圖)

絡シテ網狀ヲ呈シ更ニ深層ニ向テ浸潤性ニ擴ガリ、其一部ニ於テハ旣ニ癌珠ヲ形成セルモノアリ。斯ノ如ク上皮索ノ浸潤性增息ニ依 上皮性陰窩又ハ繝胞島ヲ形成シ陰窩ノ周璧ヲ成セル上皮層ノ基底,及粘膜上皮ノ基底部ョリ繝長ナル突起ヲ出シ,是等ノ突起ハ相連 部二於テハ粘膜下層ノ多少浮腫狀ヲ呈シ細胞性成分ノ少キ所アリ 胃底部ノ粘膜上皮ハ、諸所ニ於テ大小種々ナル凹窩ヲ形成シ、表面ニ向テハ輕キ乳嘴腫樣增息ヲ示シ、深層ニ向テハ大小種々ナル 粘膜筋ハ著シク其排列ヲ隠シ,其間ニふいぶろぶらすてん,淋巴細胞,ぶらすま細胞及少敷ノえおじん嗜好細胞ノ浸潤アリ。尙

福曆 第一例(動物番號第三十五號)

大正十二年七月二日ヨリ、同九月二十七日ニ至ル期間,及同十一月三日ヨリ同十二月十二日ニ至ル期間,隔日又へ數日日ニ 一疋又ハ二疋ノ油蟲ヲ與ヘタルモノニシテ、餌食油蟲總數九十疋。

大正十三年一月二十五日死亡,實驗開始後生存期間二〇七日乃至四四日。

配重 試験開始時ノ體重五十三五。

剖館時ノ體重七十五瓦

改即的所見

胃ハ全體トシテ著シク縮小セルモ、胃底部へ膨大シテ抵抗强ク,質質性肉質樣ノ外觀ヲ呈シ,栗膜面ハ馮潤滑澤ニシテ,乳白色ノ

コト壓、ナルハ此間ノ消息ヲ語ルモノトシテ多少注目ニ値ス。

癌腫 第三例(動物番號第二十三號)

轉移形成

大正十一年九月十五日ヨリ、大正十二年一月二十九日ニ至ル期間、及大正十二年五月十日ヨリ、同年九月二十七日ニ至ル期 間,隔日又ハ數日目ニー疋又ハ二疋ノ油蟲ヲ與ヘタルモノニシテ,攝取シタル油蟲ノ總數百三十七疋。

大正十二年十一月五日屠殺解屍內。實驗開始後四百二十一日乃至四十日。

體重 實驗開始時,體重七十六五。

剖檢時ノ體重九十五五。

医眼的所見(第二圖)

體格大 榮養極不良。

肥厚者シク爲メニ,其一部ハ遠ク幽門部 ニ マ デ 突入シ,殆胃ノ内腔ヲ充塞セリ,粘膜面ハ粗糯ニシテ,不規則ナル廣キ膨隆ヲ形成 共部ニ異常組織ヲ見ズ。漿膜ハ概シテ濕潤滑澤ニシテ乳白色ノ不正形斑紋ヲ透見シ得ベシ。開檢スルニ胃ハ空虚ナレドモ,胃底部 切面二於テ大小種々ナル異常組織ノ集團ヲ見ル。 シ、其間ニ不正形ノ凹窩又へ淺溝アリテ全部腫瘍ヨリ成レルが如キ外觀ヲ显ス、切檢スルニ胃壁へ直徑一・○乃至一・三糎ノ厚ヲ有シ 胃底部へ著シク増大シ、全胃ノ約五分ノ四ヲ占メ抵抗頗ル强ク、腫瘍塊ニ觸ル、か如ク、其一部ハ肝臓ノ前下繰ト輕ク癒著セルモ、

經微鏡的所見(第十圖

細血管ハ充張シ、淋巴隙ノ擯張セルモノ亦少カラズ。其間ニ多數ノえお芒人嗜好細胞、ふいぶろぶらすてん、淋巴細胞及ぶらすま細 間ニ介在セル組織内ヲ,擴張性又ハ浸澗性ニ發育增生ス。從テ粘膜筋ハ其排列ヲ亂シ,粘膜下組織内ヲ不規則ニ走行ス。粘膜下層ノ 胃底壁ハ渚シの肥厚シ,厚キ粘膜下層中ニ著大ナル上皮性陰窩,又ハ角質ヲ充塞セル嚢腫樣上皮腫ヲ形成シ,表層ニアル粘膜上皮 表面ニ向テ固有ノ乳端腫様増息ヲ營ムノミナラズ**、**深部ニ向テモ**大小**種々ナル長キ突起ヲ出シ、上皮性陰高又ハ囊腫樣上皮腫

小種々ナル凹窩アリ、切檢スルニ粘膜上皮ハ表面ニ向テ肥厚セルノミナラズ粘膜下ニ向テ増息シ、上皮性陰窩及細胞島ヲ形成セリ。 斑紋ヲ透見ス。開檢スルニ胃底部ノ粘膜ハ著シク肥厚シ、表面ハ粗糙ニシテ、絨毛狀ヲ呈シ、不正形ノ腦廻轉樣隆起ヲ呈シ其間ニ大 胃ハ空歳ナル爲メ全體トシテハ却テ縮小セルモ胃底部ノミハ增大シ抵抗亦强シ。漿膜面滿潤透明ニシテ、灰白色ノ不正形腦廻轉樣

無荷館台角男

粘膜下層ニ向テ細長ナル突起ヲ出シ、該突起ハ粘膜下層ニ於テ浸潤性ニ擴ガリ、角化性强キ癌性變化ヲ呈ス、粘膜下層ニ於ケル癌性 腦翹轉樣隆起ノ間ニ介在セル部分ハ粘膜上皮竝ニ粘膜下層ノ肥厚増生少ナク,炎性浸潤モ亦従テ少レ。 浸潤籠ハ特ニ炎性浸潤強ク,其間ニ在ル癌巣ハ多クハ敷個ノ細胞ヨリ成り,中ニハ全部角化セルモノスラアリ,粘膜上皮ノ増生強キ 腦廻轉樣隆起部ニ於テハ、粘膜上皮ノ著シキ肥厚增生ニ依リ、固有ノ乳嘴腫樣構造ヲ呈シ,同時ニ上皮層ノ基底部ヨリ,

朝移形成(第十二篇)

的厚キ結締織堤ニテ闡繞セラレタル乾酪化竈ニシテ,中央部ハ難染性微細顆粒狀物ヨリ成リ,周縁ニ近ツクニ從ヒ,核染性微細顆 **同樣ノ灰白結節ヲ認メシモノニシテ、是等ノ結節内ニハ灰白色乾魪樣物ヲ充タシ,其外圖ハ比較的厚キ繊維樣ノ構造ヲ呈セリ。** アリテハ小膿瘍モ、忽チ附近ノ氣管枝ト交通シ、其壁ハ団柱上皮ニテ被ハルルコト多シ。従テ本例ノ如キ慢性ノ經過ヲ取リタルモノ ١ 本例ニ於テハ肝臓ニ一個ノ栗粒大灰白點ヲ認メ、左肺上葉及中葉ノ上部ニ於テ、灰白色ノ小結節ヲ、右肺上葉及中葉ニ稍く大ナル 於テハ、周壁ノ一部或ハ大部ハ重層扁平上皮ニテ被ハレ、恰モ癌腫ノ轉移窳ノ乾酪化シタルモノナルヲ思ハシム。然レドモ鼠肺ニ ヨリ成り。其間二胞狀核ヲ有スル大ナル細胞ノ少敷ヲ見ルモ、ソノ間ニ肺胞壁ノ遺殘物ト認ムベキモノナシ。斯ル乾酪竈ノ一定數 鏡檢スルニ肝臓ニ於ケル灰自點ハ,小ナル壞死證ニシテ周圍ニハ比較的强キ淋巴細胞ノ浸潤アリ,兩肺ニ於ケル灰自結節ハ,比較 在リテハ、該上皮ノ化生ニ依り重層扁平上皮ヲ附麗スルニ至リシモノナルヤモ知ルベカラズ。然レドモ一膿瘍壁ニ於テ癌腫ノ轉移 スルが如キ所見ヲ呈セリ。此ノ所見ハ胃底部ニ於ケル表皮縮ノ轉移ヲ示スモノニシテ、肺ニ於ケル膿瘍モ亦癌細胞ト同時ニ、移行 認ムベキ紡錘形!上皮細胞群ヲ證明セリ。該細胞群ハ顯微鏡的ノモノナリシモ、中心部ニアル細胞ハ著シク扁平トナリ,

タル細菌ニ原因スルモノナルヲ思ハシム、特ニ胃底部ニ於ケル癌性變化乃至深達性增息ノ、著明ナル場合ニハ兩肺ニ膿瘍ヲ認ムル

以上ノ所見ヲ總括シテ案ズルニ

um orientale n. sp. ト命名セントス。而シテ 本蟲ノ中間宿主ハ臺灣ニ於テハ主トシテ、わもんごきぶ り Periplaneta americana 及こわもんごきぶり Periplaneta australasiae ナリ 其發育史及生物學的性質ノ相近似セル爲メ、暫ク同蟲ノ一變種ト認メ本蟲ヲ Gongylonema neoplastic-ま•ねおぶらすちくむト最近似セルモ其構造同ジ カ ラズ。從テ同蟲トハ明ニ區別スベキモノナルモ、 一、余ノ臺灣ニ於テ證明シタルごんぎろねーまハフィビーゲル氏のノ發見記載シ タ ルごんぎろねー

ハ約三十%ノ比ニ寄生ス。然レドモ多クハ本蟲ノ一乃至二條ヲ寄生スルノミニテ病變ヲ呈セザル場 11、本蟲ハ臺北地方ニ於テハ廣ク蔓延セルモノニシテ自然ノ宿主ト認ムベキ家鼠 Mus decumanus

上皮層内ニ寄生シ、粘膜上皮ノ肥厚増生・乳嘴腫及癌腫ヲ形成ス。 三、本蟲ノ中間宿主ナル油蟲ヲ白大鼠ニ與フルトキハ本蟲ハ其胃底部(前胃)・食道・舌及口腔粘膜ノ

粘膜上皮ノ强角化及異所的深部増生ヲ起セシモノ六例、同上皮ノ異所的深部増息ヲ兼ヌルニ乳嘴腫又 ノ十二例ニシラ之ヲフ。ビーゲルは民ノ實驗成績ニ比スレバ腫瘍發生率ニ於ラ著シク低下セリ。即チ氏 ハ纖維上皮性腫瘍ヲ形成セシモノ五例、粘膜上皮ノ肥厚増生中等度ナリシモノ十四例、 百十六頭ノ黑白色大鼠ニ油蟲ヲ試食セシメテ、其五十四頭ニ前胃ノ癌性變化ヲ認メ、實驗開始後四 ノ實驗白大鼠六十一例中、癌腫ト認ムベキモノ三例、內一例轉移形成・同初期三例・同移行型一例・ 輕度ナリシモ

胞ノ浸潤アリ。斯ノ如ク粘暎下層中ニアリテ癌性變化ヲ呈セル上皮細胞群ハ、浸潤性父ハ擴張性ニ發育增生シ、其一部ハ幽門部ニ向 部二於テハ既二痛珠ヲ形成セルモノアリ。 - 進行シ、爲メニ固有胃腺ハ著シの炭鰈セラレ、比較的態全ナル同部ノ、粘膜下層中ニマデ蔓延シ、浸潤性發育ヲ戚スト共ニ,其一

轉移形成。

米粒大灰白結節ヲ認メシモノニシテ、肺臓ニ於テハ前例ニ類似セル限局性乾酪化竈ヲ 認 メ シ モ、末ダ確實ニ轉移竈ヲ證明シ得ザリ キ。然レドモ前例ノ所見ヨリ韓移ノ化膿セシモノナラザルヤヲ疑と居レリ。 本例ニ於テハ胃底部ハ肝臓ノ一部ト癒著シ、膵臓及其ノ周圍ニアル淋巴腺ハ著シク腫大シ、右肺ニ於テハ上下雨葉ニ、限局性ノ牛

第三 電驗動物ニ於ケル食道、口腔及舌ノ變化

甲 吹服的所見

極メテ跪弱ニシテ下層ヨリ剝蹤シ易ク、損傷部ヨリ本蟲ヲ露出スルコト稀ナラズ。口腔ニ於テハ兩頰部、口蓋粘膜、舌根部及扁桃腺部 キハ、食道ハ常ニ充質擴張シ抵抗アル索狀物トシテ脳知シ得ペク、開檢スルニ粘膜上皮ハ肥厚シテ灰白乃至乳白色ノ絨毛狀ヲ呈シ、 製過スルコト稀ナラズ。食道粘膜ニ於テ唯輕度ノ肥厚堵生アルノミナレパ、外部ヨリ之ヲ觸知シ難キモ、該肥厚ニシテ稍く顕著ナルト ニテ見ラル、本蟲ハ概シテ弱幼ナルモノ多ク、從テ特別ノ注意ヲ拂ヒテ、全部ノ粘膜ヲ分離スルニ非レバ之ヲ發見スルコト難シ。 ノ粘膜ニ寄生スルコト多ク"其ノ部ノ粘膜ハ黴ニ肥厚シテ"灰白色ノ苦ヲ附シ時トシテ其ノ部ノ中央ニ小潰瘍ヲ見ルコトアリ。日腔内 第二乃至第五表ニテセシ如ク、食道、口腔及舌ノ變化ハ胃底部ノ變化ニ比シ、極メテ輕微ニシテ豫備的知識ヲ有スルニ非レバ之ヲ

乙、顯微鏡的所見

メテ少ク、食道壁ニ於テハ稀ニ粘膜筋ヲ腫排シテ、粘膜ニ入ルモノアルモ唯小ナル細胞索叉ハ島トシテ認メ得ルニ過ギズ。粘膜上皮 ノ增生著シキ場合ニハ、寧ロ内腔ニ向テ乳階腫狀ノ増息ヲ營ム場合多シ。(第七圖) 粘膜上皮ノ増生及角化ノ模様ハ,胃底部ニ於クル粘膜上皮増生ノ模様ト同一ナレドモ,上皮索ノ深部ニ向テ増生發育スル傾向ハ極

育シテ 發育ヲ停止スルモノ多シ。 増生セ ル粘膜筋ノ抵抗減弱セル場合、又ハ抵抗薄弱ナル個所ニアリテハ、上皮細胞ハ深部 廣 |大ナル上皮性陰窩ヲ形成ス。然レドモ上皮細胞自己ハ能ク生理的連續ヲ保チ、常規ヲ逸シテ ント 粘膜筋ヲ壓排シテ粘膜下ニ侵入シ、抵抗薄弱ナル粘膜下層ニ ス ルガ如キ傾向ナク、其周圍ハ粘膜筋纖維及結繙織纖維ノ茂生ニ依リ、 於テハ、更ニ 包圍セラレテ 二向テモ亦 大性 二一發 擴

亢進ト 増生ヲ營ミ難カリショ示スモノナルベシ。 實驗例ニ於テハ食道壁ニ癌性變化ヲ認メザリシハ勿論、粘膜上皮ノ異所的深部増生ヲ見タル場合モ 育惡シク、其ノ外圍ハ抵抗強キ食道筋ニ觸接スルガ如キ臓器ニアリテハ、假令多數ノ本蟲ヲ寄生スル ŀ アルモ、 癌腫ヲモ 認ムベキ程度ノモノナルガ故ニ、食道ノ如キ粘膜筋ノ發育良好ニシテ、 斯ノ如ク 過ギザリキ。尚すびろぶてら癌ノ實驗ニ多大ノ經驗ヲ有スルフィビーゲル氏®モ食道壁ニハー 證明シ得ザリシコトヲ記載セリ、思フニ同氏ノ例ニ於テモ食道ノ粘膜上皮ハ異所的 粘膜上皮ハ表面ニ 本蟲ノ寄生ニ因ル上皮細胞ノ發育增生ハ、少クトモ初期ニ於テハ生理的增生機能 向テノミ増生シ、 異所的深部增生ヲ營ム場合極メラ稀ナリ、 加フルニ 粘膜下層 從テ余

7 異 他ナラザルガ故ニ、従來人工的癌腫發生ノ實驗竝ニ慢性炎性竈ヨリ癌腫ヲ形成 タル上皮細胞 斯ク が如 削 ク本蟲ノ寄生ニ依ル、粘膜上皮ノ肥厚増生乃至異所的深部増息ハ ノ補綴的再生機轉反復ノ結果、招來シタル上皮細胞ノ原發的增生現象トハ自ラ其趣 い上述ノ如ク、 粘膜上皮ノ單純ナル增生機能亢進ノ結果ト認ムべ 單ナル上皮ノ増生現 + 3/ R Æ 1 ル場合 ニシ ラ 二認 Ŀ

〇横川・一新ごんぎろねーまノ寄生ニ因ル風前胃、食道、舌及口腔粘膜ノ表皮癌ニ就テ

標 像 ŀ -差異 就 シ居レ ニモ依ルモノニシテ、嘗テフィビーゲル氏ヨリ山極博士宛送附セラレタル、鼠前胃 動物 市 Ŧi. 十五 川氏(18) ノ種類及寄生體ノ異レルニ由ルモノナルベシト雖モ、 日於テ、既 1 記 載セラレ ニ癌性變化ヲ確認シ得 タルヲ見ルニ、 其所見多ク タリト云 ヘリ。 ハ余等ノ癌初期乃至 斯 ノ如キ 亦癌 腫トシテ取扱ハレ 題 著ナ 移 ル差 行 型上認 異 タル 思フェ 癌 ムルモ ノ切片 組 主 織

y

化 近キ 刺戟 何トナレバ、(一)本蟲ハ排泄裝置ノ他、別ニ分泌腺ヲ有セザルガ故ニ、特殊ノ有 ラ 不明ナルト、(二)常ニ有核層ニ寄生シ斷へズ其部ニ一定ノ機械的刺戟ヲ與フルコト明 也 1) 學的 所 ク雨 Ŧi. JU 謂 斯 受ケタ 蟲體 成形的 刺戟 達シ、 者 斯 本過ノ寄生ニ 核細胞 ノ如キ上 ノ共 ノ如 觸 刺戟 同 の本蟲 他ナラ が相 in Ŀ 皮細 接 刺 時 皮細胞 戟作 = 踵デ分剖増殖スルガ故 セル細胞 範圍 ズトセラレ 因ル粘膜上皮ノ肥厚增生ニ就キ、フィ 表層上皮ノ角化 胞ノ發育增生ハ各方面ニー様ニ擴大セントス ハ常ニ粘膜上皮ノ有核層ニ寄生 用ヲ及ボ ニ属シ、 ノミ、 其 2 ブノ衝 シモ、余ハ本蟲ノ機械的刺戟ヲモ度外視スベカラザルヲ主張 上皮細 微 以テ其増生機 モ亦自ラ强盛シ 動 二壓迫セラレテ多少他 7 附 胞 其ノ部 近 1 00 ノ細 僅カニ肥大セル他、 胞 能 二間接核分剖像 シ、 = ヲ促進ス 傳 為メニ全上皮層ハ 著 達 直接其部 ノ 上皮細胞ニ機械的・化學的 ビーゲル氏のハ本蟲ノ産生スル有毒物質 ス ヨリモ ト雖 IV E ル性 ノ、如 濃染スルニ過ギズ。斯ル 形態的 E 7 現ハ 能 該刺戟 ヲ有ス シ、 1 ニハ殆ンド何等ノ變化ヲモ シキ 有核層 其 タ ルヤ、 ルガ故 1 毒物質ラ 増厚ヲ 附 1 3 沂 ウ カナレ = -分泌スルヤ否 偶 呈 1 T -直接蟲體 ラ IV iv ~ 上皮層 セントス。 2 n Æ 基 バナリ 普通 コト 底 乃至恐 ウ氏 部 呈

7 組織內 呈ス、 三細 斯ク ニハ上皮細胞 長 ノ如キ變化 ナル突起ラ ノ輕キ壓迫ノ外格別ノ變化ヲ呈セザ 出シ、 い癌移行型第 細胞自己モ亦生理的 例二於テ實驗 連續 せ y ョッ分離開 レドモ、 放シテ、 後二八次第二其 發育增生セ 、性質 7 ントスル傾 變ジ、 周 圍

戟 7 テ上皮層ニ 余ハ 結果トシ IJ 右い粘膜面 癌 :15 炎性刺戟ノ加 腫 テ、 第二 ョリ速ニ異生的性能ヲ獲得シ、 例 粘膜下組織 ヨリ及ボ ニ於テ ハル場合ニハ、本蟲寄生ノ結果既ニ増生機能 此ノ事實ヲ肯定スベキ變化ヲ證明 ス慢性刺戟ノ結果ヨリ見タルモノナレドモ、亦本蟲寄生ノ直接又ハ間接刺 ノ茂生乃至炎性變化ヲ喚起 癌前驅的變化ヲ呈スルモノナ 2 上皮層ニ對スル粘膜筋 12 y ノ亢進セル上皮細胞 ルハ考へ ノ抗抵減弱 得ベキ ハ他ノ上皮 コトニ 延

-及ボ 或ル狀況 ス 從ラ本蟲寄生ノ場合ニ 慢性 持續性刺戟 ノ下ニ 獨立的複雜 1 結果ト看 見ラル、癌腫形 症トシテ随件 做 ス ベキ 成 スル特殊ノ現象ナリト認ムルフ氏ノ所説 E 1 = モ亦、 シテ、 直接又い間接ニ 癌腫形 成ヲ以テ粘膜 本端ノ粘膜上皮乃至粘膜下組 上皮ノ異所的 -左袒 スル 深 7 ŀ

上皮ヲ刺戟 息 壁 及上 吸著 肉芽性腫 皮腫ラ 余間い 3 スル ラ 形 邁 其部 ガ故ニ前者ハ結締組織ノ異常増息ヲ起シ、後者ハ上皮細胞ノ異常増息乃至上皮腫ヲ 成 7 嘗テ本蟲 形成スルニ反シ、本蟲ノ鼠前胃ニ寄生シタル場合ニハ、主トシテ粘膜上 スルヲ ノ結締組織ヲ刺戟 見 ノ近似種ふいさろぶてら・ほるもざなノ臭鼠ノ胃ニ ソハ恐ラク兩者ノ寄生部位ヲ異ニス スルニ反シ、後者ハ常ニ粘膜上皮ノ有核層ニ寄生シ、以テ其部 ルガ為メニシテ、 寄生シ 前者 タル 場 合二 深ク粘膜下 皮ノ異常増 胃 形

的 連 泛續 ノ炎 八概 子廣 性 シテ上皮層ノ 1) 分 再生的 見ルコト多シ。 離開 大ナル基底ヲ有シ、上皮層ノ一部嵌入シテ成レルガ如キ狀ヲ呈スルモノ多キ 刺 放 戟 =/ 基底 テ、 ノ結果上皮細 部 發育增生 ヨリ、 胞 多數突起狀ヲナシテ結縮組織內二進入シ、 セントスル傾向 ハ形 態的ニモ、 ラ有 生物學的 シ、 異所的深部增生ヲ營 ニモ其性質ヲ變化 同時二 7 シ、 ントスル、上皮索 結締組 細胞自己 毛 織 後者い持 ハ生理 茂生

易ク、 發卜 乃至變性ヲ 呈 其 1 ノ獲得ハ、 V ニシ 1 ノ性格ヲ變ジ、生理的連續 1. ルヒヨウ氏以來諸家ノ唱導セシ所ニシテ、 1 1 一皮細胞ノ異生的性能ノ獲得ト、周圍 後ノ場合 HE! 爲メニ上皮層 厚 其 3 其ノ内ニ長 增生 山極 通過 ノ關 粘膜下組織ノ變化ハ、 ナル 博士 7 係 E 才 ナキ上皮性陰窩 來 7 認メ得 IV 丰 1 1% 剝脫、 ト氏のノ ス 張ノ如ク慢性持續性 余ノ實驗例 蟲體ノ一部ヲ無理ニ括入シ、 毛、 iv 傷害相踵デ起リ、 Æ 他方ニハ胃底部 所謂 ョリ分離開 ノアリ。 寧口續 ノ周壁 ョリ見 癌 前騙的病變、又ハ山極博士ノ「癌性化境遇」ニ相當ス 例へい 結綿組織 發的變化二過ギザルノ威アリ。 ,, ルトキ 放シテ發育増 炎ノ結果ト認ムベキモノニシテ 規則 翻轉 癌 リッペルト氏のノ如キハ周圍 粘膜下層ノ變化赤 初 ノ變化トハ共ニ、腫瘍發生上注目スペキ事項ナルハ、 シテ成 Æ 上皮層ニ强キ機械的刺戟ヲ與フル 上皮細胞 期 シキ上皮層ニ 4 第 也 v ント ル胃腔内腫瘤 例二於テ ノ異生 ス テ被 in ダ著シカラザルニ、 傾 ١٠ --的性能ノ獲得コツ、 ハレ、 向ヲ示 方ニハ本蟲寄生 21 而シテ上皮細胞 種々ナル機械 結締組 角化 癌初期乃至移行 2 物ヲ 所謂 織ノ變化ヲ以テ 原 1: 包 癌 3-癌腫 皮細胞 的損 有 ノ異生 N 1 驅的 結 ルモノニシ ス = 後生ノ主 IV 傷ヲ受ケ 一變化ヲ 的性能 アリテ ノミナ ハ旣 在 "

ク同蟲ノ一變種ト認メ之ヲ Gongylonema neoplasticum orientale n. Sp. ト命名セントス。 おぷらすちくむトハ其構造ニ於テ異レル點アルモ、生物學的性質ノ一致及發育上相近似スルヲ以テ暫

粘膜上皮ノ肥厚増生、乳嘴腫様增息及異所的深部增息ヲ來タス。 二、本蟲ハ鼠族ノ前胃、食道、舌及口腔粘膜ノ扁平上皮層内ニ寄生シ、同細胞ノ發育増生ヲ促シ、

刺戟其他)、 上皮細胞ニハ増生以外格別ノ變化ナキモ、更ニ炎性刺戟ノ加ハルトキハ(本蟲自己ノ直接又ハ間接的 三、本蟲ノ寄生ニ因ル、粘膜上皮ノ肥厚増生ハ生理的增生機能亢進ノ結果ト認ムベキモノニシテ、 他ノ上皮細胞ヨリモ、ヨリ速ニ異生的性能ヲ獲得シ、癌性變化ヲ呈ス。

又ハ間接刺戟ノ結果ト看做スペキモノニシテ、フ氏主張ノ如ク癌腫形成ヲ以テ、粘膜上皮ノ異所的深 |増生ニ、或狀況ノ下ニ獨立的複雑症トシテ隨伴スル特殊ノ現象ナリト認ムルコト能ハズ。 故ニ本蟲寄生ノ場合ニ見ラル、、癌腫形成モ亦本蟲ノ粘膜上皮又ハ粘膜下組織ニ及ボス、直接

亦試驗動物ノ個性及臟器ノ越受性即素因モ亦大ナル意義ヲ有ス。 スルガ故ニ、自然寄生蟲ノ多寡(刺戟ノ强弱)及試驗後ノ生存期間 本蟲寄生ノ場合ニ見ラル、癌腫發生ニハ、粘膜上皮ノ増生以外更ニ當該部ノ炎性變化ヲ必要ト (刺戟ノ持續)ニ依リ影響セラル、モ

ナ 癌腫發生率 ルベシ。 六、本蟲ノ寄生ニ因テ起ル癌腫ハ、之ヲフ氏ノごんぎろねーま・ねおふらすちくむノ寄生ニ因テ起ル ・二比スレバ著シク少ク、且ツ之ヲ發生セシムルニモ長時日ヲ要セリ。是レ恐ラク實驗動物 ノ異レルニ因ルモノナランモが癌腫トシテ取扱ヒタル組織的變化ノ差異ニモ因ルモノ

組 肉腫ヲ、更ニ或ルモノハ癌性肉腫ヲ形成スルモノニシテ、假合刺戟ノ種類ハ同一ナルモ、 加 3 成 ハル 一識成分!如何ニ依リ、發生スル腫瘍!種類ヲ異ニスルモノナルベキヲ信ズ。 スルモノナルベシトノ意見ヲ逃ベタルコトアリ。本報ヲ草スルニ當リ更ニ此ノ越ヲ深クスルモノニ 組 織 瘍後生ノ原因 成 分 ノ如何及該 ハ種々有 刺 戟 二對 ルベシト ス IV 組 雖、 織 慢性持續 ノ威受性如何ニ依 性刺戟 リ、 結果發生ス 或ルモ ノハ上皮腫 ルモノニ 11: ヲ、 リラ 其ノ及ポ 或 20 ルモ 刺 戟 ス

胃壁 轉移竈 壁 未ダ全肺ヲ連續切片トシテ鏡檢スルホド、 腫 Mi iv ノニシテ、十五頭ノ大鼠ノ全肺ヲ連續切片トシテ鏡檢シ、三頭ニ轉移ヲ證明シ得タリト云ヘリ。余ハ -ガ如 於テ重層扁 ニアル淋巴 ニアリテハ小膿瘍 リ病原菌 ノ乾酪 + フィ 像 7 癌初期中各二 見タルコトアリ。 化シ 平上皮ヲ附麗セル所アレパ、或ハ癌轉移竈 隙内ニ紡 ビーゲル氏はい本蟲 ノ轉入シ 及 iv ノ周壁ニアル圓 純 Æ ノナ 形 例二於ラ兩肺二同様ノ病變ヲ見タルコト二依り推定シ得心シ。 タルモノナルハ余ノ實驗例ニ於テ胃壁ニ顯著ナル炎性變化ヲ呈セ ノ扁平上皮群アリテ其中 IV ヲ斷定シ得ズ。 而シテ同例 ノ寄生ニ因ル鼠前胃癌 在上皮ョリ重層扁平上皮ノ化生セ 精査シ居ラザルモ癌腫 ノ肺ニ 然レドモ 於ケル小乾酪化竈ノ周壁ニハ一部又ハ稍~廣キ範圍 央ニア 斯 ノ轉移竈ハ鏡檢 ノ化膿シタル結果ナラズャト思ハル、モ、 IV IV Æ 肺ニ於ケル膿竈ノ著シ ノハ著シ 第二例ノ肺臓ニ於テ小乾酪化竈ノ周 ラル・コ 1 ク扁平ト 結果、 トアル ナリ、 初 + メテ發見シ得 病 ヲ以テ、 角化 變ヲ呈セ ル三例 シ初 直 メタ ルモ ノ癌 ル前 二癌 鼠

六章 結 論

二於テ發見シタルごんぎろねーまハフィピーゲル氏ノ發見シタルごんぎろねーまわ

すちくむノ寄生=四ル風前胃癌=煎ラ. 日本病理學會會議, 第十三年. 25) 藤濱, 大正十二年. 炎症ト腫瘍. 南滿醫學會維護. 第一卷. 第四號. 24) 横川, 大正十一年. 臭鼠=寄生スルふいさろぶてら 山極,大正三年· 癌腫原因論· 日新醫學· 第三年· 第四號· 22) 山極, 大正十年· 腫瘍養生學之近说· 日新醫學· 第十週年記念號 十二年, 第二周, 20) 山極, 市川, 大正五年,上皮性腫瘍發生=闕スル質線的研究,東京醫學會雜誌,第三十卷,第一號, 告)· 東京醫學會維誌· 第三十卷· 第十三號· 18)南川, 大正七年· フィピーゲル氏「ラツテ」ノ人工的胃癌標本供院附獨英=於ケル ノー新種及同蟲ノ寄生=因ル新生物=孰テ・日本病理學會會誌・第十二年・ 25)横川、大正十二年・ごんぎるねーま・れおぶら 二三人工的上皮腫酸生業績と紹介・癌・第十二年・第二册・ 19) 簡素, 大正七年・「マウス」= 於ケル人工的表皮癌= 靴テ・癌- 第

神

第一图 癌初期第二例/胃內面-自然大寫真

鼠第十八號)。 幽門部 IT 胃底部ノ翻轉シテ生ジタル腫瘤―粘膜上皮剝脫シテ蟲體(W)ヲ露出ス,(實驗開始後五百九日乃至七十日―實驗自

第二圖 胃底部ノ廣汎性癌腫(癌腫第三例)―自然大寫眞。

P. 幽門部 『 癌性變化ヲ皇セル前胃ノ切面―胃壁内癌集著明(實驗開始後四百二十一日乃至四十日實驗自鼠第二十三號)。

第三圏 福初期第一例ノ胃内面—自然大寫真。

P. 幽門部 M. 乳嘴腫性增息ヲナセル前胃粘膜面,(實驗開始後五百七日乃至四百十一日—實驗白鼠第十七號)。

粘膜上皮/異所的深部增生—(實驗開始後五十五日乃至一日—實驗自鼠第五十七號)。

1.2 異所的上皮增殖,(實驗開始後二百四日乃至四十一日-實驗自鼠第三十一號)。

第六圖 纖維上皮性腫瘍

W蟲體/斷面(材料同前)。

〇横川・一新ごんざろれーまノ寄生ニ因ル鼠前胃、食道、舌及口腔粘膜ノ表皮癌ニ就テ

組織成分ノ如何及該刺戟ニ對スル組織ノ威受性如何ニ依リ、發生スル腫瘍ノ種類ヲ異ニスルモノナ 腫瘍發生ノ原因ハ種やナット雖、慢性持續性刺戟ノ結果發生スルモノニアリラハ、刺戟ノ加

本研究へ日本稿研究會ノ補助ニ貧フ所多シ、記シテ感謝ノ意ヲ表ス(大正十三年八月四日稿

Bibliography

Nematode-spiroptera sp. n. und deren Fähigkeit, papillomatöse und carcinomatöse Geschwülstbildungen im Magen der Ratte hervor-1) Joh Fibiger, 1913. Über eine durch Nematoden (Spiroptera sp. n.) hervorgerufene papillomatöse und carcinomatöse Geschder Epithelialgeschwülste. 11. Mitteilung. 11) 山橋,胃癌發生論. 明治三十八年. 12) 山橋, 杉原,明治四十年八月. 艦閥ノ組 Zeitschr. f. Krebsforsch. Bd. 11. H. 1. 10) K. Yamagiwa, u. K. Ichikawa, 1917. Experimentelle Studie über die Pathogenese Geschwülste. Zeitschr. f. Krebsfors. Bd. 7. H. 2. 9) Joh. Orth, 1911. Pracarcinomatese Krankheiten und künstliche Krebse. Geschwillste. 8) W. Fodwystczky, 1908. Neue Ansichten zur Begründung der Reiztheorie des Krebses und der hösartigen Geschwülstlehre für Aerzte v. Studierende. 11. Aufl. 7) Borst, 1906. Seine Geschwülstlehre; Über Wesen u. Ursache der die heutige experimentelle Geschwülstforschung. Deutsche med. Wochenschr. Bd. 47. Nr. 48-49. 6) Hugo Ribbert, 1914. 大泉及二十日東、すびろぶてら癌腫=關スル研究、癌、第十四年、第二册)。 5) Joh. Fibiger, 1921. Virchow's Reiztheorie und Lagomorpha and Hyracoidea" by Dr. M. C. Hall 1916). 4) Joh. Fibiger, 1919. Zeitschr. f. Krebsfors. Rd. 17. H. 1. (鈴木坊). morphology of Spiroptera (Gongylonema) neoplastica n. sp. (Cited from "Nematode parasites of Mammals of the Orders Rodentia, gerufen. Zeitschr. f. Krebsforsch. Bl. 13. H. 2. 3) Joh Fibiger u. H. Ditlevsen, 1914. Contribution to the biology and willstbildung im Magen der Ratte. Berline klin. Wochschr. 50 jahrg. Nr. 7. 2) Joh Fibiger, 1913. Untersuchungen über eine 微發生=闢スル知見增補:癌,第-年,第一册、 18) 山艦, 明治四十一年四月, 艦璽ノ組織發生=膕スル知現增補,第二,艦,第 山極,市川,大正五年。癌陋,人工的發生三粒,一般,第十年。第四學、日本病理學會會語。第六卷、「6)山極,市川,大正六年。 人工的報題ノ發生ニ就テ・(第二報告)・ 绍· 第十一年・第二那・17) 山麓, 市川, 大正六年・人工的報題發生ニ就テ・(第三一第四種 14) 山麓, 市川, 大正三年十一月. 上皮淀型的培殖= 就テ. 癌. 第八年. 第二册. 日本病理學會會誌. 第四卷.

Fig. 4. Fig. 1. Fig. 5. Fig. 2. SVm Fig. 6. Fig. 3. PP Vm

111

文 附 圖

(S. Yokogawa)

第七屆 食道粘膜/乳嘴腫性增殖

E蟲堺、(實驗開始後七十三日乃至三十三日—實驗白鼠第五十三號)。

第八回 癌移行型第一例/胃底壁—

E 大ナル上皮性陰高壁,B 癌性變化ヲ初メタル部E 粘膜上皮(實驗開始後二百五十日乃至八十七日―實驗白風第三十六號)。

第九圖醫癌初期第三例,胃底壁(實驗開始後五百七十五日乃至三十八日—實驗白鼠弟十三號)。

第十回 癌腫第三例ノ胃壁―癌細胞群ハ胃底部ヨリ幽門部ニ向テ發育增生ス、

E.大上皮性陰窩,C.痛細胞巣,(實驗開始後四百二十一日乃至四十日-實驗白鼠第二十三號)

第十一國 癌腫第一例 / 胃底部、

實驗開始後二百七日乃至四十四日—實驗白鼠第三十五號。

第十二■ 肺臓ニ於クル癌轉移徾−癌腫第二例ノ肺乾酪化策壁(實驗開始後二百三十六日乃至百三十一日實驗白鼠第二十四號)

Fig. 7. Fig. 10. Fig. 8. Fig. 11. Fig. 9. Fig. 12.

橫

]1]

文 附 圖

(S. Yokogawa.)



神經切斷ト移植腫瘍ノ發育增殖トノ關係

京都府立醫科大學、病理學教室

ア田博士)

中本完一

觀察二於テ、一層複雜且ツ困難ナルモノト謂フ可シ。 事ハ極メテ難事タルノミナラズ。漸ク其ノ一端ヲ捉へ得テ,途ニ推理ニ滿足セザル可カラザル場合尠ナカラズトス,就中,關係的 ツノ病理ノ兜明ニアタリ局所觀、關係觀及ビ全身觀ノ總テヲ完了セザル可カラザルハ論ヲ俟タズ。然レドモ基等ノ觀察ヲ完フセ

ルモノニシテ、特ニ是等ノ關係的觀察ノ必要ナルハ多言ヲ要セザル可シ。 而シテ、一汎生理學ノ研究が、神經系統ト離ル可カラザル關係ヲ有スルが如ク、病理學ニ於テ亦密接ナル關係ノ存在ヲ疑フ能ハザ

ノ方面ニ向ツテ攻究セラレタルモノハ、腫瘍ノ他ノ方面ニ於ケル研究ニ比シテハ、巓ル稀有ナルモノニシテ、僅カニ敷氏ノ報告ヲ見 病理學ニ於ケルト等シク、腫瘍學的方面ニ於テモ亦、腫瘍ト神經トノ間ニ於ケル關係的觀察ノ必要ナルハ明カナルモ、而モ此

ノ關係ニ就キテ下サレタル考察モ,多クハ推論ノ域ヲ脫シ得ザルモノト謂ヒ得ベシ。而シテ一方神經作用ノ消長が腫瘍ノ變育增殖ニ 惡性腫瘍ト末梢神經トノ關係ニ就テ、組織學的方面ヨリ攻究セラレタルモノニ Young, Goldmann, 赤松,内海及ビ中本等諸氏ノ報告 是等ハ總テ鏡檢的所見ヲ根據トセルモノナレパ、主トシテ腫瘍ニ對スル神經ノ態度ヲ觀察セルニ過ギズシテ、神經ト腫瘍ト

〇木村・中本・神經切斷下移植腫傷ノ發育增殖トノ關係



動物ノ全數ニハアラズシテ、中二ハ極メテ少數ノミ最後迄觀察シ得タリシ質驗例モアリキ。 袞へタルモノハ屢く共喰ヒノ厄ニ遭遇セルモノ少カラザリシヲ以テ、結局三週ノ終ニ於テ撲殺シ,比較資料トナシ得タルモノハ供試 ヲ怠ルコト無ク、三週日ノ終リニ於テ尙生存セルモノヲ以テ最後ノ成績トシテ比較考究ノ材料トナセリ。試驗動物ノ或ルモノニ於テ スル慎重ニシテ面モ卒直ナル觀察ヲ途ゲン事ニ注意スル所アリシモノニシア、特ニ多カラザル動物ヲ基礎トシテ、實驗觀察ニ從事セ ル余等ニトリテハ最モ心得フ可キ主要ナル注意事項ナリトス、サレバ手術ハ總テ木村之ヲ擔任シ、實驗經過中ニ於ケル觀察ハ日々之 所定!期日ニ到ル迄ニ旣ニ腫瘍ノ著シク速カニ發育增殖セル結果,衰弱ノタメニ早期ニ難レタルモノ少カラズ。且ツ少シク元氣ノ

ナル下腿筋肉内ニ於テ、腫瘍組織ノ生理的食纜水えむるじおんヲ注射シ、腫瘍組織ノ單獨移植ハ全部之ヲ避ケタリ、之レト同時ニ左 試驗方法トシテ術者ハ常ニ如何ナル場合ニ於テモ、右側ノ坐骨神經ヲ股關節後方ニ於テ切斷シ又ハ一部技去スル事トナシ、其下部。

側下肢ノ同一部位ニ同量ノえむるじおんヲ注射シテ對照トナセリ。

移植原種腫ノ移植世代推移ニヨル腫瘍性狀ノ變化、實驗時ノ季節的影響等参考ス可キモノ多カル可キヲ想ヘバ、次ニ簡明ニ是等ヲ記 而シテ以上ノ注意事項ノ他ニ,先キニ述ベタルが如ク材料ノ生物學的關係ノ差異乃至其ノ他ノ影響トシテ,動物ノ種屬及ど個性

使用動物

「1.東京新見烈氏ヨリ購入輸送シ來レルモノ

| 3:京都川瀬商店ヨリ購入セルモノ

4.木村自身二於テ繁殖生青セシメタルモノ等ヲ混川ス。

移植原腫

嘗テ京都帝國大學病理學教室ヨリ分典セラレタルモノニシテ、大正七年四月藤繩氏ノ發見ニカ、リシヨリ 經ルコト當サニ六年

〇木村。中本。神經切斷下移植腫瘍ノ發育增殖下ノ關係

當否ニツキテ、云々セントスルモノニ非ラザルハ勿論ナリ。何ントナレバ、實驗ノ結果ヲ左右スルモノニ、直接實驗ニ際シテ與ヘタ 増殖ニ及ボス影響ノ如何ヲ觀察スルヲ以テ目的トスルモノナレバ、之レニ據リテ得タル結果ヲ以テ、直チニ先輩請氏ノ戚セル業績ノ 究ノ結果ニ於テ,腫瘍ノ發育增殖ト末桁神經間ニハー定關係ノ存在ヲ疑フ能ハザルモノアリシヲ以テ,一ツハ之レガ證明ノ爲ニ、遂 ズ。然レドモ是等先輩諸氏ノ成セル實驗ノ結果ニ對シテハ、其成績ノ如何ニ拘ラズ一定ノ疑義ヲ插ムヲ許サレザルモノニシテ、余等 ノ存在ヲ唱フル所ノ學者ニ於テモ Adler & Sittenfield 及ピ Aschner 氏等が神經機能膨絶ニョリテ、移植腫瘍ノ餐育良好ナルヲ告が 植腫瘍ノ發育増殖ノ上ニ,一定ノ影響ヲ及ポス可キヲ說ケルニ反シ、藤綱及加藤氏等ハ,全然影響ナキモノトナスノミナラズ,影響 浪及ビ加藤等諸氏ノ業績アルヲ見ルニ過ギザルノミナラズ、Adler & Sittenfield, Aschner, 及ビ末安=藤浪氏等が、神經機能膨絶八移 ヒニ先人ノ跡ヲ追ヒテ寳驗ヲ反復シ、製擦ヲ試ムルニ到ルモノニシテ、余等ノ寳驗タルヤ、固ヨリ末梢神經損傷か腫瘍ノ移植及ビ蟄青 ルニ反シ、末安=藤浪氏等ハ、大黒鼠癌ニ於テハ、寧ロ不良ナル結果ヲ認メタリト報ジ、未ダ一定ノ見解ヲ得タルモノト謂フ可カラ ル人為的條件ノ他ニ、余等ノ實驗室ニ運バレタル所ノ材料ノ生物學的關係及ビ其他ノ影響ニ就テ、參考ス可キモノ多々アルヲ識レバ 亦其結果ヲ疑フモノニアラザレドモ、共試者ノ一人中本が旣ニ報告セルが如ク、種々ノ種類而モ多數ノ材料ヲ以テセル組織學的研 シ如何ナル影響ヲ及ボスヤニ就キテ、之レヲ買驗的ニ證明セラレタルモノ、僅カニ Adler & Sittenfeld, Aschner,藤縅、末安=藤

余等ハ是ニ據リテ、神經機能廢総ト移植腫瘍發育增殖トノ間ニ、一定關係ノ有無ニ就テ知得スルヲ得ルト俱ニ、之レガ腫瘍ト神經ト ノ關係的觀察ニ對シテ、一ツノ參考資料タルヲ得パ、目的ハ旣ニ達成セラレタルモノニシテ、余等ノ幸ヒ之レニ過ギザルナリ。 故ニ平靜ニ質施セラレ而モ卒直ニ觀察セラレタル本研究ノ成績ハ、余等ノ目的ニ對スル收獲トシテ、否ム可カラザルモノニシテ、

方ニ偏シテ正鵠ヲ謬リ,成績ヲ左右スル事無キャ否ヤニアリキ。故ニ總テノ實驗ニ際シ吾人か常ニ最モ留意ス可キ自然ノ結果ニ**對** 余等ヲシテ實驗ニ先チテ最モ危惧ノ念ヲ慖カシメタルモノハ、實驗ニ對スル技術ノ不均等が齎ス影響ノ有無如何ト、驗者ノ觀察が

三 實驗成績

右側坐骨神經切除ト同時二鼠肉腫生理的食鹽水えむるじおんヲ左右兩側下腿筋肉内ニ,○•五鈍宛ヲ注射セルモノ。

	華	第2種包	對照組集例	神 節 動
	I	3.0 cm × 2.5 cm	1.0 cm × 1.5 cm	*
闰	П	3.0 cm × 2.0 cm	1.5 cm X 1.5 cm	*
委		2.5 cm	2.5 cm × 2.0 cm	*
(年)	IV	3.0 cm × 3.5 cm	1.5 cm X 1.0 cm	×
渔	V	2.5 cm X 2.5 cm	2.5 cm	*
	Vſ	2.5 cm 2.5 cm	2.5 cm 3.0 cm	*
(移植動物數第三)	ИΙ	1.0 cm × 1.0 cm	1.0 cm × 1.0 cm	华大
为数 三週日終	ĽΨ			
0	IX			
	X			

无	挺	ル中
左右兩側略等大	健康對照側:	神經切斷側
41	DINE.	Arri
网	到	111
101	程器	顺行
soft.	401	did
Latt.	Den	Des
等		
-1-		*
1		
*		:
	:	:
*		
*	:	
*		*
:		
		-
	1	大
		,
	1	1
	,	V
		1.
	7	
nici	Ti.	F

〇木村・中本・神經切断ト移植腫瘍ノ發育增殖トノ關係

京都帝國大學病理學教室ヨリ分與セラレタルモノニシテ、本腫瘍ハ東京帝國大學病理教室ヲ經テ京都帝大病理 教室ニ到レル、米園種大黒鼠癌ナリト。

配檢季納

大正十三年四月中旬ョリ七月二至ル期間内。

食飼料

立米小米及ど甘薯等當教室ニ於ケル普通一汎飼料。

就キテ親察シタルヲ以テ、左ニ之レヲ簡單ニ表示ス可シ。

而シテ余等へ前逃セルが如キ試験法ト細心ノ注意トノモトニ、神經切斷ト腫瘍移植トノ間ニ時期的差異ヲ生ゼシメ、種々ノ場合ニ



シモノ少カラザリキ、然レドモ是等ハ其經過中他ノ目的ノタメニ隨時使用シタル事多キヲ以テ、玆ニハ之レヲ記錄セザル可シ。 以上ノ如ク、試驗鼠全數七十頭ヲ使用シ之レヲ基本トシタルモ、其他腫瘍保存ノタメノ移植等ニアタリ同様手術ヲ施シテ染考トセ 組織的ニハ第三週ノ終ニ於ケルモノヨリ組織片ヲ採取シテ鏡的標本ヲ作製シ,腫瘍組織及じ腫瘍周圍組織トノ關係ヲ観察セルモノ

離断点組織を発生の関係の関係を	機型質量	这種包
	ĵ.	1.0 cm × 1.0 cm
**	1.5 cm × 2.0 cm	1.5 cm 2.0 cm
*	1.5 cm X 1.6 cm	2.0 cm X 1.5 cm
	<u> </u>	1.0 cm × 1.0 cm
	<u> </u>	0.5 cm × 0.5 cm

左右兩側:	對照健康側	神經切斷側	對照健康側	神經切斷側
4				
		*		
	*		- :	
*		*		
				1
		*		3:
*				
		*		
				4
	*			*
*				
4				
	*			
	*			
				:
				*
1940				
brit.	陰	陽		
250	122	150		
路等大:	性	性	1	大
*		,		
	1	/	1	/
	,	V	,	~
-				needle .
20.00	7	1.52	-	2.12
BH	1	A	}	M

實驗 第三列

右側坐骨神經ヲ切除後一週日ヲ經テ、左右兩側下腿筋肉内ニ鼠肉腫生理的食鹽水えむるぢおん○•五蚝宛ヲ注射セルモノ

	-	2.0 cm × 2.5 cm
河	11	3.0 cm × 3.0 cm
57		23 23
123	8	3.5 cm × 3.0 cm
10	IA	3.0 cm 2.5 cm
列	V	2.5 cm 2.5 cm
0	ΙV	2.0 cm × 2.5 cm
移植動物數第三週	ПА	2.5 cm × 2.0 cm
日総	ША	3.5 cm × 4.0 cm
	XI	29.55 cm × Cm
	X	

〇木村・中本・神經切斷ト移植腫瘍ノ發育增殖トノ關係

三七九

	でで	宣轉点部	機能 1	神響神の一般を変える。
	-	2.5 cm	1.5 cm × 1.5 cm	*
)jj	ш	2.5 cm	2.5 cm × 2.0 cm	*
聚等	10	2.5 cm	2.0 cm × 2.0 cm	*
-	IV	3.0 cm 2.5 cm	1.5 cm × 2.0 cm	*
7	V	1.5 cm × 2.0 cm	2.5 cm × 2.0 cm	÷
() 注 ()	VI	2.5 cm × 2.0 cm	2.0 cm × 2.5 cm	华大
(移植動物數第三週日終	IIA	2.0 cm × 2.0 cm	1.5 cm × 2.5 cm	华大
數 十頭	PΓ			
頭)	λΙ			
	X			

	左右兩側	對照健康側	神経切斷側	對照健康側…	神經切斷側	
n-ten						
背驗						
8.0	9					
FERR						
第二列			4			
弱			*			
1000						
2748					8	
94			5			
				:		
		-				
				*		
	0					
			*			
				:		
			*			
			*			
		大				
				*		
			:	:		
	10%	-10	110	1	大	
	A Ac					
	73"					
	-4-	1	/	1	/	
	1	,	V	1	/	
	ments.	-	and a		刑	
	略等大十二頭	-	200	-	四頁	
	Dit	1	Ħ	3	151	

右側坐骨神經切斷ト同時ニ、鼠癌生理的倉驤水えむるぢおんヲ左右兩側下腿筋肉内ニ,○・五竓宛ヲ注射セルモノ

IX	V.D	VII	VI	Δ	IV				_	-
	日終	(移植動物數第三週		M	11	料	**	溪		

左右兩側・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	連絡が 野宮暦 大 ・ ボイト	*	*	*	*	Ĵ	
	神經切斷側				····大·	/ in	
	對照健康側				小 大	五頭	

智能・数王亨

ヤ、陰性ナルヤ、未ダ不明)、右側坐骨神經ヲ切除セルモノ。 鼠癌生理的食鹽水えむるぢおん○•五蚝宛ヲ左右兩側下腿筋肉内ニ注射シ、第一週(Hヲ經テ此昨先ニ移植セル腫瘍ノ移植陽性ナル

	を当	机均距鱼	難別國際	神野の一般を開発した。
	П	3.5 cm × 3.0 cm	ĵ.	
N	П	2.5 cm 2.5 cm	2.0 cm × 2.5 cm	*
等。	8	4.0 cm × 3.5 cm	2.0 cm X 2.0 cm	*
王	IV			
50	γ			
	VΙ			
(移植動物第二	VΙΙ			
動物數 第三週日終	VIII			
十頭)	IX			
	X			

	對照健康側:	神經切斷側:
〇木村・中本・神經切断ト移植腫瘍ノ發育增殖トノ關係	照	米 亚
*	健	切
t.t	ME	EFF
TI	4Hd	4thi
ris	Fari	BRIL
*	小····	大:
m.d.		
地 市	*	
金属		
4-77		
16/3 106/0		
助	*	
r		
\$-6e	*	
个		
植		
育新		
460	*	
础		:
1		
图象		
DA.		
F		
增		
No.	:	
7EL		
r		
1		
M88		
(PR)		:
徐		
	al.	-1-
	1	~
	1	/
	,	*
	-	_
	11	Ñ.

對照金數則
4.0 cm 2.5 cm
3.0 cm 2.5 cm
3.5 cm × 5.0 cm
es. 5 cm
3.5 cm × 3.0 cm
2.5 cm 3.5 cm
2.0 cm × 2.5 cm
2.5 cm
3.5 cm × 3.0 cm

實驗 第四列

側坐骨神經ヲ切除セルモノ。 左右兩側下腿筋肉内ニ鼠肉腫生理的食鹽水えむるぢおん〇・五竓宛ヲ注射シ、一週日ヲ經テ(此時辛ウジテ移植陽性ナルヲ認メ得)右

	奉命	自要包括	對照過
	п	3.0 cm × 3.0 cm	2.5 cm 2.5 cm
H	п	3.0 cm × 3.0 cm	2.5 cm × 2.5 cm
额线	=	2.0 cm × 3.0 cm	2.0 cm × 1.6 cm
[25]	IV	4.0 cm × 2.5 cm	2.5 cm × 2.0 cm
列	V	3.0 cm × 3.0 cm	3.0 cm × 2.5 cm
	IA	ĵ.	1
(移植動物	ПА,		
強 十頭	VIII		
頭)	XI		

四 移植成績ノ總括

腫瘍ノ發育増殖ハ對照健康側ニ比シ旺盛ニシテ移植陽性ノ數モ多ク、神經切斷後一週日ヲ經テ移植セ IV モノニ於テハ、切斷側ニ於ケル發育增殖ハ對照健康側ニ比シテ弱ク且ツ移植陰性ノ數多シ。 ガ如ク、癌腫及ビ肉腫ノ何レニ於ラモ、神經切斷ト同時ニ移植セル場合ニ於ラハ、切斷側ニ於ケ 神經切斷ト神經機能廢絕部位ニ於ケル移植腫瘍發育增殖ノ關係ハ、以上表示セル所ニョリテ明カナ

諸氏ノ成セル研究成績ト比較シテ、 以上余等ノ實驗ノ結果ハ明カニ神經機能廢絕ガ可移植性腫瘍ノ移植及ビ發育增殖ノ上ニ一定ノ影響 | ボスモノナル事ヲ物語ルモノニシテ、全然無關係ニアラザル事ヲ窺ヒ知ルヲ得ベク、之レヲ先輩 相違セル點動カラザルナリ。

交獻ニ據レバ

Alder & Sittenfield

鼠船ヲ神經切除ヲ行ヘル睾丸ニ移植シ、生存試點十四頭ニ於テ悉の陽性ナリシモ、對照二十頭ニ於ハ僅カニ一頭ノミ陽性ナリシト。

ノニ於テハ,最初八日間ハ一樣ニ腫瘍ハ軟化縮小シ,第二週ニハ腫瘍ハ其大サヲ保持シ,第三週ニハ發育ヲ始ムト云ヘリ 進スルモノニシテ、血管運動神經ノ麻痹ニ因ル神經切斷側ノ充血が好結果ヲ與フルモノナリト云フ。倚脊髓神經後根ヲ切斷シタルモ まうす癌移植ニ於テ、坐骨神經ヲ切斷セル側ニ於ケル移植腫瘍ハ、移植及ピ發育増殖ニ惡影響ヲ及ポサドルノミナラズ、却ツテ促

藤繩博士

大黒鼠肉腫ニ於テ、坐骨神經切斷ハ移植腫瘍ニ何等影響ラ及ボサズト云フ。

〇木村。中本。神經切斷下移植腫瘍ノ發育增殖下ノ關係

〇木村・中本・神經切断ト移植腫瘍ノ發育增殖トノ關係

管驗 第六列

右側坐骨神經ヲ切斷後一週日ヲ經テ、左右兩側下腿筋肉内ニ鼠癌腫生理的食鹽水えむるぢおん○•五蚝宛ヲ注射セルモノ

		灣	弧	総	*	34		(移植動物	動物數第三週日終	参士	十頭)
車	1	H.		8	ΙV	V	Ψ1		ПА	II.A II.A	
意思を	2.3 cm X 1.6 cm	1		4.0 cm × 4.0 cm	-	ĵ.					
発展が	2.5 cm 3.0 cm	î		<u>-</u>	1.5 cm × 1.5 cm	1.5 cm × 1.5 cm					
部を変数を変数を表現して、	4								•		

三頭

ル結果ヲ 神經切斷ト同時ニ移植セルモノニ比シ、神經切斷側ニ於ケル腫瘍ノ發育增殖ガー層顯著好良ナ 観タル事ナリトス。

Ŧ 各實驗列ヨリ得タル移植腫瘍及ビ其ノ周圍組織ニ於ケル組織

的所見ノ概要

11 組 織 ノナルハ明カナレドモ、参考ノ爲記載ス可シ。 片い各實驗列ョリ一頭ヲ選ビ採取シタルモ ノニシテ、是等ニ據ル所見い到底總テヲ 律 スル能

モ

斷側 細胞 經切斷下 二於ケルモノ、中二著シク多數ノ核分剖像ヲ認ム。反之對照健康側ニ於ケル腫瘍ノ中心部壞死 1 浸潤及ビ結締織 同時ニ腫瘍移植ヲ行ヘルモノニ於テハ、神經切斷側ニ比シ、健康對照側ニ於テハ、 ノ増殖顕著ナルヲ認メ、 腫瘍組織自己ニ於テハ、對照健康側 -比シテ、 小圓

著差アルヲ認ムル能ハザルモ、 切斷 後一 週日ヲ經ヲ移植セルモノニ於ラハ、神經切斷側ト對照健康側トヲ比較シラ、反應現象 神經切斷側ノ骨骼筋ノ著シク萎縮シ、筋組織内全般ニ亙リテ多小ノ

腫瘍移植後一週日ヲ經テ右側ノ坐骨神經切斷ヲ行ヘルモノニ於テハ、反應現象ニ著差アルヲ認ムル ザルモ、 神經切斷側 ノ著明ナル鬱血ヲ認ム、 而シラ對照健康側ニ於ケル中心部壞死ハ、 神經切斷

考案及ビ結論

側

比シテ顯著ナリ。

結締織

増殖ヲ認

神經切斷側

=

比シテ特ニ著明ナリ。

〇木村・中本・神經切斷ト移植腫瘍ノ發育增殖トノ關係

加藤博士

鷄肉腫ニ於テ坐骨神經切斷ハ、腫瘍移植、發育增殖ニ影響ヲ與ヘズト。

末安=藤浪兩博士へ

大黒鼠癌ニ於テ坐骨神經切斷ハ腫瘍ノ發育增殖ニ不良ナル結果ヲ來タス,鼠肉腫ニ於テハ、藤繩氏ノ成績ト略く一致シ、影響ナキ

是等先輩請氏ノ業績モ亦常ニー定セルモノニ非ズシテ、種々ノ結果ニ就テ報告セリ。

告セリ。 ビ發育增殖 直接神經損傷ヲ企テタルニアラズ、尚未ダ實驗ノ結果ニ對シラ、原因的解決ヲ試ミラレタルニアラザ ルモ、兎ニ角、 以上ノ文獻ノ他ニ參考トス可キハ、本田=市川氏等ノ業績ニシテ、其内容ヲ抄録センニ、氏等ハ、 關係ヲ觀察セルニ、精系結紮側ニ於テハ、對照側ニ比シ、頗ル良好ナルヲ認メタルヲ報 大黑鼠翰精管結紮ヲ行ヒ、肉腫及ビ癌腫ノ移植ヲ試ミ、 結紮側ニ於ケル移植陽性率及

結紮ナル手術ガ、同時二之レト併行セル神經纖維ノ障碍ヲ免レ得タルヤ、否ヤヲモ考ヘザル可カラザ レパ、我田引水ノ惧レアレド、兹ニ引用シテ参考トス可シ。 之レニ關 -10 ルニ非ズャト、疑問ヲ殘サレシト同樣ニ、單一ニ解決ス可キニアラザレド、 ジラハ、藤浪博士ガ嘗ラ Adler 及ビ Sittenfield ノ業績ニ對シ、睾丸ナルガ故ニ特殊ノ關係 一面二於テ、

斷側ハ對照健康側ニ比シテ、發育增殖ノ不良ナルニ反シ、腫瘍移植後一週日ヲ經テ神經ヲ切斷セル ノ得タル結果ニ於テモ殊ニ注目ニ値ス可キハ、神經切斷後一週日ヲ經テ移植セルモノニ於テ、神經 余等ノ實驗成績ヲ先輩諸氏ノ同樣實驗成績ト比較シテ相違 セルモノ勘 カラザルヲ知ルト共二、余等

V B ル結 時恰 カモ移植 然カラザルモノニ比シテカ、ル好結果ヲ得タルモノナルベシト信ズ。 腫瘍組織ガ漸ク發育増殖ニ傾キツ、アル適當ノ 時期ニ於テ、一定ノ條 作ヲ 賦 也 ラ

縮 ノ如 可キハ想像 加ヲ來 + 3 心果ヲ 七 斷 ルモ スルニ難カラズ、 招キ榮養補給上ヨリスルモ影響スル所多キ結果ニ因 ノニシテ、 週日ニ於ケル該神經支配下組織ノ變化ヲ見ルニ肉服的 萎縮ノ結果ガ雪ニ形態的變化ノミナラズ、 故二移植ノ當初二於テカ、ル二次的變化二遭遇スルト否トガ レルモノナル 化學的二 二或 ハ觸診上二於テ著明ナル 可シ。 モーツノ變化ヲ招來 途ヒニ前

共通 ノナレ 3/ 4 面 タリシ 組 シテ 織的 E " ドモ 一鏡的所見ニ據レバ、移植後一 觀察スル時、 顯ハル可キ現象ナル可シト信ズルモノナレバ、余等ハ之レニ對シラ重キヲ置クヲ欲セザル -E ノニシテ、Aschner モ亦鬱血現象ヲ主要ナル原因トシテ認ムル事ヲ記載セルヲ見 本所見い宮二此ノ場合ニノミ現ハル可キ絕對唯 若シモカ、ル鬱血症狀ノ 本現象モ亦腫瘍 週日ニシラ、神經ヲ切斷セルモノニ於ラハ、著明ナル鬱血ヲ證 ノ發育ト密接ナル關係ヲ有スルモノナ 發來ガ、神經切斷トノ間ニ於テ時期的關係アリトセバ、 一ノモノニアラズシテ、寧ロ ル可ク、全然除外スル 總 ラノ 120 之レ 場合 能 7

其結果ニ 陰性 加及ビ ŀ 信ズ。 切 於ラ全然相反對セルヲ見ルハ、 榮養補給上ノ 後 V IV 週日ヲ經テ移植セル實驗列ニ於ラハ、 Æ ノ多ク且ツ發育不良ノ結果ヲ來 變調ガ主要ナル原因ヲナス 先ニモ述べ E A サシ タル所ノ神經性不使用性萎縮ニ ノナラント思考スルモノニシテ、試験側二於テ移 前述セル所ノ實驗列ニ メタル Æ ノ多キ モノト思考 於ケルモノト 3 スルモ iv 間 質 比 大過ナカ 較シ 結 縮

絕ガ二次的ニ如何 以 ノ手 實驗 1 所 置 果 ナ ŀ 因 シテ現ハレ IV 關 ル神經 係 ヲ惹起 支配廢絕ノ結果ニョル事ハ タル腫瘍ノ發育増殖ノ差異ガ如何ナル原因ニ基ケルモノナ シテカ・ル 結果ヲ表現セ 明 71 シメグ ナル n E t 更 = 到リテハ到底的確ナル解決 = 歩ヲ進 × テ、 神 IV 力、 作用 勿論 廢

然レドモ余等ハ之レニ就テ首肯シ得可キニ、三ノ關係ヲ推 サ 4) iv ~ シ。 定

乃至 維切 末梢 先ッ實驗法及ビ其結果ヲ 神經 斷 經 神經 障 去 碍 ノ存 3 -10 リテ、 機能廢絕 F ラレタル結果 在ガ腫瘍組織 時 以下 --思性腫瘍ニ於ラ屢く遭遇セシ 移 ニ基因シテ、周圍組 植 ノ末梢 セ = 根據トシテ、 因ルモノナラント思考スルモノニシテ、 ルモノニ於テハ、 ノ浸潤増殖 神經 ガ急速ニ ---之レヲ觀察 對シテー程度ノ障碍的、 織内二於ケル反應現象ガ充 變性二陷 對照健康側二比シテ神經切斷側ノ發育增殖ノ一 所見 セ 1 レル結果、 1 = 致 スル 腫瘍ニ對シテハ障碍性 Æ 抵 ノナリ。 抗的 分二發現 中本ガ曾 態 度ヲ持スルニ反シ、神經 セ ラ ザ 腫 鴉 ル可キ事、 h ノが或 神經 程度迄輕減 1 層顯 及ビ正常 關係 二就

叉ハ其 カゴ 時 瘍 他ノ機調 1 シタル時、 移植 移植 係 對シテ、 ヲ有ス セ 後 IV (組織性狀ノ變化)ノ發生及ビ之レ -6 IV 直接影響スル所ノ價値ニ於テハ大差ナシト 週日ヲ ノニ Æ 於ケルヨリモ、一層急速ノ發育増殖ヲ營メルモノ多 ノト 經 解釋 テ神經ヲ 也 40 IV 切斷シタルモノニ 於テ迅速ナル 發育增 可 カラズ、 ヲ誘發 此結果移植後 ススル所 ス IV 1 週日 時 毛、 期 神經 = 的 關 3/ 係 機 ラ 殖ヲ見、 b 能 71 神經 廢絕 腫 1) 湯 2 切 ノ發育 ,, = 斷 Thi 3 假分神 7 IV Æ 神經切 組 行 時 織 ヘル 期トノ密 ノ萎縮 經 Æ 切 斷

IV

關

カ E ノ生物學的性狀二於ラモ亦變化ヲ惹起セシ結果ニアラザルヤヲモ想像セザル可 腫瘍ガ漸次移植ヲ反復セラル、經過中ニ於テ、形態的ニ一定ノ變化ヲ反復現出 カラザルヲ以テ スルガ如ク、

ナリ

が如 即チ神經障碍ノ影響ナルヤ、將タ又腫瘍ノ生物學的變性ニョレルモノナルヤ頗ル疑ハザル可カラザル 驗法ニ因レル結果ガ同一ナラズ、各々特徴ヲ有シ、尙癌腫及ビ肉腫ニ於テモ同様ナルヲ觀ラ、神經切 斯 ヨリ齎ラサレタル神經機能廢絕及ビ其ノ結果ガ絕對的第一原因ヲナスモノト信ズルモノナリ。 クノ如ク論ジ來ル時、 モ、余等ハ移植試験ニ際シ加へタル神經損傷ノ存在ヲ忘ル、モ 然ラバ余等ノ得タル成績ハ果シテ何ニョリテ影響セラレタルモノナルヤ、 ノニ非ス、余等 ノ種 々ノ異 v ル質

故ニ余等ハ本實驗ノ結果ニ對シ、

康 惹起シテ、斯ノ如キ 3/ 移植 經性不使用性萎縮ヲ誘發シタル部位ニ移植セラレタル腫瘍ノ發育增殖及ビ移植成績ハ概シテ不良ニ 神經切斷ト移植腫 判定ヲ許サレザ -是等ノ成績 於ケル 3 或 ハ移植後 モノニ比シテ可良且ツ顯著ナルモノ多ク、反之シ神經損傷後該神經支配下組 ルモノニシラ單調ナル影響ノ關與ニアラザル可キ事ヲ結論セ 結果ヲ示シタルモノナルヤ、 瘍ノ發育增殖トノ間ニハ、密接ナル關係ノ存在スルモノニシテ、神經切斷ト同時 定時 癌腫及ど 日ヲ經テ神經ヲ損傷シタル部位 肉腫 ノ何レニ於テモ同様ナルモ、 先キニ考察推論セル所ニョ 二於ケル移植腫 神經切斷 が二次的 瘍ノ發育増殖 リテ明 ント欲 カナル 如何ナ カジ 如 ル關係ヲ 各對照健 ニ於テ、

本實驗ニ於テ觀察期間ヲ三週間トセシハ、移植腫瘍ノ發育增殖ノ急速且ツ旺盛ナルモノニ於テ、 三週日以上ノ觀察が實際上

〇木村・中本・神經切斷ト移植腫瘍ノ發育增殖トノ關係

外 7 iv 視 + スル タサシメタル場合二於テ、 シテ以上擧示セル所ノ種々ノ條件ノ他ニ、神經切斷ガ移植腫瘍ノ發育增殖ニ對シ、可良ナル結 否 能 P 7 ハズトスルモ、 Æ ザ IV 可 尚積極的二主要原因ヲナスモノナラント 速斷 71 5 神經切斷ニョル移植部位 ザルモ、 ---樣 ノ試験列 = ノ比較的運動静止ガ大 於ケル結果ヲ對照セバ、 スル能ハザル可シ。 イニ關係ス 假合全然之レヲ度 IV ニア 5

所 要ナル關係ノ、他ニ伏在 上ノ如ク観察 余等ハ是等 定所見ヲ根據トシテ、主要ナル原因トシテ認メシモノモ、 他二份幾多 スル時ハ、本實驗ノ結果ハ セルモノニアルヤモ計り知ル可カラザレド、余等ノ努力ハ遂ヒニ 空 ノ複雑ナル關係 リシナリ。 ノ存 極メテ簡單 在ヲ疑 ナル原因 ザ IV E 却ッテ遠因ヲナスニ過ギズ、一 ノニ 的關係ニ シテ、 因リテ左右セラル、ガ 或ハ余等ガ前 記 總越 シクシ 如 層重 セル

是等ノ總テヲ闡明セ

ント

ス

ルモ能

21 -17-

無キニアラザルモ、 共 其 E IV 1. V 藤繩系 Æ III 1 = トハ相異 1 = テ余等 リ數年ヲ經過シ レバ・ 肉腫 2 ノ成績ニ比シ大差アルヲ觀レバ、 t ノ實驗成績ヲ先輩諸氏ノ報告ト對照スルニ、Adler & Sittenfield, Aschner 及ビ多少疑問 余等ガ使用セル原種腫瘍ハ京都帝國大學病理學教室ヨリ分與セラレタル所 (勿論藤縄氏當時ノ移植試驗ハ藤繩系肉腫ノミヲ使用セラレタルニアラザルモ)ニシラ、 黨 ルヲ認ムルモノナルガ、其ノ何レニ向ッテモ一歩ヲ進メテ是非的批判ニ 1.7 他 本田=市川氏等ノ成績トハ大體ニ於ラ一致シ、藤縄、末安=藤浪及ビ加藤等諸氏ノ 方面 タル今日二於テ、 3 リ一層ノ興味ヲ以テ是等 同系腫瘍ヲ以テ復試 移植 世代ヲ累チタル今日ト數年以前 ノ結果ヲ觀察 -1-ル余等ノ成績ガ、 12 110 IV 可カラザル ノ同 藤繩 腫瘍ヲ比較シテ、 E 出ズル能 末安 ノ大黑鼠癌及 ノト 信 = 藤浪氏 べ。 ハザ 何

十ケ月ノ男子ニ於ケル腹膜後畸形腫ノ一例

東京帝國大學醫學部病理學教室

醫學士 金 子 義

情言

凡り畸形腫(Teratom) ノ發生ハ古之ヲ谷異(Tsスマィ= Wunder)ニ思惟シ研究セラレシモ 其定義ニ歪リテハ今尙ホ議論ヲ釀シツ、アリ 一般ニ發生異常ニ基ツク先天性混合腫瘍ノ複雑ナルモノト認メラレ Lexer ハ混合腫瘍ト復畸形トノ移行型ニ シ テ複畸形ノ一部ガ

到ル所ニ蟄生スレドモ基等ニ於テハ遙カニ稀ナルモノナリ、故ニ本研究ハ從來主トシテ生殖腺方面ニ傾注セラレタリ。余ハ生殖腺ニ 學上ノミナラズ發生學上ノ見地ヨリシテモ甚ダ興味ヲ感ズ、聊カ將來ノ攀考ノ資タルヲ得ンカ。 何等關係無キ腹膜後畸形腫ノ剖檢ヲナシ而カモ複雜ニテ Wilms ノ所謂胎見腫(Embryom)トモ云フ可キモノニシテ其稀有ナルト腫瘍 而シテ畸形腫ノ多クハ生殖腺ニ於テ遭遇セラレ其他殆ンド線テノ部分即チ胸腔、腹腔、態骨部、頸部、頭部、頭蓋腔、脊椎管、眼窩等

實驗例

息者、水岡菜、男、生後十ヶ月

臨林的診斷、腹腔內腫瘍

隆セルモ如何ナル部分ヨリ始マリシカ明ラカナラズ、生後六ケ月東大小兒科ニ入院セリ、其時ハ體格稼常大、榮養狀態寧ロ可真、腹 シト云フ、之レ迄消化不良症ニ罹患セル外何等著患無シ、生後三ケ月以來消化不良症性ノ便ト乳ノ嘔吐アリ、四ケ月以來漸大腹部膨 遺傳的關係無の父母ニハ黴症ノ旣往症無シ、患者ハ六人兄弟中ノ末子ニシテ豫定日ニ顧調ニ分娩、唯後産週レ體重ハ大ナリ

〇金子・十ヶ月ノ男兒ニ於ケル腹膜後畸形腫ノ一例

試セルモノナレド,腫瘍移植後一週日ヲ經テ,坐骨神經ヲ切斷シ或ハ叉神經切斷後一週日ヲ經テ腫瘍ヲ移植シ鬢宵狀艦ヲ觀察セルモ 來タス可キャ計り知ル可カラザルモノニシテ,嘗テ藤蒗=末安兩博士モ謂ヘル所ナリ。倚余等ハ主トシテ先輩諸氏ノ實驗法=傲ヒ復 困難ナルト、一ツハ先輩諸氏が観察ノ法ニ倣ヒシトニ據レルモノナレバ、倚引續キ三週以上観察ヲ續行セバ、成績ニ如何ナル變化ヲ ノハ、余等ノ質驗成績ヲ確定スルニ極メテ有利ナル觀察法ナリシト俱ニ、先人ニョリテ未ダ試ミラレタル事ナキ觀察方法ナリトス。

ヲ表ス。(大正十三年八月二十日脫稿) 實驗中常ニ腫瘍ノ發育狀態ヲ觀察セラレ、不斷ノ御指導ヲ賜ハリシ角田教授竝ニ研究費ノ補助ヲ受ケシ癌研究會ニ對シ補腔ノ謝意

主要文息

末安, 京都醫學會雜誌:十四,十五,十六卷· 10)中本, 近畿婦人科學會誌,六卷· 11)中本, 癌,十八年(近日發表). 12) 1) 藤橋, 京都醫學會雜誌, 第十六卷, 2) 加藤, ィー三年, 5) 末安, 藤頂, 日本病理學會會誌, 第十一年, 4) 赤松(信) 祭 für Krebsforschung Bd. 13. 15) Goldmann, Beitr z. klin. chirurgie Bd. 72. 16) Adler & Sittenfield, Journ. of Cancer 本田, 市川, 大正十三年. 日本病理學會席上赞表演說. 13) Young, Journal of exper. med. 1897. 14) Aschner, Zeitschrift 5) 木村, 癌、十四年. 6) 內海,癌、十七年. 7) 山本,癌、十二年. 8) 清野,川上,日新醫學.五年. 9) 清野,

糎ニ及ブ、橫隔膜高位ニ押シ上ゲラレ左右共第二肋間ニ一致セリ。 ノ腫瘍ノ存在ナリ (後述) 腸間膜淋巴腺稍、腫脹、蟲樣突起垂ハ屈曲シテ尖端ハ內下方ニ向ヒ其長サ八 ハ少量ノ稍~汚穢ナル膿様ノ液體存ス、腹部ヲ開キ直チニ目ニックハ腹腔ノ全部ヲ占ムル大人頭大

次ギニ胸腔ヲ閉クニ胸腺ハ高度ニ萎縮セリ、兩側胸腔ノ肺及肋胸膜間ニ何等異常ヲ認メズ、心囊液透明ニシテ量正常。

織ノ發達不良,心筋及心内膜溷濁,兩心室及心房正常大,總瓣膜裝置及大動脈起始部等ニ異常無シ、明囲孔閉鎖完全。 心臓、重量二二・五瓦、屍拳大、心尖部ハ左室ヨリ形成セラレ、質度正常、心外膜灰白色ニ瀾濁シ冠狀動脈異常無シ、心外膜下脂肪組

肺臓、左右共淡紅色乃至灰白色ニシテ各肺葉ノ性狀殆ンド同ジクシテ割而淡紅色、氣容及血容共ニ不良ナリ、氣管枝粘膜ニ殆ンド

肝臟、重量一五○瓦、大サー三・五×八・○×二・五糎。

像殆ンド不明、肝門部變化無シ。 形狀ニ殆ンド異常無ク被膜坦ラカニシテ帶青赤色,硬度中等ニ增加シ割面暗赤色,平坦ニシテ溷濁腫腹ヲ認メ血容カナリ増加シ小葉

贈鑑、多量ノ黄緑色ノ稍く稀瀬ナル粘液ヲ以テ充タサレ粘膜ハ膽汁色素ヲ以テ滲潤セラル。

脾臟、重量一一·五瓦、大サ七·○×三·八×○·八糎。

質度硬クシテ萎縮シ、表面灰白色ニシテ皺襞多シ、割面平坦ニシテ淡青色、脾材著明ナレドモ濾胞不明、 刀ヲ以テ組織成分ヲ標取

臀臟、左、重量、二五瓦、大サ六・○×三・七×一・七糎。

腫瘍ト共ニ剔出セルヲ以テ計ラズ。

左腎ハ脂肪囊ノ發達不良ニシテ繊維性衼膜ハ剝離シ難ク,表面ハ平滑ナレドモ胎生分葉顯著ニシテ帶青赤色ヲ呈シ星芒靜脈明ラカ

界層及腎錐體充血シ一般ニ鬱血著明、稍に腫脹セリ。

○金子・十ヶ月ノ男兒ニ於ケル腹膜後畸形腫ノ一例

部ヲ診ルニ蛙ノ腹ノ如ク膨隆シ臍窩ハ外方ニ隆起シ腹壁ニ近カク腫瘍ヲ閬レ波動著明ナリ、打診ニテハ全部濁脅、肝脾ハ觸レズ、便 籍二入レルヲ以テ我が病理學教室ニ送ラレタリ、時ニ生後十ケ月。 液機維素性,べんちぢん試驗(十),第五囘一一〇竓ニシテ黃色ノ漿液纖維素性,而カシテ病勢依然トシテ減退セズ退院セルガ途ニ鬼 五囘行と共量少ナシ卽チ第一囘ハ約二○○竓ノ黃色透明液ニシテ比重一○一二、リヴァルタ(+)、ルウチベルヒ(+)、エスパッハー キ軟骨硬度ヲ有スルモノヲ觸レタリ、ワッセルマン氏反應陰性、レントゲン像明ラカナラズ、而カシテ八ケ月ヨリ腹部ノ穿刺ヲ前後 ハ㈱狀食慾可良、水腫無シ、七ヶ月以來腹部漸次膨隆緊張ヲ呈セルモ體重ハ減退ヲ來タシ八ケ月トナリテ食指大ノ可輒位性ノ壓感ナ %、第二回へ約一一五延、比重一○一七、エスバッハ一七%、第三回約一一○竓ニシテ稍~血液ヲ混ズ、第四囘約七○竓ニシテ漿

解音的診問

縮脾 腹膜後畸形腫 二、限局性膿性腹膜炎 三、肝鬱血及涸濁性腫脹 四、腎鬱血 五、貧血及萎 六、壓迫性萎縮膵 心筋溷濁 八、無氣及貧血肺 九 大腸加答兒 十、萎縮胸腺

解剖的所見(死後十時間半)

腦浮腫。

4、 肉眼的所見

白、左ノ鎖骨下ニ斑狀出血ヲ認メ屍斑下垂部ニ存ス、瞳孔兩側同大ニ擴大シ洞濁セリ、浮腫ヲ認メブ、頭部ニ濕疹ヲ認ム、皮下脂肪 ル、二緊張彈力性及硬キ部分ヲ認ム。 身長六五糎、體重五•四瓩ニシテ年齢ニ比シ體格小ナル男性 ノ 幼兒ノ屍、强度ノ瘦削ニテ顔貌一見猿猴ノ如シ、榮養不良、皮膚蓍 筋肉組織强度ニ萎縮セリ,死後强直ハ旣ニ認ムル能ハズ,而カシテ最モ顯著ナルハ腹部ノ蛙腹狀ニ膨滿セルコトニシテ之ヲ觸

先ヅ腹部ヲ開クニ大網ハ全ク上方ニ卷キ上ガリ該脂肪組織著ク減退セリ、腹壁漿膜ハ充血シ腹腔内

意セザリモ、 ノ隅ニ レラ强度ニ扁平萎縮ヲ呈シ腫瘍ノ被膜ニ直接ニ横タハリラ共ニ腹膜 F ラ ヲ認メズ、腫瘍ハ之ヲ容易ニ手ヲ以テ剝離スルヲ得タリ、 Ti. 夸リテ前方ニ押シ出サレタリ、 v 位置亂 平トナレリ。左側輸尿管ハ腫瘍ノ前面ヲ走行ス、左ノ副腎ハ肉眼的ニ其存在不 肝臓ハ著シク上方ニ壓迫セラレテ押シ上ゲラル。膵臓ハ頭部、 レタリ、 大動脈ハ腫瘍ト癒著セス、 睾丸、 副睾丸 而カシテ之レヨリ出 ハ下垂シテ常位ニ在リ、 其局所的關係ラ ヨリ被覆 9 明瞭ナラシムル為メ左腎及 ル血管ト腫 其他ノ部分ニモ セラル、 尾部共二上部二壓迫 場 脾臟 1. 明ニシテ左臂 、左側 ノ關係 何等異常 Ŀ セラ 往

腫瘍ノ肉眼的性狀

消化管ト

共二剔出シ以テ檢索ニ便ナラシ

メタリ

殘部 極 7 牛 2, V サ左 テ左右ニ 腫 w × 12 テ複雑 ノ右 = 傷ニシテ軟キ部分、 ŀ 右二〇糎、上下一五糎、前後一〇糎、 充分ナル 色ニシラ光澤ヲ有スル滑カナル結締 方ハ殆ンド囊腫性ニシテ多房性卵巢囊腫ノ外觀ヲ呈ス、後者ハ更ニ粟粒大ヨリ林檎大ノ 7 兩斷シ 知 3 ニシテー々名状 ŋ in 形 ノミニシテ如何ナルモノヲ容 Æ ノナリ、 次ギニ左右各々ニ於テ之が割面ニ平行ニニニノ割面ヲ作リテ觀察セ 成セラレ其ノ大多數ハ內壁平滑ニシラ光澤ヲ有シ又囊腫中ニ不完全ナル障壁樣 硬キ部分、 之ヲ種々ナル方向 スル能 ハズト雖モ大體二於テ腫瘍ノ中央部 緊張彈力性ノ部分等種々雑多ナリ、一見シテ混合腫瘍ヲ想起セ 重量約二○○○瓦(左腎及腸管ト共三)ノ大ナル略ト橢圓形 織 ル、ヤ詳細ニ 3 ノ厚キ硬靭ノ被膜ニテ全ク園マレ前面結節 リレントゲン寫真ヲ撮リタルモ僅 知ル能 ハザリキ、 ヨリ左半ニカケテ實質性 因テ之ヲ鉛直線 力多 房性或 " 狀ヲナス、 割面 ハ結節狀 二割ヲ入 シテ 大小 1 Æ

副腎、左方ハ腫瘍ノ爲メニ頓位シテ肉眼的ニ存在ヲ明ラカニスル能ハズ、右方ハ其位置正常ニシテ髓質未ダ變逢セズ。 腫瘍ノ爲メニ壓迫セラレテ高度ニ扁平狀トナリテ촗縮ス、質度へ頭部正常ナレドモ尾部少シク軟

胃,內容黃色ヲ呈スル粘液樣弱樣食餌,粘膜貧血,十二指腸,粘膜ニ蓍變無ク,乳頭部正常。

小腸ニ於テハ粘液樣ノ黄色便存シ、大腸モ亦然カリ、但シ後者ニ於テハ鼓腸强ク粘膜充血且ツ粘液ヲ以テ猩ハル。

膀胱、内容少量ノ精~溷濁セル黄色液ニシテ粘膜少シク充血、材ノ發達不良。

頭筋循器管, 異常無シ。

次ギニ頭蓋腔ヲ開ク。

脳、重量六七五五ニシテ浮腫ノ外變化無シ。

脳下垂體、變化無シ。

要之各器管ニハ何等畸形ト認ム可キモノ無シ。

腫瘍ノ他ノ臓器ニ對スル關係

常位ノ部分ヨリ左ノ腎臓ノ常位ノ部分ニ亙リテ後腹壁ト纖維性ニ癒著シ直チニ體壁腹膜ニ移行ス、 線ニ於テ上部ヨリ下部ニ向ツテ走リ、胃及十二指腸ハ腫瘍ノ爲メニ右上方並ビニ前方ニ、横行結腸 チ腹膜ョリ覆 殆ンド橢圓形ノ腫瘍、腹腔ノ全部ヲ占メ、韭基底ハ脊柱及大動脈ノ左方ニ位シ橫隔膜直下、 | 右方ニ押シ出サレ、小腸及上行結腸ハ下方ニ壓迫セラル、而シテ是等消化管ノ漿液膜 移行ス、右側ノ腎臓輸尿管及副腎ハ常位ニ在レドモ左側ノ腎臓ハ下方ニ壓排セラレテ腫瘍ノ被膜ニ ハル、モノニシテ前腹壁ヲ著シク前方ニ押シ出ス、次ギニ下行結腸ハ腫瘍ノ前面ヲ正中 ハ腫瘍ノ被膜 ép

テ検 骨(赤髓ヲ有スルモノアリ)及ビ軟骨ノ不規則ニ存在スルモノ、間ニ軟カキ稍~帶褐色ノ腦質ト思ハ モノヲ多量ニ介在ス。後者ニハ鷄卵大ヨリ鳩卵大ニ至ル幾多ノ囊腫ヲ有ス。是等ヨリ標本ヲ作成 (スルニ次ノ如シ(第一圖參照。數字ハ標本ノ番號ヲ示ス、以下之ニ準ズ)。 IV

此ノ血管ニハ内・中・外ノ谷膜良ク發育セリ。 きしりんニテ濃染スル細カキ光澤ヲ有スル無構造ノ物質ヲ見ル、是レ一種ノ頽廢産物ト認メラル、 リテ其染色度或ハ薄ク或ハ濃クシテー様ナラズ、尚ぉ此ノ中ニへまときしりん、えおじん殊ニへまと 內層筋ニテ互ニ癒合セリ、 二大腸ニ於ラハ隱窩低シ。而シテ各部ノ發育狀態之レ亦良シ。 ノ杯狀細胞ヲ認メザル所アリ、 **癒合セルモノニシテ前者ニ於テハ隱窩深ク杯狀細胞豊富ナリ、** 膜下膜トハ、カナリ密ニシテ内層筋、 標本第一、實質性ト囊腫性ノ境界ニ適スル部分ニシテ肉眼的ニモニツノ腸管ノ互ニ癒合セルモ 面上 想像セラル、モノナルガ之ヲ組織的ニ檢スルニ小腸(第九圖參照)及大腸各其外壁ヲ以テ互ニ 腸管ニ於ケル彈力纖維ノ發達ハ不良ナレドモ血管ニ於テハ良ク發達シ尚 而シラ小腸特有ノバーテット氏細胞ヲ明ラカニ證明シ得。 外層筋及漿液膜ノ發達甚が良シ、 但シ隱窩ノ起根部ノ近カクニ 雨腸管ノ癒合セル所ハ外層筋缺乏シテ 内腔ニハ多量ノ粘液産出 粘膜筋層 至レパコ 7

71 ク彈力纖維ヲ有シ筋組織ハ認メラレズ、數多ノ血管アリテ著シキ鬱血狀態ナリ、 標本第二、一囊腫壁ニシテ而カモ本腫瘍ノ外被膜ニ當リ此内腔ニハ膠様物質ト共ニ膿ヲ充 ハ充血 ○金子・十ヶ月ノ男兒ニ於ケル腹膜後畸形腫ノ一例 破壊セラレテ肉芽組織ノ像ヲ見ル、壁ハ結綿織 セリ組 織的ニハ内面ニ於ラ圓形細胞ト共ニ纖維素性物質ヲ有シテ上皮細胞ニテ覆ハレタル ヨリ形成セラレテ圓形細胞 ノ滲潤 之レ肉眼的 アリ外壁 タシ壁 二充血

穿刺 其他齒ノ萌芽ト考ヘラル、モノヲ一個認メタリ。 多クノ骨及軟骨無秩序ニ排列シ且ツ脳質ヲ想像セシムルモノ豐富ナリ、 五糎ヲ有ス、 隅 7 レントゲン寫真ニテ精細ニ檢索セルニ頭蓋骨ノ形狀ヲ呈セル像ヲ[髣髴シ、兩眼窩鼻腔ノ 存在ヲ 推察 ル最大ナル囊腫中ニ左 或 3 ヨリ出デ ノ關係 ハ息肉 4 (第八圖參照)。尚示前述ノ四肢ハ各骨ノ排列狀態分明ナラズシラ、下肢ノ確證ヲ舉グル能ハズ、 1: 樣 、臀部二相當スル部分ヲ明ラカニ認ムル能ハズ、足部ニハ不完全ナガラ五趾ヲ認ム、全長約 皮膚い灰白色ニシテ皺襞著シク毳毛多シ、 左下 ノ形 部 狀ヲ呈セ ニ膿ヲ存ス、 ノ下肢ト思考セラル、モノヲ包含セル事ナリ、其上腿部ノ上部ハ此囊腫 ルモノアリ、囊腫内容ハ水様、粘液様、膠様、 iffi カシテ甚ダ興味ヲ喚起セ 其他不規則ニ走レル腸管ヲ有ス、 シハ左半 ノ制 脂肪樣、 而カシテ割面ヲ利用 面 二於テ本腫 粥様等ノ物質及數度 瘍 中央部二 ノ上部 ルシテ再 二位

腫瘍ノ顯微鏡的所見

肉眼 ぶっ施 ガ面ヲ右側部割 一肉 的 リカ左 セ = " |眼的所見ニ於ラ述ベタルガ如ク本腫瘍ハ大體ニ於ラニッノ部分ニ區別スルコトヲ得、 成 第四、 年二亙リテ實質性ニシテ殘部 IV ~ 1 各異ナリタル外観ヲ呈スル部分ヲ選ビ而カモ多数ノ標本ヲ 左側部割面第二、第三ト名ヅケテ以テ檢索ニ便ナラシメタリ、 面第一及左側部制面第一トナシ、尚非此制面ニ平行ニ割ヲ 入レ ラ にノ右方 21 殆ンド嚢腫性ヲ 呈セル Æ ノニ 作成シ之レ シテ先ヅ左右 面カシ 各側部 ガ顯微鏡的檢 テ各断面 一兩斷 割 即チ中 面第 1) 2

右 |側部割面第一、本制面に於テハ約三分!一以上ハ實質性ニシテ殘部ハ全ク囊腫性ヲ呈シ前者ニハ

ラ増加シテ結締織へノ移行像ヲ見ル。 シー個叉ハニ個同 可良ナル彈力纖維ヲ見ル、又淋巴腔ト認ムベキモノアリ血管亦豐富ナリ。內壁ノ一部ニ腦質アリテ 近カクニ結繙織東ヲ有シ軟骨島狀ヲナシテ介在ス、軟骨細胞ハ圓形又ハ長圓形ニシテ泡狀ヲナ 一ノ囊内ニ在リ核モ見エ、間質ハ硝子様ナリ、而カシテ軟骨細胞ハ邊繰ノ一部ニ於

y, 層ハ此標本ニテハ縦走スル結繙織ヨリナリ内層ハ鬆疎ナル結繙織ノ橫斷面ニシテ一部ニ於テ結繙織束 ガ滑平筋束ヲ包圍セル像ヲ見ル、 標本第六、前者ト同様ナル關係ニ在リ且ツ之レト隣接セル部分ニシテ大體內外二層ヨリ成レリ。 外層ノ結締織間ニハ圓形細胞ノ滲潤、血管及彈力纖維等多シ。 內面ハ上皮細胞ニテ覆ハレズ少量ノ腦質ノ存在ハ前ノ標本ノ續キナ

高度ノ鬱血ヲ呈ス、之レ宿主體ニ於ケル左副腎ノ所在肉眼的ニ不明ナリシ リ外層中ニハ副腎介在シテ細長キ形ヲトリ全ク皮質ノミニシテ各層ヲ明ラカニスルヲ得ズ、而カシテ 長夕内面光澤アリテ細カキ凹凸ト皴襞多ク散在的ニ隆起部ヲ有ス。組織的ニハニツノ ト信ズ、 次ギニ內層 之レ亦前ノニッノ標本ト同ジ關係ニアルモノヨリ作レルモノナル 素ニテ覆 | 小前ノ標本ノ續キニシテ圓形細胞ノ滲潤ハ見ラルレドモ唯之レト異ナルハ滑平筋 ハレタルコトナリ。 ガ正二此 ガーツノ囊腫 所 二轉位 結締織層 セルモノ 21 稍~細 ョッナ

此所ニハ强度ノ壓迫 スルニ外壁ニ於テ膵臓ノ一部鬆疎ナル結締織ニテ包圍セラレテ癒著シ立派ニラ氏島ノ存在ヲ認メ間 前者ノ續キナル大ナル囊腫ノ一部ニシテ且ツ本腫瘍ノ外壁ノ一部ニ該當スルモ 1 爲メニ扁平トナレル宿主體ノ膵臓ノ輕ク癒著セラル、ヲ見ル、今之ヲ組織的ニ ノナリ。

シラ赤色ヲ呈セシ所以ナリ。

多層 薄キ數層 囊腫ヲナ ノ氈毛上皮排列シ ヨリナリ之ヲ組織的二見ルニ八ツノ薄キ ス E 本腫 ノナリ、 鴉 ノ外被膜 其内面光澤 テ一部即手前 1 部二當ル所ヲトレルモノニテ前ノ標本ト異ナレル鳩卵大ヨリ大ナル アリラ灰白色ヲ呈シ、一般ニ滑カナレドモ皴駿ヲ有ス、 ノ標本ヲ作 V ル変 結縮層五二 想起セシ 腫 -20 近 疎二相並ピラ層ヲナセリ、 71 キ 所 三八圓形細胞 ノ滲潤ヲ見ル、 壁ノ内面 肉服的ニハ

がど 稍~褐 質ナレドモ髓質ヲ認ムル能ハズ、此皮質内ニハ 結締織纖維絲狀 ヲナシテ混ジ 是等ノ間 扁 IV 嚢腫ニシテ薄キ壁ヲ有スル小ナル嚢腫ノ集合セルモノナリ。 本上 標 彈力纖 皮ノ存 色ヲ呈スル色素細胞多シ、 此下層 前ノ襲腫ニ近カク且 スル 維豊富ナ 部分アリ尚ホー 二ハ薄キ結綿織層アリ尚ホ次ギニ圓形ノ核ラ有スルぐりや細胞アリラ正常ノ大腦皮 y, コ、ハ氣道ノ一部分ラ ツ本腫瘍ノ周圍ヨリ稍く 部分骰子狀 蓋シえべんぢうむ細胞ニテ取り園 ノ細胞 アリテ核い国 内部ニテ腦質ノ存スル中央部ニ近カク位ス 所々ニ薄墨色ヲ呈ス、 一形ヲナス、之レえぺんぢうむ細胞 7 v タル所い脳室ト考へラル。 組 = 織 黑色 的 = ハ多層 ニシテ þ

尖 リタ 標本第五、 腫ノ三者相合 及彈力纖 12 細胞 ノ内壁ニ 本腫 維ノ存在スル部分ノ連續ナリ。 3/ ロスル部分ヲトリテ檢スルニ被膜ノ外壁ニ當ル所ハ前ノ標本ニ於テ見タル豐富ナル結 膓 ハ圓形 テ桿狀 ノ被膜及ビ内面光澤アリテ僅カ褐色ヲ帶ビタル大小ノ皴駿ヲ有スルニッノ鳩卵大 ノ核 細胞ノ滲潤アリ纖維素ニテ覆ハル、此細胞滲潤ハ他ノ結稀織間ニモ ラ有シヴァンギーソン氏染色法ニラ黄色二染マル所 iffi 71 3/ テ全部殆ンド 結締 織 3 ŋ 成 1) 唯 1 僅カ 部 紡錘狀 ノ筋織 存在シ發 維ヲ混 兩端

狀態等ニョリ頭部ノ皮膚ト考へラル。 毛筋ヲ認 含有シ纖維狀ヲ呈ス、中ニハ核ヲ有スルモノモアリテ濃染セル像モ認メラル、此他毛根ヲ多數ニ存 尚ホ腦 質ノ近カクニ硬艦膜ト想像スベキモノヲ存ス、斯クノ如ク其位置及ビ皮膚ノ發育 シ立

ヲ檢ベタルモ陰性ニ終レリ。 之レニ近カクー見肉腫狀ヲ呈スル所アレドモ結繙織ト少量ノ筋纖維トノ入リ混レルモノニシテ何等異 シテ此部分ニハ多數ノ圓形又ハ種々ノ形ノ光澤アルへまごきしりんニテ濃染スル異物アリ、 明ラカニ腦質ト考へラル、部分ヲ檢スルニニ三ノ小囊腫ノ存スル所アリテ内面 標本第十二及第十三、 著卜 殖 ノ跡ヲ認メズ、 認メラレ 倘 赤確證ノ為メコッサ氏反應ヲ施セルニ陽性ナリキ、 脳質ト考へラル、部分ハぐりあ細胞 比較的彈力性ヲ有スル部分及ビ稍~帶褐黃色ノ軟カキ破壞シ易キ物質ニシテ ョリナリ血管ヲ有シテ充血狀態ナリ、 因ニ沃度反應ニテ澱粉様小 八圓柱 上皮ニテ覆 之レ石

四五ノ標本ヲ作成檢索セルモ何レモ新ラシキ所見無キヲ以テ省略ス。

第一二現ハレ 質及骨ハ前ョリモ少ナク其代ハリ大ナル軟骨片ガ多量ニ不規則ニ存在スルコト 部割面第二、 腸管ノ續キアリテコ、ニハ顯著ナル皺襞ヲ見ル(第二闘參照)。 此割面ニ於ケル實質性 **卜囊腫性** トノ面積 ノ割合ハ右华エト同ジ、 顯著ナリ。 但シ 旣述ノ標本

ノアリラ其細管状ヲナセルモノ、內部ニハ三層ノ圓柱狀細胞ヲ認メ是等ノ間 n 今此割 ノミ、 面 後者ハ大部分脳質ニシテー層ノ骰子狀ノえぺんぢうむ細胞ヨリナレル乳嘴狀物アルノミニ ノ實質性ト囊腫性ノ境界ニ 當ルニッノ部分ラトリテ檢スルニ前者 = = ハ結絡 ハ乳房 織 1 組織 及滑平筋ョ存 ノ如キ E

3 由 IJ 7 アリテ 成 來 1) 也 テ " 編 淋巴球、 此部 織及筋 分 白血 纖 = 近 維ニテ包園 一球等ノ圓 カク赤血 形細胞 球 t ヲ以テ充 ラレ彈力纖維 ノ滲潤高 タサレタル血管甚が多シ、 度ナル E 亦多 ガ其 1 他稍~大ナル細管狀 次ギニ内壁 ラナ 27 主 セ トシ ルモ テ

大同 小異ナル 上ノ標本 7 以テ省 主ト シテ本 略シ次ギニ中央部即チ頭蓋ノ存在 腫 瘍 ノ周 圍 3 リトリテ作 成 セ スル部分 N E 1 ニシテ此外 = 進マン。 倘 7: ニノモ ノヲ 檢 t

リナル 移 7 周 v 3/ 28 混べ、 テ脈 標本第九、 圍 タルモノア 久 散在的 筋 乳嘴 蓋 而カシテ 叢ト考へラル可 肉 組 3 一囊腫ニ接スル質質性ノ部 " 狀 肉 織 眼 ノ代 ノ造 硝子樣軟骨及ピ骨ヲ有シ中ニハ立派 此處 肪 的 細胞 構 = ハリニ 既ニ赤ク見エシ 7 = 注 呈 ノ攅簇アリ、 + 結 意スベキハ恰モ輸卵管様 ス E ノナ 締 IV 織 Æ , y ヲ有シ 7 y, 僅カノ小腸及ビ腦質ノ斷片又二三ノ小囊腫 Æ テ尚 ノナリ、 分ヨリノ標本ヲ 其原形質 7: 進ミテ其周圍ニハ腦質ヲ存ス、之ヲ以ラ輸卵管ニ非 骨ニハハーベール氏管通ジ周圍ハ濃密 21 Æ 透 ナル骨髓ヲ存スル 1 檢スルニ 明ニシテ、 横斷 殆ンド全部 面 ニシ 核ハ圓 テー Æ ノアリ種々 形ニテ濃染ス、 層ノ骰子狀 結 締 ノ扁平 織 ニシテ僅 ノ骨髓 細胞 ノ細胞 ナ n 然リト 一カ筋織 結 性 ニテ覆 細胞 ニテ 覆 ズ Æ

毛髮 見 iv 標本第 7 有 -7 2 十及第十一、 v 骨髓性 其長 E 1) 內部 サ約二 組 -織ヲ有ス、又皮膚アリテ上 粗 前 ハ多層扁平上皮ニテ圍 ナリ、 者 = 隣レル 組 織 的 部 分二 +0 檢 シテ大部分不規 スルニ T 皮 V 大部分骨膜 次 21 薄クシテ僅 IV 腔 T リテ内二多量ノ角化物質 則 7 = カー 有スル骨ョ 並ベル骨 層ナリ其表 3 リ成 リナリ又無 リ種々ノ 面 ニハ ノ鱗屑 角 數 化 形狀ヲナセ 細 + N + 部 ノヲ IV

經膠質細胞 此ノ一ヲ作成シテ檢スルニ大部ハ大腦ニ屬スレドモ起根部ノ少部ニ 於ラハ核比較的大ニシテ原形質除り良 3 リルナル 標本第五、本腫瘍ノ外壁ニ接シテ鵞卵大ノ腔アリ、莖ヲ有スル稍~細長キ小指頭大ノモノ及ビ之レ 皮質 1 ヨリ成リ有髓神經纖維ヲ認ムル能ハズ(第十一圖參照)。 體質 モノ・ニッ トョリ成ル、皮質ハ灰白層顆粒層 ガ本腫瘍ノ中央部ニ向ツテ突出セリ、表面滑 クハ發達セヌモノナルガ此處ニテモ亦然り。 (プルキン子氏細胞ニ於ケル) ヨリナル、 八立派二發達セ カニシテ黄色、 髓質ハ結綿織、 iv 毛細管ヲ見ル、今 小腦 ノ像ヲ見 顆粒層

染性炎症ノ惹起セラレシモノト思考ス、尚ホ腦質中ニロゼッテン形成ヲ認メ内壁ハ圓柱上 胞ト考へラル・モノニシテ其細胞核崩壊旺盛ニシテ白血球モ認メラレ、 セラル。 本第六、 後壁ニ接スル三角形ヲナセル一囊腫中ニ黄緑色ノ膠様物質ヲ充タセルモノニシテ腦質細 組織 ノ壌死アリ 皮ニテ園 カノ 傳

管腔内ヲ充タセリ、 充塡セ 標本第七、 n Æ 肉眼的ニハ特殊ノ外観ヲ呈シテ豌豆大ノ囊腫中ニ褐色ノ粘液様又ハ膠質様ヲ呈セル物質 ノナリ組織 該壁ノ外側ニハ軟骨ヲ 的 ニハ大腸ノ横斷面ニシテ杯狀細胞ノ多キコトハ特記スベク粘液物質ヲ以テ 有セリ。

考へセ 上皮ヨリ成リ角化セル部分ヲ認ム、又氈毛上皮ヲ有スル小ナル囊腫ヲ存 ノモノニテカ 標本第八、之レ亦特殊ノ形狀ヲ呈セルモノニシテ本腫瘍ノ前壁ニ存シ小指頭大ノ莖ヲ有スル結節狀 3 2 n Æ ナリノ硬度アリ表面灰白色、 ノアリテ近カクニ黒色ノ色素細胞及ビ軟骨ヲ見ル、如何ナルモノ・萌芽ナルャ不明 皺襞ヲ有シテ皮膚 ノ外觀ヲ呈 シ中ニ セリ、 25 組織的ニハ多層ノ扁 壁 1 脈 松絡叢

シテ何等特ニ記載スベキモノナシ。

ŋ 右側部割面第三、 レル革狀ノモノガ突出シラ充タセリ、肉眼的ニハ骨及軟骨ヲ見ズ(第三圖参照)。 腫ョリ成 ルリ、 此割面ハ前述ノニット異ナリテ種々雑多ノ像ヲ呈シ、大部分ハ小ナル鷄卵大及鳩 中央部へ比較的實質性ニシテ是等囊腫 ノ中へ莖ヲ有スル或 ハ脳 3 リ或

内腔ニ突出セル部分ハ正ニえべんぢうむ細胞ニテ覆ハレ其直下ニハ脳質ヲ存シ之ヲ離ル・ニ從ヒ結締 向ッテ突出 カ ガ散在シ漸次内部へ 標本第一及第二、本腫瘍ノ上後部ノ壁ニ鵞卵大ノ腔アリテ其壁ノ一部ヨリ息肉狀ニ巖ノ如ク内腔ニ 骨髓ヲ有スルモノ多シ、 |黄色ヲ帶ピ割面ニ於ラハ莖部ハ灰白色ニシラ硬ク他ハ小ナル多クノ囊腫ヲ見ル、 セルモノアリ、 進メリ、 實質性ニシテ大キサ鳩卵大、 尚ホ小ナル囊腫ヲ散見ス、 起根部即手本腫瘍ノ壁ニ近カヅクニ至レバ密ナル結締織、 兎ニ角以上ノ所見ニョリ脳室ヲ思ハシ 稍~彈力性ノ硬度アリ、 有莖ニシラ結節狀 組織的二見ルニ 軟骨及骨而

ノ部 th 1) ガ 此 .ニ癒著ス此ノモノニハ灰白色ノ中隔ニテ界セラレテ存スル小ナル嚢腫アリ或ハ黄色ニ見ユル脳質狀 シラ比較的染色質ノ少ナキ圓形狀ノ核ヲ有セル原形質ノ少ナキ細胞ノ攅簇アリ恰モ 本第三及第四、 或ハ結綿織 各層ノ排列ノ幾分ヲ不完全乍ラ認ム、 ノ、多クシテ骰子狀ノ細胞ニテ圍 ハ網膜 或 ノ萌芽ノ存在ヲ考フ(第十圖參照)。此他腦質、 本腫瘍ノ中央部ニ鷄卵大ノ腔アリラ舌状ニシラ海綿状ノ軟カキモノ此内壁ニ ハ黑キ色素ヲ混 ジー種異様ノ観ヲ呈ス、 マレ壁ニハ筋肉ナシ、其他粘液細胞、 3 V = 近カク黒色ノ色素ノ顆粒甚ダ多シ、 組織的 -軟骨、 見ルニ全體 結綿 多層氈毛細胞 織 ŀ 7 シテ乳嘴 網膜 見 = 1 見ラル、 阿 狀 見 アリ 纖維 3

左側部割面第二、唯僅カ中央部彈力性ノ硬度ヲ有シ他ハ殆ンド囊腫ヨリナル。數多ノ標本中ヨリニ

三ヲ述ベン(第六圖參照)。

ナリ。 此部分ニハ多層ノ 扁平上皮ニテ 圍繞セラレ 角化ハ明ラカナラズ、四肢ノ 起根部ニ連續セル所ナレド モ何等コレニ 關係ヲ有セズ 唯腦質アリテ 脳膜ノ 出血ト 認メラル、ハ 肉眼的ニ 暗赤色ヲ 呈セシ所以 標本第一及第二、比較的實質性! 部分ニシテ 四肢ヲ包含セル 腔ノ裏面ニ 當リ一部暗赤色ヲ呈ス、

球ヲ一 シ難 繙織原細胞及淋巴球ヲ混ズ、之レヨリ脂肪組織ノ發生スルモノナルヤ或ハ上皮小體ノ萌芽ナルヤ解決 標本第三、下部ニ存スル囊腫ニシテ中ニ膿ヲ充タス、鏡檢上興味アルハ殆ンド全部結繙織及ビ赤血 様ニ充タセル多クノ小血管トヨリ成レル周圍ヨル明ラカニ境界セラレタルモノアリテ僅カノ

左側部割面第三、總ベテ薄キ壁ヲ有スル囊腫ヨリ成リ鏡檢上特別ノ所見ナキヲ**以**テ略ス(第七圖叁

以上述ベタル所見ニョリ胎生的三肧葉ヨリ形成セラル、ヲ知リ何等惡性腫瘍ノ性質ヲ示メサズ。

文獻ニ現ハレタル腹膜後畸形腫

籬シ、而カシテ之レヨリ腹腔内畸形腫ノ報告ヲ見ルモ其數多カラズ、就中明ラカニ腹膜後ニ横ヌハレル畸形腫ハ甚が尠ナクシテ是等 性腫瘍ノ題下ニ之ヲ檢索シテ腹膜内及腹膜後ニ横タハレル畸形腫三十三例ヲ總括セルモ發生位置ニ關シテハ是等ノ研究ハ違カニ信シ ク文獻ヲ渉獵シテ是等生殖器管ニ關係スルモノヲ除キ數~擧ゲタル腹腔内畸形腫旣ニ五十例ニ達ス、Tarufi(一八八六)ハ腹腔内畸形 腹腔内畸形腫ハ必ラズシモ獨立ニ發生セズトモ轉位或ハ過剰ノ卵集カ叉ハ下降セス睾丸ノ畸形腫ニ於テ見ラル、モノナルガ余ハ普

"

見べ。 他數多ノ標本ヲ各部ヨリトリテ檢索セルモ唯色素細胞豐富ナルコトノ外更ニ特記 ス ~ + Æ ノヲ

存在スルコトニシテコ、ニハ腦質ノ外觀ヲ呈スルモノナシ、腸管ハ認メタリ(第四圖參照)。 右側割面第四、旣述ノ部分ト異ナルハ海綿狀ノ細カキ數多ノ囊腫ヨリナレルニッノ鷄卵大ノモノ、

Ħ ツ判 各部ヨリ切片ヲ作成シテ組織的ニ見ルニ殆ンド總ベテ囊腫ヲ見ル 断シテ如何ナルモノナルカ之ヲ檢索スルモ到底想像スル能ハズ。 ノミ = 2 テ其内面ヲ被覆ス ル細胞

左側部割面第一、右半1ノ對稱ニシテコ、ニハ旣述ノ如ク肢節ヲ有ス(第五圖參照)。 一、左ノ下肢ト考へラル、モノ、皮膚及ビコノ下層ニアル組織ヲ共ニトリラ檢 スルニ皮膚

キモノヲ認ム、 ス 發育程度へ胎生時ノ終リ頃ニ該當シ汗腺ト其輸送管ハ共ニ毛髪ノ間ニ散在シ皮脂腺モ亦見ユ、 ル被膜ニテ圍繞セラレタル圓形ノ核ヲ有スル神經細胞到ル所ニアリ、尙ホ末梢神經ノ分化ノ程度低 横紋筋ハ分化未熟ニラ横紋ヲ有セズ、皮下脂肪組織モ亦發育不完全ナリ。 核ヲ有

駿多キ皮膚ニシテ之ヲ鏡檢スルニ長管骨アリ中ニ骨髓ヲ有シ兩端ニハ軟骨球ヲナシテ整然トシテ排列 ノ爲メ充分ナル發育ヲナシ得ザリシ 標本第二、 而シテ化骨現象ハ輕度ナリ、此周圍ニハ發達セザル筋肉及結綿織、其外表ハ皮膚ニテ角化物質 前述ノ四肢 ノ下肢 ノ對照トシテ正 ハ起根部ノ後側ニ於テ之レト對照ニ幅 Æ = 右ノ下肢ノ痕跡ト推定セラル、 ノナル ~ 2 糎、 蓋シ狭隘ナル部分ニ在リテ壓迫 長サニ 糎ノ結節アリ、 表面 八级

ルモノ、及脂肪組織等ヲ存シ著者ハ胎兒原基ノ箝入ト認メタリ。

軟骨、骨及繊維組織等總ベテノ环葉ヨリ成レリ。 ノ大キサニ至ル嚢腫ヨリ成り、嚢腫中ニハ軟カキ物質ヲ存セリ、組織的ニハ皮膚及ビ其ノ器管"中樞神經"末梢神經 Nicholson (一九〇五)二十一歳ノ男子ノ剖檢例ニシテ脊椎ト右腎トノ間ニ横タハリ下力ハ恥骨迄達 シ 繊維性ノ被膜ヲ有スル胡桃大

腫ョリ成リテ最大ノ囊腫中ニハ自由ニ移動スル胎兒ノ萌芽ヲ存シ長サ十三糎ニシ テ 外見上比較的景育良好ナル 頭部ト下胴體トヲ認 間腹中ニ櫢タハリ、上ハ腹腹後ニ於テ膵臓ニ附著シ胃ノ大彎ト密著セリ、二十四時間ノ後虚脱ニテ死セリ、腫瘍ハ多クノ種々ナル囊 Rosenbach (一九○六)三歳ノ男兒,皮膚樣囊腫ノ診斷ノ下ニ手術セリ,其時腫瘍ハ二八種×一○十一二種ノ大キサニシテ下行結腸 コレニハ心臓ノ外殆ンド凡テノ臓器ヲ存ス。

ト認メタリ、骨、軟骨、筋肉、毛、齒、中樞神經等ノ三肧葉ヲ有セルガ顎骨ノ痕跡ノ外何等認ムベキ器管無シ。 且ツ左方ニ横タハレリ、要スルニ該腫瘍ハ後部ヨリ腸間膜起根部中ニ入リ込ミテ餐育シ而カシテ背側腹膜外ノ萌芽ヨリ發生セルモノ ル材料ト信セラル、卽チ腹腔内ニ於テ小兒頭大ノ結節狀ノ腫瘍が大網、小腸、胃、十二指腸及脊椎ト密接ニ癒著シ脊椎ノ前方ニシテ Schönholzer (一九〇七)二歳ノ男兒ノ急性腹膜炎ニテ死セルモノヲ剖檢シ"肉眼的竝ビニ顯微鏡的ニ詳細ナル記述ヲナシ甚ヶ價値ア

ピニ滑平筋、結締織等ノ三床葉ヨリ形成セラレ而カモ宿主ト腫瘍トハ同ジ發育時期ニアルモノト認メタリ。 膚及ビ該附屬物中樞及末梢神經豐富ニシテ Schönholzer ノ例ニ類似スルト述ベ且ツ網膜ノ色素細胞、腸管、唾液腺、骨軟骨、横紋粒 側全部ヲ充タシ腹膜後ニ横タハレリ、大キサハ一五×一二×七・五糎ヲ有シ小兒頭大ニシテ腹腔内諸臓器へ强度ニ胚迫セラレタリ、皮 瘍ノ診斷ノ下ニレントゲン寫眞ニテ檢セルモ知ル所僅カ腫瘍ノ擴かり方ノミ、遂ニ衰弱ノ爲メニ死セリ、剖檢ノ結果腫瘍ハ腹腔ノ左 |Kalb (一九〇九)||四ケ月ノ女兒、生後九日目ニ母が 左腹部右ヨリ 肥厚シ且ツ硬キコトニ 氣附ケリ、其差漸次著シクナリで腹腔内腫

生セリ、顯微鏡的ニハ一部間質ヲ有シ、之ヲ有セザル一部ニハ大ナル多形狀細胞ノ異常增殖アリ、軟骨滑平筋,膵臓檬ノモノ。 Johnson, Lawrence (一九○九)腹膜後畸形腫ヲ有シ且ツ脊椎ノ結核ヲ合併セルモノ報告ナルモ遺憾乍ラ其詳細ヲ知ル能ハズ。 Kusnetzow (一九一〇)約四五ケ月ノ男兒ニシテ此腫瘍へ恰モ七ケ月ノ妊娠ノ子宮ノ位置ト形狀ヲ具有シ小骨盤ノ腹膜後組織ヨリ發

ノ鏝告年度、年齢、性別、手術ニョルカ剖楡ニョルカ、愛生位置、大キサ及じ内容物ノ如何ナルモノナルカヲ知ルハ興味アルモノト

骨、軟骨、横紋筋織維、神經纖維及脂肪組織等ヲ有セリ。 迄達シ其後面へ腎臓ノ上部ニ位シテ腹膜後ニ横タハレルモノト看做サル,毛髪紋ピニ毬狀腺ヲ有スル皮膚,腸、大ナル腔腔ヲ有スル Hosmer (一八八○),八ヶ月ノ女兒ノ剖檢死ニ於テニ「ポンド」ノ重サノ小兒頭大ノ腫瘍が右ノ全腹腔ヲ占メ肝臓ノ下ヨリ骨盤入口部

脂肪組織及滑平筋ヲ有セリ。 膜後ニ發生セルモノナリ、硬脳膜及ビ神經ヲ有スル頭蓋腔ノ痕跡、攝護腺、海綿檬造構ヲ呈セル生殖器ノ萌芽、其他骨片、結締織 Marschand (一八八一),三十三歳ノ女性ノ肺結核ニテ死セルモノ、剖檢例ニシテ手拏大ノ腫瘍大動脈ト左腎トノ間ニ樻まハリテ腹

全の占メ腹膜後ニ發生セルモノナルが精細ナル組織學的檢査ヲ施サズ、唯脂肪組織ヨリ成り内部ニ骨成分ヲ有スルコトノミ記セリ、カ ノ Lexer ハ肉眼的ニハ畸形腫ニ算へ入ル可キモノト信セリ。 Tillaux(一八八六),二十二歳ノ女性ニ於テ分娩後腹腔内腫瘍ヲ發見シ 手術ニヨリテ剔出セリ,重サ六「ポンド」ヲ有シ左ノ腹腔ヲ

盤入口ヨリ横隔膜ノ左部迄達シ横行結腸ノ後部ニテ左腎ノ前ニ横タハレリ,生殖器管ト關係ナ ク 一部分 ハ 實質性ニシテ他ハ囊腫性 ナリ、僅カノ神経組織、胃、氣管粘膜、叉唾液腺ヲ意味スル部分、其他滑平筋、硝子模軟骨、脂肪組織及ビ結締織ヲ有セリ。 Bronha(一九〇11)、二十六歳ノ女性ノ腹腔内ヨリ大人頭大ノ腫瘍ヲ手術ニヨリテ剔出シ手術後敗血症ニテ死セル例ニシテ腫瘍へ骨

移サレタルモノナリト云フ、生後五ケ月腹部漸次膨滿、左ノ上腹部ニ手拳大ノ硬キ腫瘍ノ存在ヲ發見セリ、手術ヲナシ囊腫壁ヲ腹壁 長の上下ニ短カの長徑十四糎ナリ,腫瘍ノ基底ハ脊椎及大動脈ノ左方ニ位シ腎臓ノ常位ヨリ少シク下部ニ亙リテ極メテ廣キ基底ヲ以 ト縫合シ内容ヲ漏出セルモ途ニ衰弱ニテ斃ル、腫瘍ハ左側腹壁ノ後面ヨリ起リテ腹腔ノ大半ヲ占ムル小見頭大ノ大キサニシテ左右ニ テ後腹壁ニ癒著ス,腫瘍壁ニハ結締織血管淋巴腺組織又ハ所謂胎生組織ノ如ク見ユルモノアリ,皮膚アリテ毛髪,毛囊,汗腺,皮脂 今(一九○四)、九ヶ月ノ男兒ニ於ケルモノニシテ本邦ニ於テ最初ノ貴重ナル報告ナリ、初メ内科ニテ腎臟水腫ノ疑ヲ受ケ後外科ニ 滑平篇纖維ヲ認メ、骨、硝子模軟骨、唾液腺ヲ想像セシムルモノ、乳腺ノ痕跡(?)、氣道ノ痕跡、網膜ノ色素上皮ヲ想起セシム

於ラ尠ナシ、蓋シ當然ノコトト云フベシ。

ナリ、 殖腺 完全ナルー個ノ生體形成ノ傾向更ニー層大ニシテ胎兒ノ全部或ハー部卽チ寄生性複胎ヲ發生スルモ 少ナクシテ其組織ノ成熟度ハ初期ニ停滯シテ多クハ惡性ヲ呈スルモノナリト稱ヘラル、此等ハ主ニ生 シテ之ハ特ニ女性生殖腺ニ多ク一般ニ組織ハ成熟シ臨牀的ニハ良性ト稱ヘラル、反之實質性ノモノ . 存スルハ周知ノコトナリ前者ヲ畸形腫、後者ヲ眞ノ新生物ト見做ス、 而シテ一般 關シテハ畸形腫ハ主トシテ生殖腺ニ遭遇スルモノニシテ之レニニツノ型即チ囊腫性ト實質性 ·形腫ニ就キテ論ゼラル、所ナリト雖モ又他ノ畸形腫ニモ適應スルヲ得ルモノニシテ之ニテハ ニハ臓器ノ多クノモ ノヲ缺クヲ普通トシ、 心臓ハ常ニ無シ、余ノ例ニ於ラハ囊腫性、 而シテ多クハ囊腫性 ノモノニ

ノ狀態ニ在リ、血管系統トシテハ血管甚ダ多ク且ツ良ク發達セリ、但シ旣述セル如ク心臓ハ常 橫紋筋 = IV = 最 Æ 之ヲ有シ化骨ヲ認メラレ軟骨モ亦多シ、齒牙ハ畸形腫ニハ普通ニ存在スルモノナレドモ文獻ヲ案ズ 次ギニ**其組織的構成物**ニ關シテハ先ヅ骨ハ特ニ發育スルヲ得ルモノニシテ余ノ例ニ於ラモ甚ダ豐富 ノナリ、 モ普通二見ラル、モノナルガ余ノ例二於ラモ大腸、 腹膜後畸形腫ニハ何故カ稀ナルモノ、如ク觀察セラレ余ノ例ニ於テハ僅カ其一萌芽ヲ發見シタル ノ兩者ヲ具有セルモノナリ。 ハ肢節ニ存スルノミニシテ甚ダ尠ナク且ッ未ダ分化セズシテ横紋ヲ認ムル能ハズ、即チ胎生期 筋組織ハ滑平筋非常ニ多量ニシテ腸管囊腫壁、腫瘍被膜中及其他東ヲ成シラ到 呼吸器系統トシテハ只氣管ヲ暗示スル小部分ヲ認メタルノミ、消化器系統ニ於テハ腸管ハ 、小腸ハ顯著ナル發達ヲ示メセリ。 茲ニ興味アル ル所ニ存ス、 い二缺ク

箝入ト稱シ得ペキモノナリトセリ而カシテ腸管ノ或部域ノ平滑筋層中ニ癌細胞ノ滲潤ヲ認メ悪性ヲ有スルモノナリト云フ。 發育セル器管トシテハ頭部艦幹ニ比スベキモノアリ後者ヨリハ三ツノ肢節ヲ出ス、故ニ者者ハ畸形腫而カモ Lexerノ所謂疑ナキ胎兒 表ハ多房磚狀細胞ニテ覆ハル、内肧葉トシテハ腸管、唾液腺、中肧葉トシテハ骨軟骨、外肧葉トシテハ鵩質、皮膚、毛髪ヲ有シ高等度ニ 生せり、一九×一八×一○糎、九○○瓦ノ重量ヲ有シ多房性霎腫ニシテ其一部ニ胎兒ニ似タル寄體ヲ有シ、寄體ハ囊腫ヲナス、此外 認メズ、腫瘍ハ大人頭大ニシテ左後腹腔ニ於テ脊柱ト左腎トノ間ニアリテ其後面ニテ腹部大動脈壁ニ癒著シ血行障碍ヲ起シテ腹水ヲ モ手術後鬼籍ニ入レリ、而カシテレントゲン寫真ニテハ中等度ノ濃キ陰翳ヲ認ムルコトヲ得タレドモ生體ノ骨ニ比スペキ强キ陰翳ヲ 津田(一九二〇)、一年五ケ月ノ男兒、生後六ケ月頃ヨリ腹部膨隆ス、腹部兩側性靈腫ノ診斷ノ下ニ手術シテ腫瘍ハ馴出セラレタル

糎ノ胎兒ヲ有セリ、後者ノ報告ハ二歳六ケ月ノ女兒ニ シ テ左腎ト共ニ約八―一〇「ポンド」ノ重量ヲ有シ Lexer ハ ibibl ノ側ト似ぁ ル位置ニ於ケル胎兒箝入ト想像セリ即チ左側ノ腹腔内ニシテ橫隔膜下ヨリ骨盤迄擴ガレリ。 其他 Buhl 及ピ Phillip ノ報告アリテ前者ハ生後四時間ニテ死セル女兒ニシテ腫瘍ハ腹膜後ニ位シ胎兒箝入ナリシトイフ、中ニニ

17.72

七ノ割合ナルヲ以テ丁度相半ス。 ニ多シト云フ、今前述ノモノニ余ノ例ヲ加ヘテ十四例中(一例ハ不明ナルニヨリ除外セリ)七ニ對スル 扨男女!別ヲ見ルニ何等ノ意味ハ存セザルガ如シト雖モ Wilms 其他ノ學者ハ卵巢ノ關係ヨ リ女性

ラレタル年齢ヲ見ルニ腹膜後畸形腫ニ於テハ生後直チョリ三歳以下ノモノニ甚ダ多クシテ之ョリ二十 テ觀察スルニ Porges ノ七十二歳ノ老年ニ於ケル報告例ァリ、要之其發見ハ殆ンド幼兒ニ シテ高年 年齡的關係ニ就テハ畸形腫ノ發生ハ先天性ノモノナレバ何等ノ意味無キハ勿論ナレドモ令其發見セ

腹膜後ニ發生セルモノニ於テ淋巴肉腫ト癌腫ノ部分アリラ轉移ヲ形成セル例、Pilliet (一八八八)ハ二十 及其轉移ヲ有スル例ヲ各報告セリ、余ハ此ノ點ヲ特ニ注意シテ檢ベタルモ何等變性腫瘍ノ徴ヲ認ムル ザルモノニ於テ肉腫組織ノ存セル例。為森氏ハ後腹膜腔ニ原發セル惡性混合腫瘍ニ於テ惡性脈絡細胞 四歳ノ女性ニ於ラ脊椎ト大動脈トノ前ニ密接シ左ハ腎臓ノ前ニ位スルモノナルガ其發生點明ラカナラ テ モノナレドモ亦腹腔内畸形腫ニモ認メラレ津田氏ノ例ハ腸管ノ或部域ノ平滑筋層中ニ癌細胞ノ滲潤ヲ .剔出セルモノニ於テ腺腫性癌ヲ認メ後ニ再發シテ 死セ ル例、Teller (一九○四)ハ五十四歳ノ男子ノ |明シ惡性ヲ有スルモノナリ、Montogomery (一八九八)ハ十二歳ノ少女ノ腹膜内畸形腫ヲ手術ニヨリ

事ナカリキ。 終リニ診断二就テ一言スルニ診断ノ下サル、モノ殆ンドナクシテレントゲン寫真ニテモ詳細ナル事

腹腔内畸形腫ノ發生論ニ就テ

ヲ知ルハ不可能ナリ。

腫ヲ異常妊娠ノ結果トナシ睾丸ニ生ズルヲ箝入トシテ區別セリ、尙ホ其後幾多ノ學者ニヨリテ論セラレカノ Wilars ニヨレパ生殖腺 正常組織が異常刺戟ノ爲メ他ノ種類ノ組織ニ變化スルコトノ三ツノ要約ノ下ニ生ズルモノト稱ヘタリ、一八五二年 Lebert ハ卵巣囊 始メテ之ヲ打破シテ大ナル業績ヲナシ妊娠ノ結果ニ非ズ一種ノ成形力ニ歸セリ、其後一八一二年 Meckel ハ妊娠標ノ狀鵬重復畸形及 ドモ生殖腺ニ直接ニ關係ナク發生シ得ルコトハ夙ニ説明セラレタルトコロナリ、而シテ腹腔内畸形腫ノ發生ニ就テ歴史的ニ觀察スル ヲ除キ腹腔内畸形腫ハ一、膾兒内胎兒箝入。二、腹側或ハ會陰部ヨリ外肧葉ノ翻入、三、ウオルフ氏管ノ外肧葉ヨリ發育スルモノト述 古之ヲ迷信的ニ神懲ノ爲メ女ノミナラズ男ニモ異常妊娠ノ現象が起ルモノト考へ甚ダ不思議ノモノトセリ、一七八五年 Blumenback 腹膜内及腹膜後畸形腫へ生殖腺!所謂胎兒腫、類胎兒腫ニ類似セルモノニシテ下降セヌ睾丸。又過剰ノ卵巣ヨリモ發生スルモノナレ

中ニ在リシ胃粘膜ニ潰瘍形成ノ珍ラシキ例ヲ報告セルコトナリ、神經系統ハ殆ンド普通ニ認メラル、 腹膜後畸形腫以外ノモノ即チ腹膜内畸形腫ニ於テハ Lexer (一九〇〇)ハ生後七週ノ女兒ニ頭部ノ萌芽 質ヲ有スル顕蓋腔ノ痕跡ノ存スルモノヲ報告シ、津田氏ハ頭部及軀幹ニ比ス ベキモ ノヲ見タリ、又 見ラル、モノナリト雖モ發見スルヲ得ザリキ、感覺器トシテ網膜ノ萌芽ヲ認メタリ Kolb モ網膜がMo bach及ビ津田氏ハ胎兒ノ萌芽ニ於ラ之ヲ認メ余ノ例ニ於ラハ肉眼的ニハカナリ發達セル下肢ト考ヘラ Rosenbach ハ胎兒箝入ト認ムベキモノニ於テ明ラカニ頭部、軀幹ノ區別シ得ルモノヲ報ゼリ。 ntogomery ハ眼ノ萌芽ヲ認タリ。更ニ余ノ例ニ於テハ頭蓋ヲ認メシガ Marchand ハ硬腦膜及ビ神經物 モノニシテ余ノ例ニ於テモ中樞神經トシテ大腦物質多ク又殆ンド完成セル小腦ヲ存シ末梢神經モ亦認 ヲ認メ Winkler(一九一四)ハ生後七日ノ女見ニ頭蓋ノ基底部ヲ認メタリ。肢節ノ萌芽ニ就キテハ Rosen ル・モ Ahrens (一九〇一)ハ十七歳ノ女性ノ手術ニョリテ上行結腸間膜ニ介在セル畸形腫ヲ剔出 而シテ大脳皮質ノ一部ニ於テ石灰ノ沈著甚ダ多ク脳砂様ニ見ユ。內分泌腺ニ於テハ胸腺 ノヲ 存シ尚ホ小指頭大ノ顯徽鏡的ニ肢節ト證明シ得ルモノヲ有スルガ之レ壓迫ノ爲メニ自由 面カシテ

大キサハ大人頭大二達シ得ルモノニシテ余ノ場合ニ於ケルモノモ亦大人頭大ニシラ大ナルモノト思

發育スル能

ハザリシモノト考へラル。

リトナスト雖モ確固タル證明無シ、然カリ而シテ斯クノ如キハ多クハ生殖腺殊ニ睾丸ニ發見セラル、 畸形腫 時二惡性ヲ呈シ轉移ヲナスモノアルコトハ注意スベキコトニシテ實質性型ヲ以テ特ニ然カ

三胚葉ヨリ形成セラレ宿主ノ組織ト同ジ成熟度ニ至リテ何等胎生組織ノ性狀、腫瘍狀ノ形成ヲ示メサズシテ Askanazy ノ成熟性畸形 狀態長イ間休止セル故コレヨリ生ズル組織へ其宿主ヨリ廛こ者シト云へり。即チ未熟性ノモノナリ Kolb へ彼ノ剖檢例ニ於テ腫瘍ハ 腫ト認メラルレドモ腹膜後畸形腫ニシテ其組織!分化成熱度宿主ヨリ若キモノハ吾人ハ發見スルヲ得ズト云ヘリ,然レドモ余ノ例ニ 後成長シ始ムル故組織へ兩者同ジ成熟度ニ在リ。成熟性畸形腫ト(Teratoma adultum s. coaetaneum)ト稱セリ、他ノ場合ニ於テハ增生 分化成熟セル組織ヨリ成ルモノ、叉胎生組織ヨリ成ルモノ竝ピニ之レ等ノ中問型ヲ認メテ第一ノモノハ其宿主ト同ジク分割球モ分職 ノニシテ面カシテ Ribbert ノ稱フル如ク兩型ヲ明ラカニ區別スルハ不可能ナルモノト思惟セラル。 於テハ橫紋筋其他ノ組織ニ於テ胎生組織ノ性狀ヲ明ラカニ具備シ Kolb ノ説ハ餘リニ極端ト考ヘラレ Askanazy ノ說ヲ認メラル、モ 越ニ附加スルハ Askanazy ハ Ribbert か主張スルが如り肧葉ハ分化セポニ停滞スルモ何等差支へ無キモノナレパ畸形腫ニ於テ全り

ノテルヤ或ハ萌芽ノ一部ノ迷入シテ生ゼルモノナルヤ連カニ之ヲ決定スル能ハズト雖モ斯ノ如キ疫雑ナル發育ニョリ胎兒萌芽ノ箝入 8クノ如ク發生原因ニ就テハ混沌トシテ今尙ホ決定セズ唯先天性ノモノニシテ胎生三肧葉ョリ戚レルコトハ多クノ學者ノ認ムルト 余!例ニ於テモ之ヲ簡單ナル畸形腫ト見ル能ハズシテ胎生的萌芽ノ迷入ヲ以テ見ルベク面シテ其ノ胎兒萌芽ノ箝入セルモ

腹腔内ニ發生スル位置竝ビニ腹膜後ニ發スル動機ニ就テ

於ケル脊柱ノ左側腹膜後結締織、四、小腸間膜而シテ腹膜後ニ發生スル畸形腫ハ大抵ハ脊柱ノ近カクノ左側ノ腹膜後組織ヨリ發生ス ルモノナルコトヲ文獻ニテ證明シ Rosenbach モ胎兒内胎兒ノ例ニ於テコレニ殆ンドスベテノ類似例ハ左側ノ腹腔 ヨ リ發生セリト逃 |腔内ニ發生スル位置ニ関シテハ Lexer ノ研究ニヨレパ次ギノ四ヶ所ヲ擧グ、一、横行結腸及其間膜、二、小網膜、三、上腹部ニ

點ハ常ニ腹ノ矢狀部ニ在ルモノナリ、然レドモ後腹壁ノ體壁部腹膜ト癒著スルヲ以テ見懸ケノ移動ヲ來ス、此癒著ハ上方ヨリ下方ニ 次ギニ此等,發生位置,中,腹膜後三發生スル動機ニ就テ Lexer ハ發生學上ヨリ詳細ナル説明ヲ與ヘ & リ、卽チ後胃間膜ノ附著

ベタリ

. テ説明スル學者アリテ Ziegler ハ之レヲ主唱ス然レドモ此兩者ノ發生法ニハ明カナル限界ヲ有セズ移行型アリテ畢竟胎兒組織ノ迷入 チ Ahlfeld ハー個ノ肧葉ニ二個ノ肧葉基礎が形成セラレテ發生スルモノト認メ吹ギニ Marchand ハ反之卵綱胞ヨリ分裂放出セラル、 **巢ヲ缺如スルコト多シト云フ、實際受精セザル卵が斯クノ如キ寝難ナル構造ノ腫瘍ニナリ得ルヤ否ヤニ鷳シテ議論ヲ惹起シテ諸家之** 細胞ヨリ無性生殖的ニ蟄生スルト云フガコレハ複雑性皮膚模靈腫ニ見ラル、モノニシテ此時ニハ腫瘍ノ多蟄スルコトアリ,睾丸,卵 或ハ組織内ニ介在セラル、ニ至ル、コレハ下等動物及蛙等ニツキテ實驗セラレタルモノナリ、而カシテ胎兒箝入ハ皮膚標囊腫畸形腫 即チ分割球ノ一部が遺殘シテ獨立ニ分化シ第二ノ萌芽トナリ宿主ノ組織ハ益く餐生ヲ持續スル爲メ漸次宿主組織ニ包圍モラレ其體腔 (Marchand Bonnetsche Blastomerezrtheorie) ガー般ニ認メラル、卽チ受精セル卵細胞ハ分裂シテ行クガ此分裂ノ最初ニ分裂セル細胞 ナルモノハ畸形腫トナリ複雑ナルモノハ正常ノ胎兒ニ近カキモノトナルト云へり。現今ニ於テハマルシヤン、ポンチット氏分割球説 所・極細胞ハ通常消失スルモノナレドモ時ニ之レか受精シテ發育中ノ胎兒ノ胎内ニ取り込メラレテ痕跡的ニ發育スルコトアリ此簡單 foetu) ハコレニョル、其原因ハ不明ナレドモ Lexer ハコレヲ認ム。單芽性内移植(Monogerminale Implantation) ハ單一ナル胎兒萌芽 個體ノ一部ナルが故ニ單寝ノ區別ノ要無ク此意味ニ於テコレヨリ生ズル腫瘍スペテ單芽性ナリト稱ヘリ。 胎兒ニ近カキ複雑ナルモノトナル、之レ鱧芽性内移植ニ當ル、反之晩期ニ迷入セルモノハ分化進メルヲ以テ複雑ナルモノヲ生ゼズ之 ノ一部分が轉位又ハ絞榨等ノ爲メニ異常ナル場所ニ介在シテ畸形腫ヲ發生スルモノヲ云ヒ萬骨寄生體、腎臓先天性混合腫瘍ヲ之レニ リ、即手雙芽性移植(Bigerminale Implantation)トイフハ二個ノ胎兒萌芽中其一か異常ノ發育ヲナスモノヲイヒ胎兒内胎兒(foetus in レが寅驗ヲナシ達ニカノ Bonnet ノ反駁スルトコロトナリ前武優勢トナルニ至レリ、次ギニ胎兒萌芽ノ単覆ニヨリテ説明スル學者ア ニ漸文移行シ其限界明瞭ナラズト云フ、Waldyer 及 Wilmus 等ハ無性生殖説(Parthenogenetische Hypothese) ナルモノヲ稱ヘ原始生殖 レ單芽性内移植ニ當ルト云フ、而シテ此單寝爾芽性内移植ニ對シテ Ribbert ハマルシャン、ポンテットノ分割球説ニ於テハ分割球 然カリ而シテ睾竟カノ Cohnheim ノ迷芽説ニョリテ説明シ得ルモノナリ,然カシ其詳細ナル養生法ニ關シテハ學者ノ説ヲ異ニシ卽 - 歸スバキモノナリ、兩者ノ差ハ唯其畸形生成時期ノ如何ニ闢スルモノニシテ胎見養生ノ早期ニ迷入セルモノハ分化未熟ナルヲ以テ

中胚葉トシラハ軟骨、骨(骨髓ヲ有スルモノアリ)、纖維性及彈力性組織、 豐富ナル滑平筋僅少ニシテ分化ノ程度低キ横紋筋、數多ノ血管 相或ハ密ナル結締織、

テ熊毛上皮並ビニ杯狀細胞ヲ有スル圓柱上皮。 内肧葉トシラハ良ク發達セル腸管粘膜、氣管ニ於ケル氈毛柱上皮、囊腫ノ内面ヲ覆フトコロノ粘膜

器官トシテハ頭蓋骨、下肢ト考ヘラル、四肢(一ハ大ニシテ他ハ結節狀ヲナス)、腸管、氣道ノ

擱筆ニ臨ミ緒方教授ノ惡篤ナル御指導ト御校開ノ勞ニ對シ深ク謝意ヲ表シ、又整形外科高木助教授、名倉、金井廟醫學士ノX線寫

主要文獻

貨撮影ノ御援助竝ピニ病歷ヲ貨與サレタル小兒科教室ニ對シ厚の感謝ス。

A teratoma of the abdominal cavity. The Journal of Exp. Med. 1896. Ref. Centrol. f. allg. Path. u. path. Anat. 1899. Bd. 61. 1901. 12) Ders., Operation einer foetalen Inclusion der Bauchhöle. Langenbeck's Archiv Bd. 62. 1902. 13) Montgomery, path. u. path. Anat. 1910. 11) Lexer, Über teratoide Geschwillste in den Bauchhöle u. deren Operation. Langenbeck's Archiv Teratom. Diss. med. Heidelberg. 1909. 9) 今裕,幼兒腹膜後畸形體=就イテ·東京醫學會機誌. 第十卷. 第三號. 10) Kusnetzow, Ein Fall von Teratoidem Tumor in retroperitonealen Zellgewebe. Med. Beihefte d. russ. marine Zeitschrift. 1902. Ref. Zentrbl. f. (mit besonderer Berücksichtigung der Zentralnervensubstanz). Virchow's Archiv Bd. 229. 1921. 8) Kolb, Das Retroperitoneale zum experimentellen Teratoid. Verhandl. d. Deutsch. patholog. Gesel. 1907. 4) Borst, Die Lehre von den Geschwillsten. 1902. Pathologische Anatomie. 1922. 3) Askanazy. Die Teratome nach ihren Bau, ihrem Verlauf, ihrer Genese und im Vergleich 6) Budde, Beitrag zum Teratomproblem. Virchow's Archiv. Bd. 68. 1921. 7) Heijl, Die Morphologie der Teratome Beitrag zum Studium der teratoiden Tumoren des Abdomens, Revue de Gynécologie, 1902 Ref. Centrbl. f. Gynácol. Über einen Fall von foetaler Inclusion im Mesocolon ascendens, Langenbeck's Archiv Bd. 64 1901.

下り矢狀方向ヨリ左側ニ進ミ而カシテ其始メ全ク胃間膜ヨリ包擁セラレタリシ膵臓ハ十二指腸ノ上部ト共ニ全然後腹壁ニ瘻蓍ス、寄 ベク Lexer ノ説ニ首肯シ雖シト稱ヘリ。 **徳ニ教育セルモノト雖モ始メへ腸間膜ニ發生セルモノモアルベク或ハ原發性ニ腹膜後ニ横タハリテ腸間膜中ニ擴ガリ行クモノモアル** ニ之レガ腹腺後ニ横8ハリ得ルモノナリト云フ,而シテ Kolb ハ Lexer ノ見解ニ疑ヲ有シ腫瘍其ノモノノ大キ サノ増加ノ場合腹膜 二位シ、其愛青ニ從ヒ膵臓ヲ後腹壁ヨリ前方ニ擧上スルニ至ル、要之腹膜内ト腹膜後トノ區別ハ困難ニシテ始メハ腹膜内ニ在リテ後 1) 後面ニ於テモ亦腹膜ハ同ジ關係ニ在リ、斯ク始メハ腹膜内ニ自由ニ附著セルモノト雖モ後ニハ腹膜後部ニ位シテ恰モ腹膜後ノ組織ヨ 後膵臓及十二指腸ノ後部ニ於テ腹膜ノ痕跡ハ消失シ只其前面ニ於テノミ漿液膜ヨリ被覆セラル、が如ク見エ、コノ發育セル箝入物ノ 襞ハ寄生體ノ上ニ轉ジ來リ(之レヲ獲り故)其兩皺襞ノ兩板ハ寄生體及腹壁腹膜ノ間ニ存スルニ至ル、從テ同標ニ此癒著機能ヲ爲セル 生體が左ノ上腹部ニ於テ胃間膜ノ起根部ニ存在スル時ニ後部網ノ兩葉ハ下左方ニ發青シ側腹腔ト癒著スル故ニ之ヨリ發生スル網ノ皺 發生セルが如キ觀ヲ呈セルモノナリト、若シ此說ヲ眞トスルナラパ上腹腔部ノ腹腹後部ニ觀察セラル、萌芽箝入ハ常ニ春柱ノ左側

結論

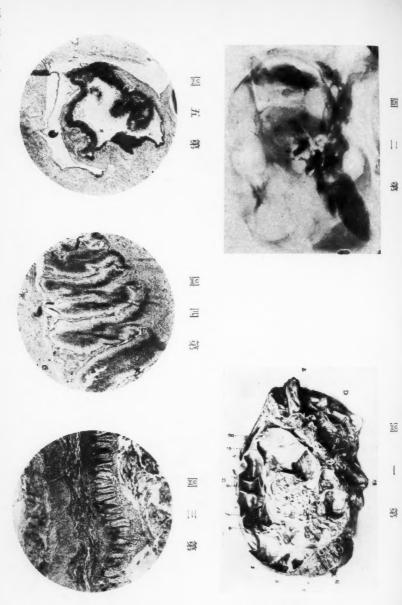
一、本例ハ生後十ケ月ノ男兒ノ腹膜後ヨリ發生セル畸形腫ナリ。

二、本腫瘍、質質性ト囊腫性ノニッノ部分ヨリ形成セラル。

本腫瘍ノ大キサハ大人頭大ニシテ重サ約二○○元(左腎及腸管ト共ニ)ナリ。

四、組織學的ニ次ギノ三豚葉ヨリ成ル。

ケル分化セザル末梢神經。網膜ノ萌芽。 膚腺ヲ有スル皮膚。腦膜。脈絡膜。えぺんぢうむ細胞ト共ニ腦質(大腦。小腦)。神經節細胞。皮膚ニ 外豚葉トシラハ頭部ニ適スル部分ニ於ケル毛ヲ有スル皮膚。四肢ニ於ケル毛及ビ分化ノ進マザル皮 於



金子論文附圖

Schwalbe. Die Morphologie der Missbildungen des Menschen und Tiere 1907. 18) 鴛鴦彌三郎, 後腹膜=原養セル惡性混合 Ein retroperitoneales Teratom bei einem 2 jährigen Knaben. Zieglers Beitr. z. pathol. Anat. u. z. allg. Pathol. Bd. 40. 1906. Ribbert, Geschwillstlehre 1914. 15) Rosenbach, Foetus in foetu. Langenbeck's Archiv Bd. 81. 1906. 16) Schönholzer, einem Neugeborenen. Studien z. Pathol. d. Entwicklung. Bd. 1. 1914. 後與與畸形腫/一例:日本外科學會雜誌,第二十一回,第二號。 21) Wilms, Über die Dermoidcyste und Teratome mit besonderer 腫瘍ニ就チ・縞・六年. 19) Teller, Beiträge zur Kenntnis der Retroperitonealtumor. Diss, Greifswald 1904. 20) 津田陵次, Beriteksichtigung der Dermoide der Ovarien. Deutsch. Archiv f. klin. Med. 1895. 22) Winkler, Intraperitoneales Teratom bei

附圖說明

一■ 右側部割面第一、N、宿主體/左腎、D、宿主體/腸管(以下準之)。

第二回 レントゲン像(頭蓋骨)。

▼三■ 小腸(へまときじりん・えおじん複染色)。

第四國 · K、小腦、G、大腦(同上)。

第五回 X、網膜ノアンラーゲ。

頸動脈腺ノ腫瘍ニ就テ

(Ueber Geschwulst der Carotisdrüse)

阿部資夫

緒言

小體アリ通常之ヲ頸動脈腺ト稱ス、然レドモ其起原及構造ニ就テ諸學者ノ見解ヲ異ニスルニ隨テ名稱 總頸動脈ノ分岐角ニ於テ稍~内頸動脈ノ後方ニ偏シ其壁ニ密接シテ長徑約五粍、長圓形稍~扁平ノ

1891) ハ之ヲ廢殘臟器ト看做シ無關係的名稱トシテ 頸動脈結節 (Nodulus caroticus) ノ名ヲ附セリ、 ka, 1862) ニシテ 彼ハ主要素トシテ 小體內ニ腺樣形態、血管及神經ヲ發見シ副腎及尾骶腺ノ如キ神經 接排セラルトテ之ニ頸動脈小毬 (Glomeruli arteriosi intercarotici)ノ名稱ヲ與ヘ、マルシャン (Marchand, 腺ニ屬スルモノトナシ頸動脈腺(Glandula carotica)ト名ケタリ、然ルニアルノルト(Arnold, 1865)ハ小 惟シ同ジク頸動脈間神經節ノ名ヲ用ヰタリ、而シテ初メテ顯微鏡的ニ之ヲ檢索 セシハルシュカ (Lusch-經節(Ganglion intercaroticum)ノ名ヲ附セリ、降テアンデルシュ(Andersch, 1797)モ亦之ヲ神經結節ト思 い血管系統ト密接ノ關係ヲ有シ血管症 (Gefässchlinge) ヨリ成ル所ノ絲毬 (Glomerulus) ノ型式ニ隨テ 最初該小體ヲ發見セシハハレル (Haller, 1743) ニシテ交感神經系ニ属スルモノト看 做 シ 頸動脈間神 〇阿部・頸動脈腺ノ腫瘍ニ就テ



ル腫瘍組織へ製間ノ内被細胞ヨリ直接ニ被ハルレドモ兩者ハ明ニ區別スルコトヲ得,マルシャンハ此腫瘍ハ悪性ヲ示スモノニシテ胞 ニハー體ニ著シク血管ニ宮ミ著明ノ胞巣狀構造ヲ呈シ各胞巢ハ可ナリ大ナル多面形ノ類上皮細胞ヲ以テ充満セラル、是等細胞ヨリ成

樂狀血管肉腫(Alveolares Angiosarkom)ト稱スペキモノナリト云へり。

第二例 報告者パルタウフ(Paltauf, 1892)

管ヲ伴フ結締織ニョッ界セラレ胞巣ヲ充ス細胞ハ多角形ニシテ原形質ニ宮ミ可ナリ大ナル卵形ノ核ヲ有シ其長軸ハ胞巣ノ壁ニ對シ垂 腫瘍ハ血液ニ宮=褐赤色ヲ呈シ顯微鏡的ニハ周圍ノ部ハ特ニ胞巣狀構造著明ニシテ各胞巣ハ繊躬ナル毛細血管又ハ管壁非瀕ナル血 牛蔵前ヨリ左頸部ニ腫瘍ヲ生ಪ鳩邪大ニ逢ス、手術ニ際シテハ總頸動脈、內外頸動脈等ヲモ切除ス。

第三例函報告者同前

切除シ腫瘍ヲ剔出ス然ルニ患者ハ數時間ニシテ後出血ノ爲ニ斃ル。 數ヶ月來右顎下部ニ腫瘤ヲ生ジ數週以來急ニ增大シ鷄卵大トナル。手術ニ際シ總頸動脈、內外頸動脈及内頸靜脈ヲモ

間ニハ無構造基質ヲ存シ兩者ノ間ニ密接ノ關係アルガ如ク所謂血管肉腫ノ像ヲ呈ス。 ハ專ラ血管及細胞集積ヨリ成リ血管壁ハ多クハ單ニ內被細胞及一列ノ扁平被覆細胞ヨリ成リ其扁平細胞ト胞巢ノ最外圍ナル細胞トノ 腫瘍へ彈力性硬ニシテ結締織被膜ヲ以テ包マレ割面ハ血液ニ宮ミ暗灰色ヲ呈シ結締織帶ニヨリテ數多ノ小葉ニ分タル、

第四例 報告者同前

二意外ニモ腫瘤ハ頸動脈ニ堅ク癒著シ線頸動脈及内外頸動脈モ共ニ切除スルノ已ムヲ得ザルニ至ル。 十八歳女 左頸部ニ小鶏卵大ノ腫瘤アリ患者ハ蒼白虚弱ニシテ肋膜炎ノ既往症モアルガ故ニ頸腺結核ノ診斷ノ下ニ手術ヲ行フ然ル

ハ明ニ胞基狀構造ヲ呈シ各胞無ハ比較的廣キ毛細血管ニョリテ網狀ニ圍マレ其空間ハ原形質ニ宮メル可ナリ大ナル細胞ヲ充タセリ或 剔出セル腫瘍ハ結締織被膜ヲ以テ包マレ割面ハ白色ニシテ無數ハ細製隙及管腔ヲ有シ宛モ血管ニ相當スルノ觀ヲ呈ス、

部の又非常二細胞二乏シク無構造ニシテ始ンド硝子様ノ觀ヲ呈ス。

成 ーン (Kohn, 1900) ハ之ヲ腺又ハ血管毬ニアラズシテ変感神經系ニ由來スル神經纖維及神經節細胞 ラール (Stöhr)等ノ教科書ニハ然ク記載セリ。 般ニ頸動脈毬 (Glomus caroticum) ノ名ヲ用ヰラウベル (Rauber)、シュバルテホルツ (Spalteholz)、シュ ルモノトシテ頸動脈間副神經節(Paraganglion intercaroticum) ト名ケタリ、尚解剖學的名稱トシテハ ルヨリ

割ス、各小葉ハ主トシテ血管及細胞ノ二要素ヨリ成リ血管特ニ毛細管ノ壁ハ薄腸ニシテ内被細胞 無數ノ血管及神經ヲ伴フ結締織被膜ヲ以テ包マレ其レヨリ腺内ニ向テ結締織帶進入シ數多ノ小葉ニ ハ「クローム」親和性ヲ有スルヲ特徴トス、尚此外ニ纖維樣結締織、 3/ 之ヲ要スルニ所謂頸動脈腺ハ敷耗ノ硬靭ナル小體ニシテ帶紅灰白色乃至褐赤色ヲ呈シ組織學的ニハ 三凸出ス、 細胞ハ類上皮細胞ニシテ毛細管網内ニ集積シ兩者互ニ密接ナル關係ヲ呈ス、 神經節細胞及有髓並無髓神經纖維 細胞 八著 分

腫瘍報告例

ヲモ證明セラル。

文獻ニハ未ダ之ヲ見出スコトヲ得ズ、外國ニテハ余ノ索引シ得タル範圍ニ於テ左ノ三十一例ヲ見出シ R脈腺ョリ發生スル腫瘍ハ比較的稀ナルモノト見エ從來報告セラレタルモノ甚ダ少シ特ニ我邦ノ

一制 報告者マルシャン(Marchand, 1891)

タリ。

内頸靜脈及迷走神經ヲモ 切除シ 患者ハ三日後死ノ 轉歸ヲトレリ,腫瘍ハ 結締織被膜ヲ以テ包マレ割面ハ帶褐赤色ヲ呈ス, 四年半前ヨリ右頸部ニ徐々ニ生長スル腫瘤ヲ認メ臨牀的ニ淋巴腺腫ノ診斷ヲ下ス。手術ノ際ニハ腫瘍ト共ニ總頸動 顯微鏡的

第八例 報告者同的

三十四歳男 四年來左頸部ニ腫瘤アリ何等苦痛ナカリシが近來ニ至り重聽及耳鳴ヲ訴フ、手術ニ際シ總頸動脈、內外頸動脈、內顆

静脈及迷走神經等ヲ切除シ腫瘍ヲ剔出ス。

ル淋巴腺ハ癌腫性轉移ノ像ヲ呈セリ。 肉眼的所見及硬度へ前例ニー致シ顯微鏡的ニヘ胞巢狀構造ヲ呈シ細胞ハ多面形或ハ卵形ニシテ大圓形核ヲ有ス、腫瘍ト共ニ馴出セ

第九例 報告者マリノウスキー (Malinowsky, 1899)

文獻ヲ得ズ。

第十例 報告者ハインレート (Heinleth, 1900)

六十歳女 左頸部ニ腫瘤ヲ認メ頸動脈ノ切除等ナクシテ剔出スルヲ得タリ、腫瘍ハ血管ニ富メル結締織被膜ヲ以テ包マレ其ヨリ内

部二向尹血管及神經ヲ伴フ中隔ヲ送出シ腫瘍ヲ數多ノ小葉ニ分割ス。

シテ原形質へ細顆粒ヲ呈シ核ノ大サハ一定セズ、此細胞ガモ細管壁ニ沿ウテ密接ニ序列シ恰モ管壁ヨリ嚢生セルカノ觀ヲ呈ス。 顯微鏡的ニハ種々ノ形狀及大サノ細胞集積ヲ示シ菲薄ノ壁ヲ有スル毛細血管ニヨリテ界セラル、其細胞ハ上皮細胞ニ類シ多形性ニ ハインレートハ腫瘍形成ニハ單ニ血管及細胞が関奥シ特ニ正常ノ頸動脈腺ヲ作ル毛細血管が其外液細胞ト共ニ奥カルモノナルが故

ニ外被細胞腫(Peritheliom)ト稱スペシト。

第十一例 報告者 (Siniouschine, 1901)

第十二例 報告者レクルス (Reclus, 1903)

文獻ヲ得ズ。

第十三例 報告者スクッデル (Scudder, 1903)

二十歳代ノ女 九年以上徐々ニ生長セル鳩卵大ノ腫瘍アリ、手術ノ際各頸動脈ヲモ切除セリ、剔出セル腫瘍ハ硬靭ニシテ甚ダ血管

第五例 報告者同的

血管ヲ伴フ結締織被膜ニヨリテ包マレ其被膜ヨリ廜キ毛細血管ヲ出シ囮形又へ卵囮形乃至長形ノ細胞集塊ヲ闡繞ス、細胞ハ可ナリ トシテ血管、細胞導及細胞集積ヨリ成リ其等細胞ハ比較的大ニシテ血管壁細胞トノ間ニ密接ノ關係ヲ有シ 後者ノ增生(Proliferation) シテ原形質ニ富=多形性ナリ而シテ毛細管壁トノ關係著明ニシテ前々例ニ酷似ス、此例ニモ輕度ナレドモ硝子樣變性ヲ示ス。 腫瘍の軟ニシテ割面の顔ル血液ニ窩=暗灰色乃至暗赤色ヲ呈シ無數ノ血管貫通シ宛モ海綿狀ノ觀アリ、顯微鏡的ニハ可ナリ大ナル 三十五歳男 - 五年來右顯部ニ腫瘤ヲ生ジー年以來急ニ增大シ林檎大トナル、手術ニ際シ胸鎖乳嘴筋ヲ切斷シ外顎動脈ヲ切除ス。 パルタウフハ以上自驗四例ヨリ結論シテ是等ノ腫瘍ハ特有ナルモノニシテ常ニ頸動脈分岐部ニ占居シ共通性ノ組織的構造ヲ示シ主

第六例 報告者のレッチュマール (Kretschmar, 1893)

ト考フベキモノニシテ頸動脈間内被(外被)細胞腫(Endo-(peri) thelioma intercarotica)ト稱スルヲ至當トスト。

キ結締織帯ニョリテ敷多ノ大小ノ小葉ニ分タル、顯微鏡的ニハ著明ナル胞巢狀構造ヲ呈シ各胞巢ハ多クハ囮形ナレドモ或ハ長形ナル 腫(Angiosarkoma plexiforme)ト稱スルヲ適當トス。 細胞ノ構造ヨリスレバ此腫瘍ハ多形細胞肉腫ニ嵐スベキモノニシテ細胞ノ發育狀態及血管ニ密接ノ關係ヲ有スル點ヨリ蔓狀血管肉 剔出セル腫瘍ハ繊維性結締織被膜ヲ以テ圍マレ緊張彈力性ニシテ割面ハ血液ニ富ミ周邊ハ灰白赤色,中心ハ鮮黄色ヲ呈シ無數ノ綱 四十八歳男 牛歳前ヨリ左頸部ニ蠶豆大ノ硬キ腫瘤ヲ生ジ急速ニ增大シテ鷄卵大トナル、鰓孔性痛ノ診斷ノ下ニ手術ス。 胞巢ヲ充ス細胞ハ形狀種々ナレドモ多クハ多面形ニシテ一核ヲ有シ原形質ハ軟弱ニシテ細顆粒ヲ呈シ限界一體ニ鋭ナラズ。

第七例 報告者コップシュタイン (Kopfstein 1895)

軟ニシテ頸動脈腺腫瘍ノ診斷ノ下ニ手術ヲ行フ其際内頸靜脈、總頸動脈及內外頸動脈等ヲモ切除セリ。 四十六歳女 十六年前左顕部ニ小腫癗ヲ生ゞ最初ハ何等苦懦ヲ覺エザリシガ近來ニ至リ左側頭痛ヲ訴フ,臨牀的ニハ鷄卵大彈力性

構造ヲ示シ胞巣ヲ充ス細胞ハ大ニシテ瀕弱ナル血管壁ニ直接ニ隣接シ多クハ五乃至六核ヲ有セリ一般ニ顯微鏡的像ハ癟腫ニ類ス。 剔出セル腫瘍ハ纖維性被膜ヲ有シ硬靭ナリ,割歯ハ灰白赤褐色ニシテ寅質性甲狀腺腫ヲ想起セシム、顯微鏡的ニハー見シテ胞集狀

モ多クハ細顆粒ヲ呈ス。 類上皮編胞ニシテ多面形ナレトモ屢く骰子狀ヲ呈スルモアリ或ハ叉紡錘狀ニ近キモアリ原形質ハ甚が軟弱ニシテ稀ニハ無構造ナレド

二十量女「七年來左頸部ニ腫瘤ヲ有ス、總頸動脈切除ノ下ニ剔出ス、手術ニ際シ可ナリ多量ノ出血ヲ見タルヲ以テ獻脫ノ爲メ翌日

caroticae)ヲ推獎セリ テ現ハスハ不適當ナリトシ單ニ鏡檢上ニ認メタル事實ニ一致スル名稱トシ テ 頸動脈腺ノ胞巣狀腫瘍(Alveolare Tumoren Glandulae 腫瘍ノ肉眼的及顯微鏡的所見ハ大體ニ於テ前例ニ類似セリ、カウフマンハ此腫瘍ハ頸動脈腺ニ特有ノモノニシテ在來ノ腫瘍名ヲ以

第二十例 報告者オーペルンドルフェル (Oberndorfer, 1905)

五十八歳ノ骨軟化症ノ女ヲ剖檢シ其際右頸部ヨリ鷄卵大ノ腫瘍ヲ得タリ,褟赤色軟ニシテ表面ハ血管ニ富メル結締織被膜ヲ以テ包

ヲ有セズ上皮狀ニ相接ス,組織學的所見へ殆ンドマルシャンノ例ニ一致シ奜名稱ハ區々ナレトモ外被細胞腫ト稱スルヲ普通トスト。 形成ス其間隙ヲ充ス細胞へ一部ハ骰子狀,一部ハ多角形ニシテ原形質ハ比較的大"核ハ小ニシテ甚シク染色性ナリ"細胞間ニハ支持質 顳微鏡的ニハ腫瘍ハ細胞集積及基質ヨリ成リ基質ハ專ラ血管ヨリ作ラレ特ニ擴張セル毛細血管ヲ主トシ全腫瘍ニ分布シテ細網狀ヲ

報告者ライトホッフ (Isithoff)

文獻ヲ得ズ。

第二十二例 報告者バイッケ (Beitzke)

交獻ヲ得ズ。

第二十三例 報告者ツォンデック (Zondek, 1908)

右頸部ニ手拳大ノ腫瘤アリ各頸動脈ノ切除ト共ニ剔出ス、腫瘍ノ主要成分ハ細胞及毛細血管ニシテ細胞ハ毛細血管ノ

〇阿部・頸動脈腺ノ腫瘍ニ就テ

二宮三鏡檢的二外被細胞腫ナリシト。

第十四例 報告者へ デンゲル (Hedinger, 1904)

文獻ヲ得ズ。

第十五例 報告者メンケベルと (Mönckeberg, 1905)

五十二歲男。

第十六例 報告者同前

三十歲女。

第十七例 報告者同前

五十歲女

以上三例何レモ腫瘍へ左頸部ニ發生シ手術ニ際シテハ三例共總頸動脈及内外頸動脈ヲモ切除セリ。

肉眼的ニハ何レノ腫瘍モ褐赤色ヲ呈シ第一及第三例ハ硬靭ニシテ第二例ハ軟ナリ。

ハ小ナル細胞球ヲ形リ周圍ヲモ細血管ニヨリテ纒絡セラル其モ細血管ハ壓、單純ナル内被細胞管ノ觀ヲ呈シ腫瘍細胞ハ其壁ニ直接ニ 顯微鏡的ニハ腫瘍ハ大ナル多形性扁平ノ類上皮細胞ヨリ成リ細胞ト血管系トノ間ニ密接ノ關係ヲ有ス即チ細胞ハ大ナル細胞集積或

第十八例 報告者カウフマン (Kaufmann, 1905)

隣接ス、或部ニ於テハ腫瘍細胞ハ内被細胞管ヨリ纖維性結締織ノ織弱ナル層ニヨリテ隔タル、ヲ認ム。

二十一歳女 二年半以來左頸部ニ腫瘤ヲ認ム鷺卵大ニ逢セルモ何等苦懺ヲ訴ヘズ、頸腺結核ノ診斷ノ下ニ手術ス。

剔出セル腫瘍ハ結締織被膜ヲ以テ平等ニ包マレ表面平滑ニシテ彈力性軟ナリ割面ハ灰白赤色ニシテ一般ニ多孔性ナルヲ以テ海綿狀

ノ觀ヲ呈ス、被膜ョリ内部ニ向テ放線状ニ中隔ヲ送出ス。

リ、胞葉ノ内部へ一部へ密質シ一部ハ空間ヲ呈ス、胞巣間ニハ薄キ中隔アリ弄薄ノ壁ヲ有スル毛細血管及靜脈ヲ通ズ、胞巣内ノ細胞ハ 顯微鏡的ニハ大部分著明ナル胞巢狀構造ヲ呈シ其形狀ハ種々ニシテ固形或ハ卵形或ハ長固形或ハ固壕狀時トシテハ叉分枝セルモア

文獻ヲ得ズ。

三十一例 報告者がローチマン (Gronemann, 1914)

ハ內外類動脈及迷走神經ヲモ切除セリ、患者ハ翌日死亡ス。 四十二歳男 二年以來左頸部ニ徐々ニ生長スル腫瘤アリ疼痛ナキモ屢く呼吸及嚥下障碍ヲ訴コ、腫瘤ハ鷄卵大ニシテ手衞ニ際シテ

及中隔ヨリ出ヅル血管ニ宮メル結締織帶ニヨリテ網狀ニ胞巢ヲ圍繞セリ、胞巢ノ形狀ハ種々ニシテ或ハ囮形或ハ卵形或ハ長形ヲ呈シ 腫瘍ハ肉眼的ニハ厚キ結締織被膜ヲ以テ包マレ硬靭ニシテ割面ハ血液ニ宮ミ褐赤色ヲ呈ス、顯微鏡的ニハ胞巢狀構造ヲ呈シ外被膜

グローチマンハハインレート等ト同ジ根據ノ下ニ外被網胞腫トシテノ見解ヲ有ス。

之ヲ圍メル中隔ニハ毛細血管ヲ通ジ其内被細胞核ハ著明ニ染色ス、胞巣細胞ハ上被細胞ニ類ス。

自驗例

明年四十五年七月二十七日初診。

二十六歲男臺灣總督府鐵道部員。

旣往症、 患者ハ生來健全ニシテ明治三十九年麻拉里亞ヲ患ヒ其後數囘發作アリシト云フ外ニハ著患

ニ罹リシコトナシト、花柳病ヲ否認ス。

日 ノ大サニ 三年前ヨリ認ムべキ原因ナクシテ左下顎隅ノ下方ニ腫瘤ヲ生ゼシモ別ニ疼痛等ナク漸次増大シテ今 達セリ但此腫瘤ヲ認メシ頃ヨリ聲音嘶嗄ヲ訴フルニ至レリト云フ。

現、症、 患者ハ體格榮養共ニ中等ニシテ胸部臟器ニ變化ヲ認メズ左下顎隅ト胸鎖乳嘴筋トノ間膨隆シ

〇阿部・頸動脈腺ノ腫瘍ニ就テ

爲ニ直接ニ圍繞セラレ其内被細胞ト相接ス,毛細血管へ大部分ニ於テ網狀ニ連絡シ圓形或へ卵形或へ長形ノ胞巢ヲ形成ス。

第二十四例 報告者シュミット (Schmidt)

文獻ヲ得ズ。

第二十五例 報告者キアリー (Chiari, 1912)

外頸動脈ヲ共ニ切除ス。 三十七歳男 三年半前左頸部ニ榛質大ノ移動性腫瘤アリ其後漸次增大シ發作性ニ疼痛ヲ覺ユルニ至レリ、手術ノ際ニハ前頸靜脈及

原形質ニ宮メリ、胞巣ノ中間壁ハ毛細血管ヲ件フ結締織素ヨリ成レリ。 剔出セル腫瘍へ彈力性硬靭ニシテ割面へ褐赤色ヲ呈シ血液ニ宮メリ,顯微鏡的ニハ一般ニ胞巢状構造ヲ呈シ細胞ハ上被細胞ニ類シ

第二十六例 報告者ノイベル (Neuber, 1913)

二因ル脳軟化ナルコトヲ確ム。 三十歳男 - 九年以來右頸部ニ腫瘤アリ、手術ノ際各頸動脈及迷走神經ヲ切除ス、翌日死亡セルヲ以テ剖檢セシニ死因ハ頸動脈結紮

皮細胞ヲ以テ充タサル、各胞巣ノ間隙ハ織弱ナル毛細血管無敏ニ通過ス、ノイベルハ此腫瘍ヲ外被細胞腫トセリ。 剔出セル腫瘍ハ鷄卵大,硬靭ニシテ割面ハ灰白赤色ヲ呈ス,顯微鏡的ニハ著明ナル胞巢狀構造ヲ呈シ胞巢ノ形狀ハ種々ニシテ類上

第二十七例 報告者同前

腫瘍ハ柔靭ニシテ割面ハ一部暗赤褐色、一部灰白色ヲ呈シ纖維性被膜ヲ以テ圍マル、鏡檢的ニハ前例ト同樣ノ像ヲ示

第二十八例 報告者同前

六年來左顯部ニ腫瘤ヲ有ス、鷄卵大、彈力性軟ニシテ脂肪腫ノ診斷ノ下ニ手術ス、鏡蟓上前例ト同一ノ像ヲ呈ス。

第二十九例 報告者シモンツ(Simmonds, 1913)

文獻ヲ得ズ。

二、腫瘍ノ肉眼的所見

= > | 癒著セリ。| | 穴中軸ニ總頸動脈ヲ通シ上方ノ前内方ニ外頸動脈、後外方ニ内頸動脈ヲ通ズ、内頸静脈ハ腫瘍ノ外側、中軸ニ總頸動脈ヲ通シ上方ノ前内方ニ外頸動脈、後外方ニ内頸動脈ヲ通ズ、内頸静脈ハ腫瘍ノ外側 t ル腫 瘍ハ 西洋梨狀ヲ呈シ 長徑五糎、 横徑及厚各三・五糎ヲ算ス、莖ニ相當スル方ヲ

見 7 m 附著 工灰白 腫 3 ラ 揚 殆ンド中央ニ内頭動脈、 ス 1 色ヲ 表面 腫瘍ノ中央ヲ水平面ニ截割スルニ割面 呈 25 結締 シ其 硬度い强靭ナリ之ニ反シテ周邊ニ近キ部分ハ灰白赤色乃至褐赤色ラ 織被膜ヲ以テ包 少シク前內方二外頭動 一マレ殆ンド平滑ニシテ凹凸ヲ呈セズ、上外方ニ小指 八灰白色— 脈ヲ通ジ兩頸動脈ニ跨ル部分ハ平等性無構造 灰白赤色乃至褐赤色ヲ呈シテ一様ナラズ 頭大 呈シ比較的軟 ノ淋巴腺

二、腫瘍ノ顯微鏡的所見

觸知ス。

各個 -的檢查二向テ 關スル記載ヲ省キ茲ニハ腫瘍中心部ノ全水平断ニ就テ檢查シ得タル所見ヲ逃ブベ 腫 瘍ノ各部 ヨリ數多ノ切片ヲ製作セルガ其ノ所見ハ各標本共大同小異ナルヲ以テ

為二外側 存 此 標本 在スルヲ見ル此ノ二個ノ大動脈ハ外方ヨリ單ニ器械的ノ壓迫ヲ受ケ其ノ形態ヲ變ゼ リ壓迫セラレテ稍~收縮縮小セル內頸動脈、 横徑約 糎 長徑約三・五糎ニシテ大體ニ於 テ結締織 之ヲ距ルコト約 被膜ヲ有ス 糎ノ部位 其 ハノ約中 = 央二 同 iv 3 ク外頸動脈 腫 1 温線組 111 3 織 テ

〇阿部・頸動脈腺ノ腫瘍ニ就ニ

m 3/ 1. -网 7 如 可 呈 所、粘膜 著 セ 能 b ナリ、 色ナ ス 容 彈 力性 易 7 般 叉搏 П = 腔 -移 硬 腫 7 動 動 = 脹 ヲ認 檢 ス 3 テ歴 充 iv ス m iv × 3 ŀ ズ ス = 痛 下 7 ナ 喉頭 幽 得、 17 觸 微 列 診 鏡 F --Z 層 搏 於 檢 IV 查 動 -ラ -皮下 左 對 7 = 3 第 3 觸 ラ " iv テ左聲 及第 八側 小鷄 然 V 方 1. 聊 帶 一大日 大 モ = 21 麻 應 1 源タ一證 移 縮 腫 齒 並 動 瘤 性 = 7 T = ") 明 右 12 11 ス 第 T 表 7 ラ ŀ 鲌 ズ、 7 小 25 寧 得 日 齒 周 V U F 圍 及 平 第 Æ h 滑 上下 1 -大日 關 3/ ラ 係 = 八殆 特 齒 7 見 胸雨 = [11] 蝕 1 w

T ラ ズ p ŀ ノ疑 以上 7 有シ 所見 + = カブ ラ七月三十 3 リテ 單 純 性 H 淋 是 巴腺 V ガ 腫 剔 ŀ 出 考 7 ~ タレ 行 ۴ 1) Æ 聲 帶 麻 痹 7 문 t iv 7 以 ラ 或 21 腫 瘍

-EII 斷 IV 脈 先 7 t " 胸鎖 認メ已ム 切 腫 " 斷 瘍ノ外 乳嘴筋 2 更 7 側 = 得 深 於テ 前 ズ 部 是ラモ 緣 = 是レ 進ミ = 沿 þ 結 2 ウテ約 船紮切 堅ク = 總 癒著 頸 + 斷 動 糎 セ y 脈 3/ 1 斜 剝離 而 21 全 切 シテ 7 7 開 迷走 腫 試 7 111 施 瘍 前 A = 3/ 層 經 3 in 1) E 7 Æ 亦 テ 頗 追 同 包 in " 木 ラ 30 韋 進 7 難 セ ラ 腫 ナルヲ以 " 瘍 V 腫 內 到 瘍 底 7 1 通 剝 ラ 被 先 過 雕 膜 " = セ ス 腫 達 n iv 瘍 ス 7 以 ノ下方 然 b ラ 1 iv 不可 是 = 內 7 = 於 頸 毛

IV 7 以テ 過、 腫 2 傷 1 食 7 手 如 剔 鹽 補 " 水注 中 出 3/ ラ 出 ス 入 m IV 腫 H 7 瘍 得 ノ下 ナ 71 1) 汉 2 甚 ŋ 極 7 3 7 IV 周 71 手 及「デ リシト 術 圍 創 3 ŋ 21 ガレー 攻擊 大部 全 1 分ヲ 1 剁 ン」注 比 雕 縫 較 3 射 的 終 合 大ナ 7 -= Ŀ 行 3 1) IJ 極 リ幸ニ テ 3 = 閉 1 及 1 鎖 E" 經 爲 頸 3 過 下 靜 -良 脈 創 脈 及內 好 搏 角 頻 = 3 シテ 數 1) 外 排 頸 術 不 液 動 後七日 Ē 脈 法 7 7 微弱 施 結 拔 セ ŀ y 切 ナ 斷 V

=

3/

ラ

狠

院

t

單 厭, 結, 卜、血 71 1 致いノい 間 3/ 編、同、管 111 質 7 行 純 沭 迫、 位 セ、加い 直 n 織、時、 12 7 也 to ŀ 170 n 間 接 增 = IV w ラ、此、性、ニ、思 コ、内、於 3 若キ 纖 岩 隙 = 胞 大 1 い結問、漸いい 1、外、 ラ ラ示 胞 維 巢 7 丰 消、経、質、次、ル 小,頭, 23 巢 間 新 得 性 胞 失い織いハ、ニン 特、動、單 1 シ、性、其、其、 セ = 質 3 硝 巢 記、脈、純 表 位 及 in 7 行、間、增、量、 7 b 組 ストノト 所 面 發 述 樣 ス べい申い硝 織 毛 ク、質、加、ヲ、ア 細 ヲ、ノ、ト、増、ル P = iv 育 組 キ、間、子 1 1 間 1) 接 兩 管 減 織 認、増、共、シ、モ 點、二、樣 セ 著 質 生、ニ、テ、多 mi 極 with writing 3 20 137 iv 二、位、組 萎縮 夫、厚、ク 轉 叉 3 ス ガ 1) シャスト織 腫 端 又 毛 ラ 化 成 是 續、自、キ、ハ 111 テッルい 1 小身, 結,血 此 細 in コ、殘 7 組 H 3/ V 本 胞 M 記 去 本 テ、漸、締、管 E 段 ŀ ト、存 織 腫 巣ト 和管自 管ヲ主 來 共 ガ全 階 iv 起、次、織、 傷 即・ス 3 ルンニ、性、外 チャル 結 モ , = 級 1 毛 腫 1 腫 腫 上、織、ノ、側 診 總、 1 局 = 細管 斌、維、間、二 體 遊場結節 相 瘍 瘍 全 頸、 3 斷 實 構 ハ性、質、多 1 h 當 動力 -腫 如 7 壁 ス 變、變、ニ、少 3/ 造 質 1 F 至 瘍 脈、 ス 化、化、變、 1 iv 此 卽 1 10 iv 1 n 11 ス 厚 間 周 幾 腫 其 ニンヲ、轉、結 = **分**、而、中 チ = 古 胞 伴、營、シ、締 サ = ŀ 多 當 邊 息 岐・シヽ 心 ヒ、ミ、行、織 10 25 點、テ、 部 1 組 7 巢 部 ラ 標本 前 + 像 其、進、ク、ヲ 織 21 換、此、卽 = 極 樣 流 中リンハハ有 位シ 漸 言 最, 7 1 iv チ 3 製 轉 ŀ ニ、デ、傾、シ ナ ラ ス、モ、最 證 次 作 如 ラ 共 包、硝、向、此、 結 明 化 -意 ル、古、初 マ・子、ヲ、結、 節 變 ズ 1 7 義 1198 ス 3/ = + > い様、確、緒、極 操 ナ 其 性 行 頸、硝、腫 IV 深 1 作 IV 中 " 存 基 タ、戀、實、織、 動、子、 瘍 3 丰 テ ガ 心部 縮 = ŀ 順 ル、化、 = 1 所 脈、様、 發 在 此 7 序 間、ヲ、追、含、薄 3 ノ久 腺、化、 4 3/ 見 iv 毛 行 質、呈、跡、量、 13 シ、部 = 得 21 F 組 細 極 毛、ス、ス、ハ、殆 進 3 17 存、去、位 m 織 管 細、ル、ル、腫、 + 毛 在・レ、 1 2 3 3 血、ヲ、コ、瘍、 變 ^ -ラ テ = 1 セッルい思 之ヲ 管、常、ト、ノ、純 及 . 縮 隨 明 シ、部、考 般 瞭 ~ 如 ハットッヲ、古、粹 ラ 部、位、 全般 結 漸、ス、得、ク、 = 漸 25 7 位、 ガル ラ = 核 結 果 w 追 結 ナ、毛 = `前、 次 次、 二、第 此、ル、細 明 局 及 述、 -

-於 テ 其 壁 各 層 = 25 腫 瘍 1 浸 潤 27 勿論 特 殊 1 退行 性 戀 化 7 證 明 七 ズ

觸 IV h 位 診 間 傷全體 色 = 隙 7 iv H 或 部 取 1) 25 テ 船 9 構 最 腔 肉 若 致 E 服 岩道 强 的 3/ 1 平 靭 7 = 0 等 45 = 25 等性 威 赤 ナラズ 紫 -10 色 硝 ラ 子 V = かかい 樣構 17 染 w 7 きし 造ヲ 所 w 多 = 呈 りん、 數 3 テ ス 1 小 尚 Tho え ナ 此 毛 iv 其 部 お 最 細 じん染 分 Æ 胞 7 强 注 = 色二 富 靭 視 ナ 3 ス w iv w 3 島 時 リテ 所 20 20 前 散 此 其 大部 記 在 硝 1 セ 子 樣 w 分 ヲ認 個 組 27 極 内 織 外 4 間 3 是 テ 頸 = 等 幾 淡 動 多 クえ 脈 1 部 ノルナ 1 中 間

色 ヲヽ 7 ラ F. 質 3/ 巢 ル、 V 7 視 IV カ、概 本 E 1 大體 標本 能 形 徵、或、 細 3 iv 1 胞 長 7 比較 狀 トハハハ的 え スい毛い 此 軸 -= -於 於 境 或 お m 細、述 的 静 1 C ラ ラ 細 脈 1 3/ 血 ブ ñ × -テ 管、レ 胞 端 健 21 1 明 全 體 1 形 1000 附 = = 色ヲ 般 = 構 共、 一、富 同 1 近 橢圓 二、般、 肝 證 = 造 × 及 30 取 著 多いニンル 細 全 明 23 7 形 明ナ 胞 IV. 吾 少小腫 外 7 切 ノ、ナ、瘍 n A 片 方 1 大 長圓 比、ル、組 7 くろー ラ ガ 1 3 ハサニ 得 470 小胞 反 較多、織 " ス V 形 的、數、 1 對 壓 核ニラシン育質細い 比 き 1. 乃 巢 側 迫 細 Æ 至 ス 反 性 刨 也 厚管 胞 應 ~ 其 1 ラ チ 實 長 明 3/ V 或 大 此 一狀等ヲ 力 質 キ、胞、 7 軸 次 サ 性 ナ 結、ノ、認 IV 永 1 及 IV 繙、胞、 其 1 肝臟 他 內 24 形 貯 呈シ之ヲ 織、巢、 端 モ V 頸 狀 藏 1 癌 ヲ、ヲ、此 静 3 = 1) + 有、形、部 附 脈 (Hepatom) 1 於テ 必ズ ラ モ シ、成、分 近 形成 稍 V 何・シ、 其 = = 2 レ、其、 ζ 次 25 21 25 周 ニン質、 気で テントンニ モ 大凡 或 小 也 N 圍 標本 ル腫 ナ 1 = 見 " 定セ 多 著 ル像二 角形 鴻實 シッ於 個 = E 3/ 一於テ特 核 テ、 ズ 毛 ラ 7 1 多 麻實 質 細いハ、特 樣 赤 21 近 I 少 和胞 7 血、單、有 色 似 形 呈 管、二、 1 -ナ 大 也 元 大小不同 ス ヲ、毛、 呈 長圓 y 胞 此 缺、細、構 健 お 3/ 第 巢內 C 細 クい血い 浩 或 常 形 コ、管、 h 胞 7 圖。 トンラ、有 淋巴 7 = 1 = 原 ナ・有・シ

キャストラ

腺

=

=

t

ŋ

V 形 在 胞

也

一發現 備へタル腫瘍ニシテ而モ此點ガ在來ノ報告例ト一致スルコト。 コトナク寧ロ個在結節狀ノ腫瘍トシテ極メテ緩慢ナル發育ヲ取ル等ノ點ニ於テ特種ノ性狀

見ル明白ナル上皮細胞性ノ諸徴ヲ見ザルコトヲ以テ直ニ之ヲ否定シ得ペシ。 ノ發生ヲ假定スルトスルモ其間質ガ毛細管ヨリ成ルコトハ是レニ適セズ又實質細胞ニモ鰓孔性腫瘍ニ 發生スル斯ノ如キ構造ヲ有スル腫瘍ハ他ニ考へ得ベカラザルコト、鰓孔性迷芽ョリ

色 ノ大ナル理由ニョリテ打立テラレタル診斷ヲ覆スニ足ラズ況ンヤ從來ノ報告例ニ於テモ多クハくろー ニアラズ是レヨリ發生セル腫瘍細胞ニ轉化セル本腫瘍ノ質質細胞ニ此反應ヲ見ズトスルモ上逃ノ多ク · 夕本腫瘍ノ診斷上ニハ大ナル價値ヲ有セザルモノナルベシ。 反應ノ存在 !來動脈腺質質細胞ノくろーむ反應ノ强弱ハ必ズシモ一定セルモノニアラズ又必ズシモ著明ナルモノ (三於ケルくろ) む反應ヲ證明シ得ザリシコトハ此診斷ヲ下スニ當リ唯一ノ缺點ナルガ如キ 以上ノ理由 ラ記セザルニ於テオヤ、 ニョリ余ハ此腫瘍ヲ頸動脈腺腫瘍ト斷定スルニ躊躇セザルモノナリ、 此くろーむ反應ノ有無ハ文獻ノ調査成績及余ノ實驗例ヨリシテ 唯實質細胞 威アルモ

腫瘍ノ臨牀的觀察

N 所アルベシ。 三余ハ前掲ノ泰西報告例及余ノ實驗例ヲ根據トシテ腫瘍ニ關スル臨牀的事項ニ就テ少シク逃プ

シ テ最高ハ六十七歳(第二十七例)ナリ、最多キハ三十歳代ニシテ八例ヲ算シ次ハ二十歳代ノ五例、 年い齢 文獻ヲ詳ニセザルモノヲ除キタル殘餘ノ二十三例二就 テ見ルニ最少ハ十八歳 (第四例) = 四

〇阿部・頭動脈腺ノ腫瘍ニ就

跡ト 在セ 1 細胞 屢;出 iv 3/ 體 テ 組 ハ之レ 腫 Í 織 ガ血 瘍 = 攝取 間 傾 ガ 為メナ 管ト 質 + 旣 セラル、 = 親密 所々特 二肉 り。 服 1 的 關係アルハ度々 Æ 有 ノヲ ノへ = 注目 最多シトス、 もじでり 七 ラ v タル 反復セル所ナルガ此極メテ血管ニ富メル結果若 ん色素ノ沈著ヲ認ム此色素 如 腫瘍が切片二於テ肉眼的褐色ノ色調ヲ呈セル小點ノ散 n 多少 ノ大小ノ出 Ú 竈 八種 ラ形 なり 成 結締 ス 叉陳 織 細胞 舊ナ iv 丰 組織 出 腫 **進瘍組織** m 球等 遺

ア診断

曲 二側頸動 脈腺 ヨリ發生セ w 腫 瘍

ガ頸 動脈腺 ノ常在部位ニー致 ヨリ考察 スルコト

發生局

所的

ホスルニ

肉眼的及組織的所見二於テ詳述セル如ク腫

瘍ノ最初ニ

發生セル原

腫瘍ノ比較的若キ 部分ノ構造 ガ 普ク 血管ニ圍繞セラレタル小胞巢狀ヲ呈スルコトガ IF. 常ノ頸

動 ノ構 近似 ス IV = F 第 圖)

從 胞巢ヲ形 來記 述 セ 成 ラ ス V iv 細 タル頸 胞 ノ性狀ガ正 動 脈 腺 腫 一常ノ頸動脈腺質質ノ細 傷特二記 述 ノ詳 細ヲ 盐 1 胞 IV -バル 近似 13 スルコ ウフ、 10 7 n 3/ +

ベル = 類 E ス in 71 瘍 ウ 拘ハラズ此ノ腫瘍ノ發育ハ極メテ徐々ニシテ轉移形成、 フ 組 織 7 本來 + T 構造ガへばこーむ (Hepatom)、ひーぺるねふろーむ (Hypernephrom) 等ノ構造 リー 等 1 記 述上肉眼 的 及組織 的 所見 ノ主要ナル 浸潤性増殖等ノ惡性腫瘍 點ガ 相 致 ス w 7 P ノ性狀

然レドモ亦最初ヨリ發作性ニ疼痛ヲ訴ヘ(第二十五例)或ハ呼吸及嚥下障碍ヲ訴ヘ (第三

十一例)或ハ余ノ例ノ如ク聲音嘶嗄ヲ訴ヘタルモノモアリ。

例)アルノミ。 而シテ二十三例中最初ヨリ臨牀的ニ頸動脈腺腫瘍ト診斷セシハ唯コップシュタインノー例 (第七 ト考フル場合ヲ多シトス、 腫瘍 生長徐々タルコト及殆ンド自覺症狀ヲ訴ヘザルコトノ為三淋巴腺腫 此外鰓孔性癌 (第六例)又ハ脂肪腫 (第二十八例)ト診斷セル場合モ (結核性又ハ

|腫瘍ニ對シ類症鑑別上考慮スペキモノニ前記淋巴腺腫及鰓孔性腫瘍ノ外ニ淋巴肉腫、 動脈瘤、 副

7 損傷セ タル場合モアリ而シテ頸動静脈ノ外ニ 經ノ中一部为或ハ全部ヲ犠牲ニセ 手術、 ザリシハ僅二二三例二過ギズシテ多ク 頸動脈腺腫瘍ノ場合ニハ其發生部位ノ關係上手術ハ常ニ困難ニシテ頸静脈、 ザルヲ得ザル場合ヲ多シトス、二十三例ニ就ラ見ルモ血管及 更二迷走神經ヲ切除シタルモノモ五六例ノ多キヲ數フ。 ハ總頸動脈及內外頸動脈ヲ切除シ 更二頭静脈ラモ 頸動脈及迷 切

場 = 陷ヰリタ ルモノハ後出血 合ニシテ手術攻撃ノ大ナリシニ因ルモノ、外ニ頸動脈ノ結紮或ハ迷走神經切斷ノ為ニ合併症ヲ起シ シテ他ノニ 豫後 in モノナランカ、 例モ亦手術ノ翌日又ハ三日目二死亡セルモノニシラ蓋シ手術攻撃ノ大ナリシガ為ニ 手術二近因ヲ有シテ死ノ轉歸 (第三例)、嚥下肺炎(第十五例)、虚脱(第十九例)及脳軟化(第二十六例)ノ四例ナリ 之ヲ 要スルニ ラトレルモノ二十三例中六例ヲ數フ其中二就ラ死因 死亡例へ何レ Æ 頸動静脈或ハ更二迷走神經ヲ切除 ノ明 シタ 虚脱 力

iv

但年 十歲及六十歲代ノ各三例之二次グ、之ヲ要スルニ腫瘍ノ發生ト年齢トハ深キ關係ナキモノト 少者ニハ來ラザルガ如シ。

例ヲ示ス、然レドモ性 ギールケ (Gierke) 及グローテマンハ男子二多シト称 Æ 亦腫瘍ノ發生トハ深キ關係ナキガ如シ。 スルモ余ノ二十三例ニテハ男十一例

ヲ除キ右側五例ニ對シ左側ハ十六例ノ多數ヲ示セリ斯ノ如ク左側ハ約三倍ヲ數フルガ故 八左右位 ギールケ及グローテマンハ左側三腰、ナリト稱ス、余ノ二十三例ニテモ不明二例 瘍ノ發生

F

疑 ハシム

2

ドモ

確

カナル根據ヲ認メズ蓋シ偶然ノ

結果ナラン。

71 毛 リテハ三十七年間 四、發育經過及大サ何等カノ關係ナキカラ 勘カラズ、又或 手拳大ヲ超ユルモノナク多クハ鶏卵大內外ニ止マレリ。 ラ 後二 至リテ殆ンド停止 (第十例)ノ長期ニ亙レルモノアリ然レドモ亦反對ニ僅々數ケ月ノ經過ヲ取レルモ モノハ最初徐々二生長シテ終リニ急速 腫瘍ノ發育ハ一般ニ徐々ニシテ二三年ノ經過ヲ取レルヲ普通トシ甚シキニ至 1 ルモノモアリ 而シラ如何二長期ノ經過ヲ取レル場合ト雖モ ノ發育ヲ示シ或 E ノハ反對 = 初期二 腫瘍 ハ生長速 大

如ク一般二經過ノ徐々タルコト及腫瘍 ノ増大セザルコトハ偶、以テ其惡性ニアラザルヲ證 ス IV

サ

ノナリ。

終リニ 例中約年數 至テ或 頸 部 ハ偏頭痛ヲ訴へ(第七例)或ハ重聽耳鳴ヲ訴へ(第八例)或ハ腫瘍 ノ患者ハ終始何等ノ苦惱ナシニ經過シ、他ノ残リノ場合ニ於テモ最初ハ何等 三腫瘤ヲ觸ル、ト云フコトノ外ニハ多クノ場合ニ於ラ殆ンド自覺症狀ヲ訴 = 疼痛 ヲ訴

部論文附圖



タルモノナリ

例)此二例ノ再發ヲ見タルハ剔出ノ不充分ナリシニ因ルモノナルカ或ハ腫瘍ガ偶~惡性ノ傾向ヲ有セ り、又一年後ニ再發シタルモノモアリ(第五例)或ハ又僅ニ半蔵ニシラ再ビ手術セシモノモアリ シニ因ルカ俄ニ判斷スル能ハザレドモ大體ニ於ラ術後再發ヲ來サドルコト及轉移ヲ形成セザルコトニ ョリテモ腫瘍ノ惡性ニアラザルヲ思ハシメ隨ラ豫後モ亦良好ナリト思惟セラル。 手術ニョリテ治癒セルモノ、中ニハ術後一年乃至四年間ノ監視ニテハ再發ヲ認メザリシモノ多數ア

Literatur.

1) Arnold, Virchow's Archiv 33 Bd. 1865. 2) Aschoff, Pathologische Anatomic. 3) Borst, Die Lehre von den Gesch-Zondek, Berliner klin. Wochenschrift 1908. Geschwülstlehre. Pathologie No. 6, 1905. 13) Paltauf, Ziegler's Beiträge XI Bd. 1891. 14) Rauber, Lehrbuch der Anatomie. 15) Ribbert, Ziegler's Beiträge 38 Bd. 1905. 11) Neuber, Archiv f. klin. Chirurgie 102 Bd. 1913. 12) Eberndorfer, Centralbl. f. allg. Archiv f. mikrosk. Anatomie 56 Bd. 1900. 9) Lubarsch, Ergeb. f. spez. pathol. Anatomie & Physiol. 1896. 10) Mönckeberg, Centralbl. f. allg. Pathologie XI Bd. 1800. 7) Kaufmann & Ruppanner, Deutsche Zeitschr. f. chir. 80 Bd. 1905. 8) Kohn, willsten 4) Chiari, Beiträge z. klin. Chirurgie 81 Bd. 1912. 5) Gronemann, Virchow's Archiv 218 Bd. 1914. 6) Heinleth, 16) Spalteholz, Handatlas der Anatomie des Menschen. 17) Stöhr, Lehrbuch der Histologie. 18)

附圖說明

- 第一個 腫瘍周邊部ニ於ケル質質ニ宮メル部分。
- 第二回 腫瘍中心部ノ間質増殖硬化シテ質質ノ退化セシ部分。

胃硬性癌ノ神經纖維索內浸潤經過ニ就テ

慶應義塾大學醫學部病理細菌學教室(主任川上教授)

大 串 市郎右衛門

余ハ惡性腫瘍ト末梢神經トノ關係、 好ンデ神經纖維ヲ選ミテ之ヲ高度ニ侵シタル胃硬性癌ノ一例ヲ得、是レガ精細ナル檢索 殊二前者ガ後者二對スル態度二就テ探究セント欲シ、先必其第

キー氏鍍銀法ヲ行と、諸種ノ鏡査標本ヲ作製シタリ。 凍結刑截ニョリテ截片ヲ作製シ,主トシテへまときしりん,えおじん寝染色法ニョリ必要ニ應ジテマロリー氏染色及ピイルショウス 卽チ我病理學教室剖檢例第百○九號胃硬性癌ヲ其周圍組織ト共ニ 摘出シ,之ヲちえろいぢん包埋法,ばらふじん包埋法ヲ經,

癌腫細胞ノ運命(三)癌腫細胞浸潤ニョル神經纖維東ノ變化ノ概要等ニ制限セラル、ヲ除義ナクセラレ 變化ハ已ニ之ヲ知ルニ由ナク、依テ檢索ノ範域ガ(一)癌腫細胞 本例ハ三・五%ふぷるまりん液中ニ永々保存セラレタルモノナルガ放ニ、神經纖維ノ造構ノ微細ナル ノ神經纖維束內侵入經路(二)侵入セル

部網狀ヲナシ、組織間隔ヲ傳ヒテ浸潤増殖セリ。 織ニ沿ヒ烽火狀ヲナシテ浸潤シ、粘膜下組織ニ於ラハ高度ニ増生セル結締織中ニ介在シ、重ニ索狀一 本例い高度ノ間質結締織増殖ヲ伴ヘル定型的胃硬性癌ニ屬スベキモノニシテ、 進ンデ筋層内ニ到レパ細胞列ハ狭小トナリラ、主ト 癌腫細胞 八腺間結綿



セ 3 n ニシテ硝子様外観ヲ呈スルモノアリ。 擁スルモ ノアリ。 往々其淋巴腔擴張シ、 為メニ結締織鬆粗トナリテ哆開

榮養血管モ亦タ擴張セルモノ多クシテ中ニ密ニ赤血球ヲ容ル。然レドモ著シキ出血ヲ認メタルコト

= T 小圓 リテ劃然トシテ明二阻隔セラル、ヲ常トス。 細胞浸潤ハ神經ノ周圍ニ於テ認ムル場合多シ。其程度種々ニシテ、 而モ周 圍膜組織内及更二之ヲ通過シテ東内ニ波及セルノ像ヲ認ムルコト無ク、 之レ注目ニ値スベキ事實ナリ。 往々甚シク高度ナル場合 神經周圍膜

細ナル變化二就キテハ嚴密ニ論議スルコト能ハザルガ故ニ 部 |維ニ於テ往々高度ナル變化即チ髓鞘ノ網狀構造ノ不整、軸索ノ紡錘形化、或ハ其念珠狀腫脹、 於ケル空泡形成、 或 ハ其斷裂等ヲ 観ルコトアルモ、 兹ニ之レヲ詳述セズ。 既二前述セルガ如ク 神經纖維ノ造

Losa 度ナ 何ヲ テ w N 浸潤竈 ノ像ヲ呈スルアリ、或ハ周圍膜 ニアリテハ、連續的ニ神經東内ニ迄到達セルヲ明ニ知リ得ルコトアリ。橫斷セラレタルモノニ於 胞ハ主ニー 周 次ニ漸次癌腫細胞ガ外膜及周圍膜ヲ侵スニ及ビテ其淋巴腔ハ益、擴張シ、結締織ハ鬆粗トナリ、 庫 膜 癌腫細胞 3 ハ凡テノ方向 リ周圍膜 列ノ細胞索トシテ結締織纖維ノ走行ト略、 ハ常ニ周圍膜 結締織 ヨリ癌腫細胞ノ包圍スル所トナリ ヲ破壞的ニ ノ結締組織 ノ一角ニ 侵略セルガ如キ像ニ遭遇スルコトアルモ、 間隙内ニアリ。只が極メテ稀ニ 癌腫細胞 ノ占居介在スルヲ見ルコトアリ。 並行ニ其間隙ヲ壓排シッ、侵入シ、 Petersen ノ所謂 神經纖維束 Perineuritis Carcinoma-之レ恐ク初期ニ 小ノ周 其程度ノ如 圍

ヲ走ル所 七 3 一二余ガ本研究ノ資料トシテ先ヅ本例ヲ選ミタル所以ナリ。 IV ヲ見 筋纖維束間ヲ縫ヒ、漿膜下ニ及ビテ再ビ稍~旺盛ナル増殖ヲ示シ、所々癌細胞ノ相寄リテ集関ヲ成 ノ大小 IV. ifii ノ神経 シテ特二與味ヲ喚起セシムルノ事實 纖維束ヲ選擇的ニ侵襲シ、好ンデソノ周圍及內部ニ集簇 ハ、癌細胞ガ漿膜下、 筋內外兩層內、 セルコトニシテ、

癌 便宜上分チラ次ノ諸項トナサント欲ス。 於ラモ、神經纖維束 ンデ東内二入リテ神經纖維ヲ破壞シテ盛ニ |腫細胞ノ侵入スル所トナリ、或ハ外膜或ハ周圍膜ノ結締組織纖維間隙ニ侵入セルアリ、或ハ更ニ進 卤 的一 癌腫浸潤ノ程度種々ナル部分約三十ケ所ヨリ切片ヲ作リテ檢索ヲ行ヒタルニ、 ノ侵 サレタル モノヲ見ザル無ク、其甚シキモノニ於テハ、大多數 増殖セルアリ。 今概括的二其所見ヲ記載セントスルニ ノ神經 何 纖維東 V 部

於ケル所見 周圍膜及神經纖維束內等何レノ部分二於ラモ未ダ全ク癌腫細胞ノ侵入シ來ラザル神經

一、外膜及周圍膜ノミ侵サレタルモノニ於ケル所見。

外膜及周 外膜及周 園膜ニ變化ナクシテ反ッテ東内ニ癌腫細胞ヲ見ルモノニ於ケル所見。 圍膜ノ侵サレタルト共二、内膜及神經纖維間ニ侵略ヲ蒙レルモノニ於ケル所見。

厚セリ。 |三於テ然リトス。肥厚セルモノニ於テハ或ハ幼若ナル結繙織細胞ノ多數ヲ混ゼルアリ、或ハ核著 未が全ク癌 然レドモ 其程度 細胞 侵入ヲ受ケザル神經 種々二 シテ或ハ著シキアリ、或ハ極メテ低度ナルモ ニアリテハ、外膜及周圍膜 ノ結 紀締総 ノアリ、 般 織細ナ 増殖シ肥

ツ 、アルモノヲ諸所ニ認ムルコトヲ得タリ。 又癌腫細胞ガ神經節細胞群内ニ侵入シテ之ヲシテ變性消失ニ陷ラシメ、自ラ此部ニヨク發育增殖シ

y_c 所ナルモ、神經纖維束ノ經過中其何レカノ部分ニ於テ、周圍膜結締織纖維ノ間隙ヨリ侵入シタル癌腫 腫浸潤ノ比較的輕度ナル截片ニ於テモ尚ホ斯ル神經束ヲ認ムルコトヲ得タリ。之レ一見奇異ニ感ズル リ。其程度及狀態ハ前項ニ記載セル所見ト略~同一ナルヲ以テ茲ニ重複記述セザルモ、往々甚シク高度 ノモノアリテ、東内ハ癌腫細胞ニョリテ全ク充塡セラレナガラ周圍膜ニハ聊モ之レヲ認メザルモノア ナリトイフベシ。 且ツ神經纖維束周圍組織ニモ未ダ浸潤無キカ或ハ輕度ナルモノアリ。而シテ胃壁全體トシテハ癌 ガ 即チ癌細胞 神經周圍膜ハ健全ニ保タル、モ東内ハ已ニ癌腫細胞ノ侵フトコロトナレルモノ、多數ヲ認メタ 神經纖維束内ヲ滲潤性或ハ破壞性ニ増殖シ、長軸ニ沿ファ連續性 ハ神經纖維東内ヲ介シラ屢、稍、遠隔邊緣ノ部ニ達シ得ルモノナルコ ニ侵略シ來レ トラ立證 ルモノニ外ナラ スル E

所見ノ鴻諸及考案

一、淋巴管或ハ所謂組織間隙ニヨルカ。抑モ惡性腫瘍細胞ノ神經纖維束内侵入ノ經路トシテ考へ得ベキハ、

一、榮養血管ニョルカ。

三、該血管周圍結締織ヲ傳ヒテ進ムモノナルカ。

四、特殊ノ經路ニョラズシテ、一般ニ周圍ヨリ破壞性ニ侵略シ來ルカ。

〇大串・胃硬性痛ノ神經纖維索內浸潤經過二就テ

ナラン。 要ス 隙 ルニ本例 沿ヒテ侵入シタル癌 -於 ラ テ破 ハ癌 壞的 細 腫細 胞 蠶食的侵略ラ 胞 神 ガ日ヲ經ルコト 經外膜 及周 行 圍 ヘル像ヲ見 久シ 膜 ノ結締 キニ及ど 組 べ。 織 局 間 隙 所性 7 縫 組 ファ 織 破 侵入 坂東ラ行 2 漸 B 次 ŧ

=

達

3/

7

N

E

1

-

3/

テ、

决

3

狀ヲナ 如 7 3 = 3 部 見 1) " ラ iv = 7 ス カ 於テモ 神經 置 セ 3 得 ルコト テ 1 换 シ サ 横 メー方中軸部ニ 充 " 纖 セ 比較 維ヲ ラン 癌 膜 滿 华ナラズ。 斷 ノアリ。 腫 3 セ セ 離間 的 細胞 y ラ 凡 IV 17 周 ガ 少力 テ IV V 圍膜 爲 21 神 3 モ 次 シテ、一旦東内ニ達セル癌細胞 ツ、進メル像、 索狀ヲナシテ淋巴腔內 經 然レド ノヲ多数 n x 神經 向ツテ破壊的 二其周 ニ侵入セル癌腫細胞 纖 維 東 東内ニ Æ 圍 未 視野ニ於テ目 = 於テ、 神 n' 經纖 於ケル 癌 細胞 或ハ著シク神經 = 侵略 維八壓 神經 癌細胞 71 纖維 神 路 ス 20 -7 迫 經 セリ。又縦断 ルト共ニ、 遂二 IV 髓鞘 ガ大部 セ 八熾 アリ、 ラレテ萎縮ニ 神經 纖維ヲ 烈ナル發育力ヲ保持シ、 內 分 = 入リ 又其長軸 旺盛ナル増殖ヲ營ミテ神經織 或 內 破 膜、 破壊シテ其 セラレタル神 壌セラレ、 27 髓質 著シク擴 傾ケルモノアリ。 尚進ンデハヘンレー 中 = 沿 = 張 存 或八東內 長 ٤ 經纖維 テ セ 在 軸 盛 ル淋 スル -往々明 沿 ンニ 確 東 八全 巴管內 フ 然レド 增 ナ テ -氏 增 於テハ、 殖 = iv 7 癌 維 = 鞘 多數 像ヲ認ム 殖 ス 腫 n ヲシテ變 Æ 於テ胞 間 セ 斯ル像 公ノ核分 細胞 Æ w 達 ノ像 癌細 1

血管壁周 侵 纖 略 維 束 圍 12 八內二 iv -場 甚 合 於ケル 戏 僅 於 一少ノ淋巴球様細胞ノ存 テ 小圓 æ 共 形 細 -胞 殆ンド之ヲ認 浸潤 11 癌細 在 セルヲ見タル メズ 胞 þ ノ神 1 ファ 經 外 得べ 及 コトア 周 か、 圍膜 in 1 = 0 唯余 ---アル場合 極 メテ少數 = 於テ ノ例二於ラ榮 Æ 或 進ンデ

ター示ス

Æ

ナル 東内二入リテ初メテ起リ周圍膜迄ノ間二於テハ然ルコト無シ。 コトヲ 確メ得タリ。一言以テ之ヲ蔽ヘバ、本例ニ於ケル癌細胞ノ神經組織內破壞的增生ハ、 其纖

入 初期二於テハ或ハ極メテ輕度二認ムルコトアルモ、 セ 腫 ルト否トニ關セズ、 圓形細胞浸潤い、他ノ組織ニ於ラハ稍、高度ニ認ムル所ナルモ、神經組織ニ於ラハ其癌腫細胞 ノ侵入ニ對シ、 組織性反應極メテ微弱ニシテ、 殆ンド常二之ヲ認ムル能ハズ。且ッ內膜結綿織及シュワン氏核 而モ之レ著明ニハ非ズ。 往々反應ヲ示サズトイフモ强チ過言ニ非ザルベ 即手神經纖維東内ニ於テ 增殖等 ルノ侵

對 " + 示スコト本檢索例ニ於ケルガ如クナルニ由ツテ之ヲ觀レバ、神經組織ハ一旦癌 3/ 夫レ正常組織ニ於ラ、神經ガ其機能ヲ支配シ粲養ヲ左右スルモノナルト同ジク、惡性腫瘍ノ侵入ニ キナリ。 一旦神經纖維東内ニ侵入セル癌腫細胞ガ、他ノ組織内ニ於ケルニ比シテ寧ロ良好ナル發育增殖ヲ テモ亦々各組織ノ抵抗力ニ對シラ援助的意義ヲ有スルモノ **雪二其責務ヲ放擲シ去ルノミナラズ却ッテ癌腫ノ増殖轉** + 移二對シテ好個ノ道ヲ in ベキコト想像ニ 腫組織 難 開 カラズ。然レ クモ 侵略ヲ蒙ルト ノト E 謂

如 神經纖維東内ニ於ラ癌腫細胞ノ增殖 ク解釋 也 ント欲ス。 ガ特二良好ナル所以二關シ余ハ敍上ノ所見ヲ參照シラ試ミニ左

イ、神經組織ニ於テハ組織反應ノ僅微ナルコト。

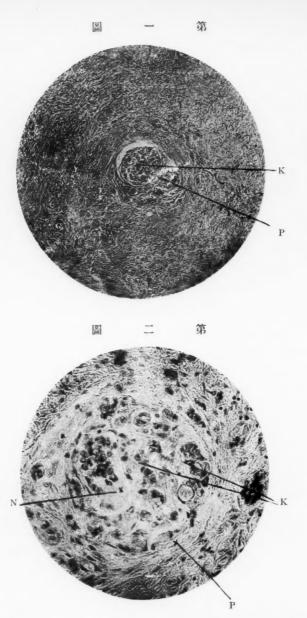
い、淋巴管ノ發育ノ裕富ナルコト。

〇大串・胃硬性痛ノ神經纖維索內浸潤經過二就テ

之レナリ。山及四

血管 侵入シッ、アルガ如キヲ例外的ニ見ルコトアルモ、之レ亦タ恐ラク增殖ノ進メル時期ニ於ケル像ナ x 織 ノ如シト日へリロ。 ~ ノ如キハ、組 1 間隙 クシテ、 1 組 " in 織 3 トマ リ侵 間 侵入ストロフ語。又赤松氏ハ、前記種々ノ、經路相依リテ惡性腫瘍組 = 失 初 隙 期二 入 織 七 1 3 ス 間隙 リ入リタルモノガ終リニ斯ル像ヲ呈 1 ヲ知レド アリテハ組織間隙ヲ介シテ侵シ來ルモノナルベシ。勿論余ハ一例ヲ以ヲ ルモノ、如シ。 余ガ檢索セル 本例ニアリラハ、癌腫細胞ハ殆ンド凡ラノ視野ニ於ラ周圍膜結 神經纖維東内淋巴管ハ其周圍淋巴管ト交通ヲ有セザルガ故ニ ニョルナラント思惟ス。 モ 本例 稀二榮養血管問圍 ノ如ク狭小ナル胞索ヲナシテ浸潤性ニ増殖スル性質 三比較的 スルニ至レ 盛 -12 増殖セ モ ノナ iv ルヲ見ルコトアルモ、 ~ " シ 織 ノ侵入ニ道 惡性腫 叉周 圍 7 瘍 3 有 他ヲ推スコ リ破壊的 7 開 専ラ祭養 ス 之レ ル癌 7 Æ 初 腫 N

異 ラ 13 ナ 1 ナ ルペシ。 進三、 N V 神經外及周 ルモ iv = F ガ 維ヲシテ速ニ破壞消失セシメ、一方中軸部ニ向ツテ侵略ヲ逞フスルト共ニ、 無シ。 神經周圍二於ケル癌組織ト步調ヲ異ニシテ、 ノアルヲ見ズ。且ツ癌細胞ハ神經纖維東ニ對シ特殊ノ親和性ヲ有スト思料スベ 如 + 即チ癌腫ノ神經外及周圍膜ヲ侵ス態度ハ、他ノ組織、 モ 、園膜結繙織ハ、初期ニアリテハ多少增殖肥厚シテ癌細胞ノ侵入ニ對シテ相當抵抗 然レドモ一日 漸次其侵略ノ程度ノ増スニ從ツラ次第ニ鬆粗トナリ、遂ニ全ク反應 一神經纖維東內ニ侵入シタル癌腫細胞 自ラ耀デ、稍、遠キ部位ニ到達 ハ、此部二於テ旺盛ナル 例へが血管筋層等ヲ侵ス セサ 又他方長軸 スルヲ得ルモノ + 増殖ラ行と、 IV 場合 像ニ遭遇シ -至 卜特 ニニ沿フ スルモ E



大

串

文 附 圖

(I. Ōgushi.)

ハ、血管筋肉等ノ如ク固有運動ヲナスコト無キタメ機械的影響ヲ受クルコト遙ニ少キコト。

二、えみりん或ハ其分解産物ガ癌細胞ニ對シテ特殊ノ粲養物タル意義ヲ有スベキヲ想定シ得

異種動物神經組織內移植ニ成功セラレタル亦タ實ニ偶然ニ非ザルベシ。

ノ増殖ニ對シテ好個

ノ狀態ニアリトイフヲ得ベク、同僚白井氏ガ鼠肉腫ノ

擱筆ニ臨ミ恩師川上教授ノ御校関ヲ謝ス。(完)

文料

1) 赤松、 惡性腫瘍組織特殖ノ末梢神經纖維=對スル態度・補: 十三年- 二胂・ 2) 中本, 腫瘍ト神經- 近畿婦人科學會雜誌- 第 das Wachsthum und die Verbreitung bösartige Geschwülste insbesondere der Krebs in der Lymphbahnen der Nerven, Ziegrer Beit-六卷: 第三號: - 3) **内海,** 鼠肉腫増殖ガ末格神經=及ポス影響=就テ・癌: 十七年: 第三册: - 4) 川上, 胃癌ノ病理・慶應醫學. Chir. Bd. 43. 20) Michael, Uber Degeneration und Regeneration der Nerven, Virchow Archir Bd. 181. klin. Chir. Bd. 18. 19) Petergen, Anatomische und klinische Untersuchungen über die Magen und Darmcarcinome Beitr. z. klin. räge VII Suppl. 1905. 18) Goldmann, Anatomische Untersuchungen über die Verbreitungswege bösartige Geschwülste. Beitr. z. Muskels an der Grenze bösartige Geschwulste, Virchows Archiv Ed. 161. 16) Ribbert, Geschwülstlehre. 17) Ernt, 管內應入隨廣鄉隨選命=減ヲ・瘍・十一年。第三册・ 15) Fudinami, Uher das hystologische Verhalten des quergestreiften 瘍組織ノ血管=鷚スル磁度・東京醫學會維結・二十八卷・一號・ 13) 末格神經變性・神經學維結・第十四卷・四號・ 14) **竹門**,血 **機関ン病理・東京警察會維語・第十九俗・第十二號・ 10)白秀、 鼠肉腫ノ果種動物末輪神經ニ於ケル移植實験: 痛・十八年- 第二** 減テ・**夏鹿審學・第一省・**第五號・ 8) **鹵井**, 鼠内腫ノ成熟鳥類=於ケル移植=減テ・慶應醫學・第一巻・第八號・ 9) 肉體ノ成然異種動物殊=成熟鳥類=於ケル移植=孰テ・編· 十八年· 第一册· 「)**曲井**, 良肉腫ノ成熟異種族動物=於ケル移植= 第一卷:第十號: 5)川上、鶏ノ関氣機疾患=於ケル神經ノ生理學的病理學的研究: 慶應醫學:第一卷:第三號: 6)白井、 11) 🔷、 腸管=於ケル惡性腫瘍増殖=覵スル組織學的研究補遺: 東京醫學會練誌: 第十七卷: 第一號. - 12) 孈地,惡性腫

附屬說明

▼一 ■ P神經周圍膜、K神經纖維素内ニ侵入セル癌腫細胞

癌細胞ノ反應ニ就テ

Woglom, The reaction of the cancer cell. Jour.

著者ハ水素いおん測定器ヲ用 ヒ テ、正常組織及ビ種々ナ ル動物腫瘍組織ノ水えきすノHラ測定シ タリ、検査セラ Cancer Research, Vol. VIII, No. 1.

タル腫瘍組織ノ種類及ど其結果ハ次ノ如シ。

Crocker Institute rat fibrosarcoma No. 8 Spontaneous Sarcoma of the liver(Bullock & Curtis) 4-1; Flexner-Jobling rat carcinoma Jensen rat sarcoma 六·九五 七〇九 七二五

> 九例ノ腫瘍ノ州平均數ハ七・〇九ニシテ、之ラらっごノ正 纖維腺腫ハ多量ノ産膠質ラ含有スルタメ之ヲ除外シ、他ノ Spontaneous mammary fibroadenoma of the rat 八.〇门 常組織ノ水えきすノHト比較スレバ次ノ如シ。 是等ノ腫瘍中最後ノ二例ハ、肉腫ハ壌死竈多カリシタメ、

., Sarcoma No. 10

六・八六 六三二

H

七〇五 六・九〇

皮下結締織

七〇九 七・一二

七五六 七一四

六。九八

胎兒 睾丸 腫瘍

四四三

の技

44



最後二著者等ハ結論トシテ次ノ如ク云ツテオル、即チ比較 病理學上從來ノ文獻ヲ調ベテ見テ、下等動物ニハ子宮腫瘍 稀デアツテ、多クハ後腹膜下腫瘍が段々大キクナツテ子宮 卵巢腫瘍ノ發生が屢とデアル事ト比較考察シ ア 充分注意 乳腺二八腫瘍發生頻度ガ大デアル事、又種々ノ動物ニ於テ テ見ルト發生頻度ハ甚ダ小デアル、此事實ハ同種動物デモ ノ發生ハ甚ダ稀デアル、殊ニ人類ノ子宮腫瘍發生ト比較シ 二直接擴ガツテ浸潤シテ行ツタ場合ラ三例掲ゲテオル。 オル、尙ホ他ノ原發腫瘍ガ子宮ニ轉移ヲ生ズル 事ハ甚ダ | まうすノ子宮癌 ハ 従來ノ報告例モ僅カニ 三例デ、二例ガ 子宮筋腫ノ發生ニ比較スルト非常ニ稀デアル、唯家兎デ子 ナイガソレデモ同ジ牛ノ他ノ腫瘍ニ比較スルト、ズツト尠 ト云フ事ガ單ニ腫瘍發生頻度ニノモ現ハレル事デナク、尚 宮腫瘍ノ發生ガ割合ハ多イラシク思ハレルガ、是ハ Stilling イモノデアル、犬ノ子宮癌ノ報告ハ殆ンド見ナイ、滑平筋 可キ事デアロウト思フ。牛ノ子宮癌ハ甚ダ稀有トハ云へ 八子宮癌ヨリハ發生頻度ガ大デアルガ、ソレデモ人間ノ 腫瘍ノ發生部位及ビ性狀ニモ現ハレルト云フ、吾々ノ認 同系統ノ家兎群ニ認メタ報告デアッテ、此事實ハ遺傳

デアル、尚まじんち、おーむノ如キ者ハ子宮ニモ 他ノ部 Fibromyoma 一例が癌腫デアル、スライ女史飼養ノ 畜群 位ニモ認メラレナカツタト云フテオル。(木村抄) ニテモ同様二其發現が甚ダ 稀デアル 事ハ既ニ上記ニ通り

多發性原發性惡性腫瘍

更二他二轉移ラ生ジタト云フ一例報告デアル。 患者ハ五十五歳ノ女、簡單ナ 臨床的所見及ど 剖檢記事ガ 轉移デアルカ少シ疑シイ、詳シイ事ハ原著ラ見ラレ度イ、 此報告ハ肺臓及ど直腸ノ原發癌ガアツテ、其各々ノ腫瘍ガ 發腫瘍發生デアルカ、直腸癌ダケガ原發デアツテ、他八其 左肺ニ轉移ガアル(抄者曰、此例ハ實際ニニ筒ノ異レル原 上皮ョリ成ル Adenocarcinoma デアツテ、子宮頸部後壁、 大網膜、膵、骨盤腔ニ轉移ガアル、直腸癌ハ定型的ノ圓柱 アツラ、肺臓ノ腫瘍ハ小圓形乃至骰子形上皮細胞ョリ成 ル Carcinoma solidum ノ像ラ呈シ、氣管技淋巴腺、 Jour. Cancer Research, Vol. VIII, No. 2. Seecof, Multiple primary malignant neoplasms,

著者ハ然シ之ヲ多發性原發性ト認メ テ 報告シテオルノデ

メテオル事實ヲ充分裏書キスル者デアル。

〇抄

錄

モ田量稍へ多ク、血液ノ其ヨリモ稍へ尠キ事ヲ認メタリ。キヲ認メ、尙ホ腫瘍組織ノ水浸えきす ニ 比シテ、田量ハ大差ナ藩者ハ是等ノ結果ヨリシテら。こ腫瘍ノ水浸え き すハ同

(木村抄

合計

二十一例

まうす子宮ノ原發性腫瘍

Slye, Holmes and Wells, Primary spontaneous tumors of the uterus in mice. Jour. Cancer Research,

ラ擧ゲラオル。
ラ擧ゲラオル。
ラ擧ゲラオル。
ラ擧ゲラオル。
ラ擧ゲラオル。
ラ擧ゲラオル。

レタル子宮腫瘍ハ、今日迄剖檢セラレタル約三萬九千匹ノマウド、スライ女史自己ノ飼養セルまう すず中二發見セラ

可キ事デアルト云ツテ、唯一例ノ疑ハシ1例ノ記載ヲシテニ子宮癌ト認メ得可キ場合ガー例モナカツ タ 事ハ注意ス

テ、少の共五〇〇〇例ノ原發腫瘍ヲ得タニ拘ハラズ、確カ

まうす中左ノ如キ者デアル。

The state of the s

七例

畸形腫 一例

著者等ハ是等ノ多數ノまうす(三九、〇〇〇匹)ヲ剖檢シ 一例、多形細胞內腫一例、圓形細胞內腫一例デアル、腺腫三 一部白色一部出血狀ヲ 呈シテオツタ、ソシテ 胎生軟骨組織、不規則ナル腺管、重層扁平上皮、骨及骨髓組織、淋巴 様組織、未分化狀態ノ横紋筋、めらにん色素ノ密集、のい ろぐりあ樣組織(但シ神經節細胞ハ認メラレ ズ)等ノ種を ノ組織が雜然ト不規則ニ入り交ツテオル者デアツタ。

係ラ有スル要因ハ色々ノ事柄ガアルコトハ云フ迄モナイ、 再生シ得ル能力、二、補佐的循環系統(器質的結合)ヲ速カ 受性ト云フ者ハ最モ必要ナル基礎トシ テ次ノ如キ事項ラ 體自己ノ組織カラ腫瘍組織ガ出來ル事ト ハ 根本的ニ相違 樣ノ報告ガアルト云ファ、接種腫瘍ガ發育スル事ト、其動物 デアルト云フ Bashford ノ報告ノ如キ、或ハ其他ニ幾ツモ同 瘍接種ニハ免疫性ラ有スル動物ニ腫瘍ノ自然發生ガ可能 於テ自然發生腫瘍ヲ認メタル Tyzzer ノ報告ノ如キ、又腫 瘍ラ接種シテモドウシテモ成功シナカツタ動物ニ、其後ニ 的ノ相違アル事ハ益と明ラカトナツテ來テオル、例エバ腫 タルヤ腫瘍ノ不羈無拘束ナル且 ツ 未分化的ナル方法ニ於 生態ノ基本的條件ハ其部分ノ組織ガ再生ハスルガ、其再生 植組織ガ「正常ナル再生能力」ラ示ス事デアル、所ガ自然發 結局移植腫瘍ノ發育シ得ル基本的ノ條件ハ、其部分ノ被移 者ラ支持シ得ルカ、ノニデアル、ソシテ此三ツノ事項ト關 二形成シ得ル能力、三、被移植動物體及ど寄生的腫瘍ノ兩 考エナケレバナラナイ、一、被移植組織ガ正常二且ツ迅速二 ノアルモノデアルト云フテオル、即チ接種腫瘍二對スル感 テ研究シテオルガ、自然發生腫瘍ト接種腫瘍トノ間ニ根本

アルガ其方式が全ク異ツタ者デアル。即き同ジ再生デハテ、「異常ナル發生」ラ呈スル事デアル、即き同ジ再生デハ

ニ外ナラナイ、即チ生物學的ニ ハ 根本的ニ移植腫瘍トハ増生ノ結果デアツテ、畢竟其動物體自己ノ新陳代謝ノ發現オル、自然發生腫瘍ナル者ハ其動物體自己 ノ 組織細胞ノ第三章ハ自然發生腫瘍 Spontaneous tumors ニ就テ論ジテ

異ツタモノデアル。

登五傾向ガメンデルノ法則ニ依ツテ遺傳セラ レルノデア では、其重ナル要因、被害ヲウケタ或ハ接種セラレタ組織が に常ナル再生ヲ營ム能力ニ歸スル事が出來ル、所が自然發育 に開スル遺傳的態度、種々ノ要約ニ依リテ 左右セラル、 者セラル、者ニ非ズシテ、全般ニ互リテ之 ヲ 支配スルハ 唯一ノメンデルノ法則デアル、腫瘍ノ自然發生ノ基礎トナル ル者ハ種々ノ傷害作用即チ慢性刺戟ニ對シテ、組織が「異 ポナル再生」ヲ營ム傾向デアツテ、此「異常ナル 再生」ヲ 常ナル再生」ヲ營ム傾向デアツテ、此「異常ナル 再生」ヲ 常ナル再生」ヲ營ム傾向デアツテ、此「異常ナル 再生」ヲ 常ナル再生」ヲ營ム傾向デアツテ、此「異常ナル 再生」ヲ 常ナル再生」ヲ營ム傾向デアツテ、此「異常ナル 再生」ヲ 常ナル再生」ヲ營ム傾向デアツテ、此「異常ナル 再生」ヲ

稀ナル場合デアルト云フテオル。(木村抄) インシテ著者ハ之ニ附記シテ多發性腫瘍、他ノー又ハ多のが良性ノ場合、三、多發性腫瘍ノ各々ガ轉移ヲ呈ス ル 例ハのが良性ノ場合、三、多發性腫瘍ノ各々ガ轉移ヲ呈ス ル 例ハのが良性ノ場合、三、多發性腫瘍ノをが配って、一方が悪性腫瘍リ三大別シ、アル)、ソシテ著者ハ之ニ附記シテ多發性腫瘍ヲ三大別シ、アル)、ソシテ著者ハ之ニ附記シテ多發性腫瘍ヲ三大別シ、

基本的一致及ビ相違

Maud Slye, The fundamental harmonies and the fundamental differences between spontaneous neoplasms and all experimentally produced tumors. Jour. Cancer Research, Vol. VIII. No. 2.

スル生物學的現象ハ軍 ニ 其腫瘍細胞ニ直接傳ハツテ來タ種々ノ影響ラ受ケザル狀態デアルカラ、其腫瘍細胞が發現デハ "Tumor cells growing in vitro"ト云フ題デ、腫瘍細胞が登り 一つ音楽内デ人工培養ラスル場合ニハ、宿主動物體カラノラ硝子器内デ人工培養ラスル場合ニハ、宿主動物體カラノ 政・工事を表現します。 成 世報告ハまうすニ認メレ タ ル自然發生腫瘍ノ發生及じ造 此報告ハまうすニ認メレ タ ル自然發生腫瘍ノ發生及じ造

所ノ遺傳的勢力ト認メラレル可キモノデアルト云と。 第二章デハ動物體ニ腫瘍片ガ移植セラレテ 發育スル場合 | 著者等ノ研究所デー九一〇年來自然發生腫瘍ノ遠傳ニ關シ イ、其遺傳的態度 inheritance behavior ハ二方面カラ觀察 ニハ第一章ノin vitroノ場合ノ如ク簡單ニハ解釋ガツカナ ノ正常ナル再生力ノ如何ニ關係スル者デアツテ、決シテ被 ガ出來ナイノデアル、即手接種腫瘍ノ "a take" (成功或 態度デアツテ、他ハ被移植動物體ニ存ス ル 遺傳的態度デ シナケレバナラナイ、即チーハ腫瘍片自己ニ存スル遺傳的 移植動物體自己ノ細胞ノ異常ナル發育ニ依ル者デハナイ。 成立トデモ譯ス可キカ)ト云フ事ハ根本的二被移植部組織 腫瘍細胞ハ死碱スル、換言スレバ所謂"a take"ラ得ル 築養物ヲ此寄生物細胞ニ供給スル 事ガ出來ナイ場合ニハ 給スル者ハ遺傳的潛勢力ヲ有スル生物體デアル事デアル、 セラレタル腫瘍片トノ 發育狀況ノ相違ハ一ハ單ニ器物内 アル、硝子器内ニ培養セラル、腫瘍細胞ト、動物體ニ接種 移植動物組織が再生セズ、叉補佐的循環系統が成立セズ、 接種腫瘍ハ畢竟一ノ寄生的異物デアルカラ、其二接セル被 ニ在ル榮養素ヲ攝取スレバヨイノデアルガ、他ハ榮養ヲ供

實驗ニ使用スルト、腫瘍發生率ガズツトマシテ、時ニハ百 見ルト、此實驗二於テ腫瘍發生ノ成功ヲ基礎トシテ、遺傳 肝肉腫ラ發生シタらっごノ雌雄ラ変尾サセ テ 得タ 仔風ラ ノ參與ガ著明デアル事ヲ認メル。尚ホ是等ノ實驗中、寄生 %ノ發生率ヲ得ル事ガアルト報告シテオル、是等ノ點カラ 例ヲ附記シテ、此動物ハ實驗的ニ發生ヲ企テラレタ腫瘍型 -リモ、先天的發生素因ノアツ タ 腫瘍型ノ發生ラ示シタ 依リラ肝臓肉腫ノ發生ラ見ル事ガ 出來ナイらっこ二於 可移植性轉移性軟骨橫紋筋內腫ノ自然發生 ヲ 見ター

ally ingested tapeworm ト云フノデアツテ、主トシテまう 或ハ叉 Bullock and Curtis ノ實驗法ノ粗漏ナル 點ヲ論ジ 報告ラ通讀シテ見テオカナイト充分二割り難イ所モアル、 第五章ハ甚ダ長ク且ツ議論縱横デ、著者 ノ 從來發表シタ 者デアルト云フテオル。 ラノ研究所ニテ令マデ剖檢シタまうすハ四一一六五匹デ、 すニ寄生シタ絛蟲ト腫瘍トノ關係ラ論ジテアル、著者自カ 議論ヨリモ此中ニ記載セラレテオ ル 事實ハ甚ダ興味ガア テ、自己ノ用意周到ラホノメカシテオル所モアル、此等ノ ル、此章ノ題ハ Pathologic conditions resulting from norm-

絛蟲ノ寄生セル者 (自然感染) 一六〇〇匹デアル、此自然 感染ニ依ル絛蟲寄生ヲ認メタル一六〇〇匹中。

腫瘍發生ヲ認メタル者

白血病假性白血病ノ者

一五七匹

絛蟲寄生及で腫瘍發生ヲ認メ得タ一五七匹 二 就テ更二細 腫瘍、白血病、假性白血病ナキ者 一四三一匹

別シテ見ルト左ノ如クデアル。

乳腺腫瘍 一〇一例(原腫

三二例(腺腫及ビ腺癌)

四例(腺癌)三例ハ寄生養胞ラ有セズ、殘

例(腺腫

攝護腺

卵巢 肝臟 肺臟

例 (肉腫)

Preputial Gland 例 (腺腫

一例(癌一例 めぞてりおーむ一例

睾丸

三例(扁平上皮癌

二例(淋巴肉腫 例(同上)

後腹膜下

〇抄

四四九

物ラトラセル、此水ノ一滴内二 ハ 蟲卵十乃至六十箇ヲ有 月ノ者)ヲ使用シテ、此絛蟲卵ヲ混ジタ水ラ一二滴混ジタ食 らっこ (五ツノ異ツタ系統カラ成ツテオル 生後二乃至九ケ Bullock and Curtis ガー九一九年十月以後一一六五匹ノ らっ三ノ肝臓ニ寄生セシメ テ酸生セシメタ 肉腫デアル、 Taenia crassicollis ノ幼蟲デアル Cysticercus fasciolaris ラ 報告デアツテ、吾々ハコウ云フ大仕掛ケノ實驗」ハ日本デ 第四章、實驗的二發生セシメタルらっご肝滅肉腫ニ關スル シテオル、其結果ハ左ノ通リデアル。 ハ思ヒモヨラナイ事ト思フ、例ノ猫ニ寄生スル肥頸絛蟲

最初ノ實驗頭數一一六五匹

五匹中 五ヶ月後六〇〇匹ヲ殺シヲ檢ス、腫瘍發生ナシ、残り五六

九ヶ月後迄二檢セル二八六匹腫瘍發生ナシ。

残り二七九匹生存。

十五ヶ月後でデニ死又ハ殺セル者二三〇匹ノ中、 肝臓肉腫ノ發生アル者 五五元

腫瘍發生ナキ者

一七五匹

尚ホ四五匹ハ實驗續行中

孫合計二五〇〇匹ラ同法實驗二供シタルガ、

其外、最初ノー一六五匹らっこヨリ得タル四世代ニ互ル子

肝臓肉腫發生セル者

二四七〇匹

即チ之ヲ總計シテ見ルト、

發生ナキ者

實驗ニ供セルらっこ總數

三六六五匹中

肝臓肉腫ノ發生アリタル者

發生ナキ者

三五八〇匹

八五匹

此研究者達ハ或系統ノ若イらっこ。が、特ニ腫瘍ラ酸生シ易 テオル、又腫瘍ラ發生シタ場合モ、發生シナイ場合ニモ幼 イラシク思ハレルト云フテオル、或系統二限リテ 生ジ易 ミノ方ノ素因二依ル事ラ考エサセル)、尚木其後 Woodハ 蟲ノ狀態ニ大差ハナイ(ツマリ腫瘍ノ 發生ハ主トシテらう 依リテ明ラカデアル、肝ノ嚢胞内ニオル幼蟲ハ何レモ生キ ガ悪性デアル事ハ、浸潤性發育、轉移形成、移植可能等ニ アツテ八ヶ月乃至十五ヶ月モカ、ツテオル、發生シタ腫瘍 エナケレバナラナイ、寄生二依ル刺戟ノ繼續時日ハ種々デ イト云フ事ハ腫瘍ノ自然發生素因ガ遺傳セ ラレル事ラ考

ncy ノ存スル事ラ發生率ニ於テ認メル、(抄者曰ク。 Race 種族ノ相違ト云フ事ハ同ジ種 Species ニ就テ日ハ レル事 的基礎ガ發生率ト關係アル事ヲ認メラレル。(三)まうす ハらっきョリモ酸生シ難イ、即チ racial hereditary tende-イ。(二)發生率ハらっごノ系統二依リテ異ナル、即手遺傳 らっこトまうすノ如ク異ツタ Species ニ別フルノハド 計

就テ論ジテアル(Fibiger ノ場合ハ人工的感染デアル)。即チ 自然感染圓蟲寄生例,六一匹中、腫瘍發生十例、白血病一 第七章デハすびろぶてらノ自然感染ノ場合ノ 病的變化ニ 腫瘍發生ト遺傳的關係ノ無視ス可ラザル事ヲ擧ゲテオル。 ズ、腫瘍發生ヲ細別スルト左ノ如クデアル。 トシテカ、ル字ラ用ヒタノデアロウ)、矢張り此章ニテモ 他ノ五十例ハ寄生ノミアリテ 腫瘍及ビ白血病ヲ認メ

二例(癌一例、 癌及ビ腺腫一例)

アル

例(腺腫)

[9]

後腹膜下 白血病

例(淋巴內腫)

十一例(腫瘍及ど白血病)

tal essential デアルト論ジテオル。 章二於テモ Cancer-resistant mechanism 二就テ論ジ、人工 尚本圓蟲ノ寄生二依ル變化ラ三期二分チテ述ベラオル、此 其素因 Predisposition ハ唯一ノ基本的真髓 one fundamen-的二産生セラル、腫瘍型ニモ、自然腫瘍ノ發生ノ場合ニモ

第八章ニハたーる癌ニ就テ、山極、市川、筒井諸博士ノ業績 ラ簡單二述ベテアル。

ウカト思フ、唯著者ハ恐ラク Species モ race モ同ジ意味

第九章ニテハまうすニ認メラレタル自然發生扁平上皮癌 九一例ヲ認メタ、無論是等まうすハこーるたー る 産出物 剖檢シタル結果、扁平上皮癌或ハ基底細胞癌ノ自然發生 就テ色々ト論ジテアルガ、發生部位ラ簡單二抄記スルニ止 メル、即チ著者ノ研究室ニ於ケル四〇三七〇匹ノまうすラ ヲ塗ツタモノデハナイ、更二之ヲ細別スルト次ギノ如クデ

眼瞼、口腔、耳ヲ含ム)

· 一〇〇例

下顎

ħ

柱一例(みゑろーむ)

一例(內腫、肝橫隔膜轉移)

一例(內腫、外傷部)

口腔

一例(扁平上皮癌)

一例(骨肉腫、骨折部、肺肝脾轉移)

一例(船)

膵

肢

十二指腸 一例(癌)

一例(扁平上皮癌)

頭部

一五七例

白血病 五例

總計 一六九例(腫瘍、白血病、假性白血病)假性白血病 七例

バナラナイト云フテオル、叉寄生蟲ニ依りテ生ゼラレル解ニ絛蟲!寄生ヲ認メラレ、約九七%ハ絛蟲寄生ヲ伴ハザルニ絛蟲!寄生ヲ認メラレ、約九七%ハ絛蟲寄生ヲ伴ハザル腫瘍發生慢デアルト云ヒ、尙ホ種々ノ事實ヲ擧ゲテ寄生蟲腫瘍發生慢デアルト云ヒ、尙ホ種々ノ事實ヲ擧ゲテ寄生蟲は強強として、尙ホ種々ノ事實ヲ擧ゲテ寄生蟲は病養生原が発室ニ於テ從來認メラレタルまう す ノ自

幼若雌雄ラ論ゼ ズ酸生スルガ若イらっこノ方ガ 發生シ易

告ラ基礎トシテアル、フヒビゲル氏ノ報告中(一)らっこハ noma" ノ人工的發生ニ就ティアル、例ノ Fibiger ノ研究報 ock and Curtis ノ報告例ト著者ノ場合トラ比較シテ、前者 絛蟲ノ寄生セルまうす一六○○匹中、肝腫瘍ハ僅カ四例 肝腫瘍(即手約二・三%) 發生アリ、著者等ノ場合ニテハ 剖的變化ヲ初期中期末期ニ分チテ記載シテアル、又 Bull-第六章デハらっこ及どまう すニ於ケル "Spiroptera Carci-局所性缺乏 local lack ニ歸ス可キデアルト云フテオル。 發生ニ抵抗スルめはにずむ Cancer resistant mechanism ノ キ種々ノ論評ヲ試と、結局癌ノ遺傳的態度ト云フ 者ハ癌 其他何等ノ寄生蟲ラモ認メ得ナカツ タ 場合デアルト云フ 腫瘍發生ト件ヒタル一五三例ハ肝臓消食管何レニ モ腫瘍 肝臓ニ絛蟲ノ存在ヲ認メザリシモノナリ、尚ホ絛蟲寄生ト ニテハ絛蟲卵ラ食セシメタルらっこ三六六五匹中八五例 テ、甚シク Cysticercus 寄生ニ依ル肝肉腫發生ニ疑ヒヲ抱 デアル、所ガー方ニ於テ肝臟腫瘍一二二例ト云フ者ハ絛蟲 ヲ認メズ、何等ノ腫瘍ヲ認メザル 絛蟲寄生例一四四三例 (○・1%)發生ヲ見タルノミニテ、然カモ此四例ハ何レモ

タ種々ノ傷害ニ際シ異常(不自然)ナル 再生ヲ營ム遺傳的の利益傳セラレタル癌養生抵抗機制 Cancer-resistant mechanism ヲ打チ破レバイ、ノデアル、尙ホ恐ラク同時ニ他ノ Vital fundamental metabolic mechanisms ヲモ攪亂打破スル者デアロウ。

四、自然發生腫瘍及ビ人工的發生腫瘍間ニ存ス ル 是等ノー致點ョリシテ、Cancer-resistant mechanism ト云フ者ラー致點ョリシテ、Cancer-resistant mechanism ト云フ者三種々强弱ノ存スル事が認メ ラ レテオルカラデアル、例エバ極メテ强キ暴力及ビ長時日ニ互ルオルカラデアル、例エバ極メテ强キ暴力及ビ長時日ニ互ルオルカラデアル、例エバ極メテ強キ暴力及ビ長時日ニ互ルオルカラデアル、例エバ極メテモを表現の表現を表現している。

(木村抄)

一九一例 一一二二五 五

キはんでぃきやつぷデアルト思フ」。スルト云フ事ハ、腫瘍ノ原因、癌治療ノ研究上誠ニ由々敷テオル、實驗的腫瘍ノ環境ノ物質代謝狀態ガ種々ニ 變化更ニ是等ノ腫瘍ニ就テ詳細ナル記載ヲシテ、次ノ如ク云フ

ニ結論トシテ著者ハ次ノ如ク述ベテオル。セラレタ方々ハドウカ詳シク原文ヲ讃ンデ頂キ度イ。最後上記ノ抄譯ハ極メテ簡單ナ者デアル、唯之 ニ 興味ヲ喚起

忍メ导ラレル。 八根本的一致ヲ認メラレ、又或程度マデハ根本的丿租違ヲハ根本的一致ヲ認メラレ、又或程度マデハ根本的丿相違ヲデー、自然養生腫瘍ト人工養生腫瘍ト 丿 間ニハ或程度マデー、自然養生腫瘍ト人工養生腫瘍ト

素因ニ密接ナル關係ヲ有スル事デアル。 根本的ノ一致ハ、此兩者共ニ基本的 ニ 動物組織ノ遺傳的根本的ノ一致ハ、此兩者共ニ基本的 ニ 動物組織ノ遺傳的

要スル。(甲)接種腫瘍ノ發育ノ成否 ハ 基本的ニ動物體組織ガ正(甲)接種腫瘍ノ黄ハ再生ガ異常不自然デア ル 事ヲ 造當ナル結合狀態及ビ榮養ヲ供給スルヲ必要トスル、反常ナル再生ヲ營ムト云フ遺傳的傾向ニ依ル者デアツテ、

(乙)寄生動物ニ依リ肝、胃、腸ニ腫瘍ヲ發生セシムル實験はミントスル遺傳的傾向ト、其方法ニ依ル暴力が、動物試ミントスル遺傳的傾向ト、其方法ニ依ル暴力が、動物試をントスル遺傳的傾向ト、其方法ニ依ル暴力が、動物

二依リテモ同樣ニ惹起セラレ得可キ遺傳性デアル。テ、感受性アル皮膚ニ對シテハ他ノたいぶノ慢性傷害の定義リカアルノデアツニ皮膚癌ノ遺傳的傾向ニ密接ナル 關係ガアルノデアツニ皮膚癌ノ遺傳的傾向ニ密接ナル 關係ガアルノデアツニ皮膚癌ノ遺傳性傷害ノ結果生ゼラル、 自然發生癌モ別(内)たーる塗抹ニ依ル扁平上皮癌モ、他ノ種々ノ原因ニ

果トシテ現ハレタ者デアル、換言スレバ、組織ニ加エラレ然發生腫瘍ハ動物體自己ニ遺傳セラレタ ル 物質代謝ノ結三、自然發生腫瘍ト人工的發生腫瘍トノ基本的相違ハ、自

雜

○理事會 大正十三年十月二日 第六囘理事會 開會協議事

一、大正十三年度癌研究費補助追加ニ闖スル件

一、森ヤス氏退職手當支給ニ關スル件

三、太久保象一氏増給ニ關スル件

四、看護婦增員及給料ニ關スル件

○癌研究量補助 大正十三年度ニ於テ左記ノ 者 ニ癌研究

費ラ補助スルコトニ決ス。

醫學博士 藤 浪 鑑 氏

編輯者謹告

方ハ、大至急 タル人ニシテ、未ダ歐文抄錄ヲ送リ來ラザル本年度(大正十三年)本誌ニ原著ヲ寄稿セラレ

歐文抄錄

止ムル事アル可シ。 誌歐文號ニ單ニ其題目ト著者名トヲ紀スルニ左記宛送ラレ度シ、右御送リナキ場合ニハ本ヲたいぶらいたI用紙(十枚以内)ニ打チテ、

東京市芝區愛宕町

慈惠會醫科大學病理學教室

不村哲二

大正六、三	同	同	同一一	同、九	同、七	同、六	大正五、四	同一二	同、七	同	同四	同	大正四、三	同	同	同、七	同	同
三九一、四六	110,00	00,000	五00,00	五,000,00	五,0,00	10,00	1100,00	00,000	10,000,00	11,000,00	10,000,00	1100,00	二、五〇〇、〇〇	100,00	1100,00	五0,00	110,00	五00,00
林房子	田勇次	松原重榮殿	方	男爵古河虎之助殿	音 野 拓 三殿	高木健一殿	男 爵 大鳥 富士太郎殿	西脇濟三郎殿	男 爵 三井八郎右衞門殿	部全	男爵岩崎久彌殿	田徒彦	木	松本健次郎殿	Щ	澤	原本大三郎殿	本多忠夫殿
同 故小林八十七氏ノ遺志ニ依	同	同	同	同 每年五百四宛十ヶ	同	同	面	同 毎年貳百圓宛五ヶ年	同 毎年貳干圓宛五ヶ年	同	同 毎年武千圓宛五ヶ年	同	同 毎年五百圓宛五ヶ年	同	同	同	同	同

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同.	同、五	同	同	同	同	同	同	同、四	大正三、三
Ti. 00.00	100,00	五0,00	000.00	五〇,〇〇	10,00	五0,00	110,00	五0,00	100,00	五0,00	100,00	五0,00	100,00	100,00	100,00	七00,00	100,00	1 0,00
男			子						子					男				
餠			甜						爵					爵				
青	堀	西	澁			田	藤	岸	山	森			森	森村	益	木	志	增
山	越角	村	澤	木七郎右衞	本厚		田		尾	下	川叉	田善	村	市	田	下	賀	田
胤	力次		榮	右衛	大太	寬	俊	清	庸		四四	Ξ		左衛		Œ		增
通殿	郎殿	直殿	一殿	间門殿	郎			_	Ξ	博殿	郎殿	郎殿	勇殿	門殿	達殿	中殿	潔殿	藏殿
同	同	同	同	同	研究費中へ	故免口氏慈善基金中	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	研究費中へ

大正一〇、三 同 同 同 同 同 六 六 1.000 三 Ŧį, 11.000.00 100,00 1100,00 1100,00 000.00 五〇〇、〇〇 五〇〇、〇〇 000 Ti. 100.00 五〇、〇〇 五〇、〇〇 00 00 男 爵 土今岸服本鹽木佐森三永矢濱川吉田八字令 村輪田野開兵利恒 多原村々 野 吉桑 二太忠又四隆開 助子真殿 夫策郎與作衞之太衞殿殿殿殿殿殿殿殿 藏三郎郎殿殿殿殿 祠 經費中 經費中へ 同 同 研究費中へ 經費中へ 研究費申へ 毎年四百圓宛五ヶ年間 壹百圓宛五 毎年百四宛五ヶ年間 毎年干圓宛五ヶ年間 ケ年 間

同	同	同	同	jΕ		同	同	同	同	同	同	同	同	Œ	同	同	同	同
四	四	111	Ξ		-	八	+				四		=	=======================================				
	フェルドー管球二個	能 場 一 〇 〇 〇	000,00	000,00	100,00	六00,00	五〇〇、〇〇	五〇〇、〇〇	1100,00	0,000,00	#i.		100,00	000,00	一、五〇〇、〇〇	100,00	#100°C0	£.00,00
			男爵	_	2		侯爵					法則人團						
岡	田	西		- 1	· ·	F	鍋	佐	横	安	益	森	奥	田		持	百	岸
H	中	Ш	進	原派	田	飯坂	島	藤	山	田善	田	村豐	田	島	村豐	田	瀨	清
	辰	信		义紹	行人	長	直	11	信	次		明	永	道	太		_	(P)
顯殿	三殿	光殿	郎殿	策殿	重殿	政殿	映殿	吉殿	毅殿	郎殿	孝殿	會殿	吉殿	治殿	郎殿	巽殿	一殿	殿
														-				

国	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	大正一二、八	同,六	同	同	同	同	同	大正一一、六
1100,00	1100,00	100,00	100,00	100,00	Ti. 00.00	五〇〇、〇〇	100,00	fi. 00.00	<u>-</u> <u>-</u> <u>-</u> <u>-</u> , 00	100,00	Hi. 00.00	三、五〇〇、〇〇	1. 00,00	Hi. 00, 00	Ti. 00, 00	1. 00.00	Hi. 00.00	五·○○·○○
and	Fret	-864	14.	_	-T-2"		-44	1.60	1111		-2-2	.1.	pcAnt.	男爵言	TIT		E	.1.
西川	門部	多 沼				若业			門野			大橋						
川恒	100			好手		林	•	風		菊	橋旦	新				村尓		多忠
頭彌	市郎	志一	7 吉	里道	剛	英一			正	三	是殿	太郎	廣		龍士	德		
殿		三殿	四殿	殿	殿	殿	严殿	堂殿	二殿	郎殿	賢殿	郎殿	重殿	寬殿	吉殿	衞殿	郎殿	大殿
同 五拾圓宛四ヶ年間	同 大拾圓宛五ヶ年間	同	同	研究費中へ	同・壹百圓宛五ヶ年間	貳百五拾圓宛二ヶ年間	研究費中へ	同 壹百四宛五ヶ年間	同	间	研究費中へ	研究費中へ五百圓宛五ヶ年間	同	同	同	同	同	經費中へ毎年百圓宛五ヶ年間

癌第十八年總目次

一、原著

一册

	第			*-	第	-1-	A140	99177	1117	10-2
鼠	Ξ	原	X	鼠肉	=	癌腫	鯛(腦底	脈絡	鼠肉
癌ノ	MH	發	光線	份體	fff	加里	Pag	底	形叢	腫
腦	/JJJ	性肺	1	1	****	X	nı	發	腫	
酉		尖	鼠	異		線	S	1:	瘍	成
內移		癌	癌	種		治	nay	セ	1	ノ成熟異
移		1	三及	動物		線治療成績	(Pagrus mayor)	セル真	例	無
植增		例	スス	末		結	並	珠	ניט	動
殖			ス作	梢			=	腫	:	種動物殊
殖二對		:	用	神		(報告第二)	並三比目	1	:	殊
對		:	:	經		第	日魚	例	:	cl>
スル		:		+1		-	And O	ניש	:	就
HSS		:	:	ケ		:	ara	:	:	鳥
脳質ノ生				IV			alic		:	類
1				移		:	hy	:	:	
生		:	:	租策			thy		:	が
物學		:	:	神經ニ於ケル移植實驗		:	S		:	iv
學的意義		:	:				(Paralichythys olivaceus) ノ腫瘍	:	:	ニ成熟鳥類ニ於ケル移植
意				:		:	ace	:	:	植
		:	:			:	us)		:	神
第		:	:	:		:	,	:	:	- 就テ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
313			:	:		:	腫		:	:
批生			:			:	瘍	:	:	:
			:	:		:	二 4台	:		:
報告) :::		1	:	:		:	ニ就テ・	:	:	:
			:	:		:				:
ili ili		原	ili	白		Ш	風	佐	岡	白
				井		bl	HH		347	井
崎		田	111	珍		11	間	野	部	珍
和		定	保	=		保	美		養	Ξ
						Irl.	सह	hite	逸	郎
雄		次	城	郎		城	顯	兼	72	:
: 二五三		1111				: 五		:		:
五		1	O 16	九五		五七	五	三八		_
acces.		_	.Ala	-040		_			_	

〇第十八年總目次

同 同 大正一三、五、六
五00,00
田和一 應 職
研究費中へ、武百五拾圓宛二回分納所究費中へ、大學教授二十五年紀

中	孵化鳥卵內腫瘍移植試驗・・・・・・・ニニー	聽器ニ於ケル腫瘍移植=闢スル實驗的研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・網 ロ	可移植性腫瘍ノ鼻腔内移植(第二囘報告)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	實驗的腦腫瘍ノ組織學的研究(第三報)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・新	鼠肉腫/異種動物末梢神經ニ於ケル移植實驗・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・白 北	腫瘍ト神經(第一囘曩告)(標本供覽)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	精系結繁ト其睾丸内惡性腫瘍移植トノ關係・・・・・・・・・・・・・・・・・ {市	腫瘍 / 移植及ビ増殖ニ關スル實驗的研究(第二囘報告)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・新	性質ヲ異ニスル病態增殖組織相互間ノ關係(炎性組織ト移植腫瘍)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・久	性質ヲ異ニスル病態増殖組織相互間ノ關係(骨組織再生ト移植腫瘍)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・蘇	鷄胎兒組織ト可移植性鷄腫瘍トノ混合移植ニ就テ(第二報告)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ {丙・	肺臓内人工的でーる癌發生ニ關スル質驗(第二報)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・木	た-る人工癌餐生實驗殊=其血清診斷陽性出現時期竝ビニ血液ノ形態的變化・・・・・・・・・ {市・1	石炭たーる連續途布ニ因ルまうす皮膚ノ戀移ニ就テ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	第二册(癌研究會第十六囘學術集談會演說)	ハイデルベルグ瓦斯工場産てーる中癌發生上有效ナル成分證明ニ闢スル最終ノ實驗成績・・・Teutschlaender	人類癌腫遺傳ノ生物學的證據まうす癌例ト遺傳ノ研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ Slye・	まうすニ於ケル腎及副腎ニ原發セル自然腫瘍殊ニ其類度及遺傳ニ闢スル研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Slye	腎結石ニ續發セル原發性扁平上皮網胞癌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Wertz	
耶郎 勝治 耶二 信也和 雄 鑑 丞之 義 4一 俊	尾唯		原	井實		本	川田野郁	島	保久	浪	木山金素	村敬		木正		er · · · ·	ye	ye	tz	
	- ER		排作					和		经						:	:	:	-:	
六五五五四四四三三二二二 八八八八八二二八七三二六四二五〇九七五二 三二一〇						:						:	:	:		:	:	:	:	
	六一				五二			四二	五五	30	九	二七	五	1111		八三	八二	八一	0	

胃硬性癌ノ神經纖維索內浸潤經過ニ就テ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・大串	頸動脈腺ノ腫瘍ニ就テ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		經切斷ト移植腫瘍ノ發育增殖トノ關係(木		第四册	そらまめノ根端組織ニ作ラレタルX線腫瘍小	卵巢砂粒癌ノ一例ニュ	腫瘍ト神經中
市郎	部	子	本村	III		室	內多	本
右	賚	義	完嘉			英	喜	完
衛門:	夫	晁		定		夫	治	
四三五	四七	三九一	三七三	量量		三一七	三〇八	二六九

第一册

三、抄錄

合血動物えむぶりおヲ同種成熟動物ノ腹腔内ニ移植セル試験成績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	冷血動物えむぶりおヲ同種成熟動物ノ腹腔内ニ移植セル試験成績	家鷄肝臓ニ混合上皮ヲ有スル嚢胞ノ發生	質驗的でーる癌ニ就テ	實驗的でーる痛發生點ニ關スル組織的檢索	てーる癌ノ發生原因・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	實驗的癌形成ノ際ニ於ケル結締織ノ關係:
成績	此内二移植セル試験	就テ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・				:
Scl	:					
* per 0 0 0 0		Sch				

古野村 大 中 二三 1 1 1 1 1 1 1 1 1	自然愛生腫瘍ト實驗的發生腫瘍トノ基本的類似及ビ相違・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	多發性原發性惡性腫瘍	まうす子宮ノ原 發性 腫瘍・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	縮細胞ノ反應ニ就テ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	20 册	癌研究ニ於ケル二十世紀ノ進步・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ス	實驗的た1る癌發生ニ於テ刺戟中絕ノ結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	ばらふら 人癌ト 其質驗的發生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	砒素編ノ實驗的發生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	癌腫!「レントゲン」深部放射療法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		まうす癌腫瘍内注射(張備的實驗)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	腫瘍免疫ニ關スルー二ノ實驗・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	 	
	··Mar	:	olmes			m	1	1	+1	井		極 呂原勝	部	fri	
	nd Si	. Seco	, We	Voglo			7	4	7			Ξ			
四四四四 三三三 三 二二二二二四四四四四四 三三二二	ye.	cof	lls.	m.		ス!			1 2	吉		保博郎	选		
六五四三 〇九八 八 三二 九 七四〇	四四			四			=	=======================================	=	74	מו	=	1111	= =	
	六	五	29	=		0	九	八	八	Ξ	-	九	七		

德	癌腫ノ發育及ビ轉移(第一囘報告)統計的考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・長 岡	癌ノ脾臓轉移ニ就イテ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	n. * 14.11.	小腸壁ニ於ケル筋腺腫ニ就テ・・・・・・・ 出	原發性總輪贈管癌ニ就テ特ニ此際ニ現ハルト贈道竝ニ肝臓ノ變化ニ就テ・・・・・・・・・・・・・佐 川	騰龗ニ於ケルあでのかんくろいど竝ニ十二指腸乳嘴部腺腫性癌ノ標本供覽・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	十ヶ月ノ男兒ニ於ケル腹膜後畸形腫ノ一例 :・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・金 子	Neurinoma Verocay ノー例ニ就テ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	魚類腫瘍ノ研究・・・・・・・・・・高 橋	まうすノ肺臓上皮性腫瘍ニ就テ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	鼠癌移植經過中ニ發生セル肉腫ノ其後ノ鑾化ニ就テ・・・・・・・・・・・・・・・・ {満 田	大鼠、人工肉腫ノ疑義ニ就テ・・・・・・・梅 原	可移植性鼠肉腫狀新生物ニ就テノ實驗的研究(第三報告)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	家鷂肉腫ノ箕驗的研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・赤 松	鷄腫瘍ノ質驗的研究補遺・・・・・・・大 島	鷄腫瘍/飼食的試驗······野 村	腫瘍動物 / 脾重ニ就テ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ {和 田		
耶 任 耶圣喜之 亮 二 暉 晁 凉 三 耶保 逸義 正 雄 一 造 中 治二七	德	木	食							俊			多						
		仁		-				2138		取伊									
			APPENDE A		:	H.Tpt.	:	:	:	Mi Mc	AZI-DC	:		:	:	:	:	:	
		month.	2	0	O	Ö	九	九七七	一八七	一八五	八三	八八〇	七七七	七五	七三	一六七	六五	六三	
三二 八 五四一九七七五 三〇七五三七五三	==		八	Ti	70	numb	九	-1	七	<i>I</i> i.	=	0	t	.IL		t	11.		

法社 人團 癌 研究會會員名簿

(大正十三年十一月調

○名譽會員

日本橋區兜町 赤坂區今井町 京橋區銀座四丁目

麻布區三河豪町二五

芝區高輪南町三三 本郷區西片町一〇ノー一

男爵

H 森

銀

之

東京府下荏原郡目黑下目黑一五六 麻布區市兵衛町一ノ五

東京府下遊谷町下遊谷一一六五 東京府下瀧野川町西ヶ原 横濱市辨天通リニ丁目

立木

男爵

島 虎

男爵 男爵 進 Ξ 八郎右衛門 勝 郎

富士太郎 郎 芝區白金三光町二六二

芝區田町七ノ六 日本橋區田所町一三 名古屋市西區島田町三ノ四

◎特別會員

牛込區餘丁町三五

田

貞

京都帝國大學醫學部病理學教室

○通常會員

在東京

Aノ部

神田區淡路町二ノ四 小石川區原町一二五

三重縣桑名町 小石川區關口臺町一 芝區白金臺町一ノ七一

〇會員名旗

麹町區永樂ピル安田保全社 東京府下荏原郡蒲田村北蒲田 本郷區弓町一ノー六

今 安 田 村 敬 道繁 治 三郎郎 郎

阿 市

平



池

田

11

Kノ部

四谷區慶應義塾大學醫學部婦人科醫局 四谷區慶應義塾大學醫學部病理細菌學教室 神田區駿河臺南甲賀町一三

11

Ŀ

金

杉

英

11

日本橋區箱崎町四ノー 日本橋區本町一ノーニ

赤坂區青山南町五ノ三七 麴町區一番町三八

小石川區林町九七 本鄉區龍岡町二三

本郷區西片町一〇ほノ三三 麻布區仲ノ町一九 本鄉區森川町一, 二九〇 本鄉區龍岡町二二

芝區白金今里町七七 芝區愛宕下町四丁目

本鄉區彌生町二(洋行中)

Mノ部

小石川區原町一〇六 芝區神谷町一八 牛込區上宮比町五

〇會員名簿

近 小北木木木木河 菊 毛 保 111 藤 F 村 村 野 地 利 間

伊 連

八 īE. 敬 哲 德 教 循 īE. -4 Ŧi. 平 幹 郎 中 義 衞 信 滋 源

東京帝國大學醫學部病理學教室 麻布區本村町四四 芝區愛宕町三ノー 本鄉區本鄉五丁目三二 東京帝國大學醫學部病理學教室 本鄉區追分町二〇 本鄉區曙町七 日本橋區村松町三七 京橋區築地聖路加國際病院

賀

芝區白金臺町傳染病研究所病理部 本鄉區西片町一〇 赤坂區青山北町五丁目二 四谷區東信德町二八 下谷區下根岸七六 麻布區市兵衛町二八八八

Nノ部

雄 府下西巢鴨町平松一五二二 牛込區甲夏町一一 赤坂區檜町

神田區裏猿樂町三ノ四〇 牛込區砂土原町三 本郷區西片町一〇ほノ一〇

中 西 西 E 野 井 忠 叉 信 太 次

> 求 郎

郎

光

烈耶

南 村 馬 宮 = 町 向 松 松 宮 宮 Ξ 田 Ŀ 山川田 村 Ш 井 信 立 篤志 叉 久 陸 米 太 喜 郎 治曹 郎 剛 = 藏 郎 次 雄 那 助

E

牛込區矢來町四 芝區東京慈惠會醫科大學病理學教室 東京帝國大學醫學部鹽田外科醫局 麹町區富士見町五ノニ三 本鄉區弓町二丁目二四 本鄉區駒込千駄木町五四 麹町區下二番町四六 淺草區左衙門町二 Dノ部 Cノ部 Fノ 部 Bノ部 男爵 馬 朝 青 尼秋 土 F 見 場 倉 山 肥 葉 忠 慶 真 信 文 徹 練 四 兵 藏 光 衞 造 藏 郎 牛込區矢來町八、 日本橋區濱町二ノ 麻布區永坂町六八 芝區西久保城山町八 四谷區南伊賀町一八 牛込區辨天町七四 麻布區飯倉町三丁目 東京帝國大學醫學部入澤內科醫局 麻布區龍土町五五 京橋區南鍋町一ノ四 麹町區富士見町一ノ二九 麴町區富士見町二丁目四五 Iノ部 號 五

照 京橋區木挽町三丁目三四 類 京橋區木挽町三丁目三四 小石川區林町二三 四 東 京橋區木挽町三丁目二二

田

堀 堀

野

本鄉區駒込西片町九

本鄉區本富士町二

芝區柴井町三

東京帝國大學醫學部入澤內科醫局

Hノ部

東京帝國大學醫學部病理學教室本郷區西片町一〇にノー一

稲

士

政

11

配

田

保

男爵 池 池 岩 稻 稻 入 15 Ti 田 瀬 田 垣 佐 喜 悦 久太郎 達 次 郎 新 古 瓦 吉 臣

平 劳 林 賀 非 石 山口 3 間 雄 榮 精 政貞 次 Ti. 郎 適市藏次郎 純

牛込區市ヶ谷仲之町四三 芝區白金三光町北里研究所 芝區三田四國町二八 小石川區上富坂町七 麻布區櫻田町三〇 赤坂區青山北町七ノー 本鄉區湯島順天堂研究所

●在地方

Aノ部

小石川區東大醫學部分院 芝區愛宕町東京病院內

九州帝國大學醫學部微生物學教室 仙臺市勾當臺通一六 長野縣屋代驛前 名古屋市中區七曲町三ノ一三

Fノ部

廣島市吳海軍病院

宮

量

t

郎

熊本市新町三ノ四九 北海道帝國大學醫學部病理學教室 神月市兵庫縣立病院病理部 京都帝國大學醫學部病理學教室

并

保 藏 浪

壽

松

喜

代

〇會員名簿

吉 山 矢 H Ш H 清 保 豐 是 Ξ

木 並 亨 爲 太 胍

足 足

龙

男 郎 邦 雄

朝鮮釜山獸疫血清製造所

金澤醫科大學法醫學教室

福 古

行 基

畑 島

種 信

後

介

Gノ部

Hノ部

京都府立醫科大學病理學教室 栃木縣那須郡烏山町烏山病院 京都帝國大學醫學部病理學教室 臺灣總督府醫學專門學校 愛知醫科大學病理學教室 市外野方町新井五〇三

同上

長崎醫科大學病理學教室

兵庫縣河邊郡川西村字小月

Iノ部

新潟縣中蒲原郡新津町

北海道帝國大學農學部比較病理學教室(洋行中)

府下世田ヶ谷下北澤佐藤住宅方 府下北品川町一本木四〇四 市外大森町八景園坂上 新潟醫科大學

芳

厚

本 田

定

田 忠 文 關 任

H

垣

〇會員名類

小石川區大塚仲町四一ロノ七號 本鄉區湯島順天堂研究所

0ノ部

神田區駿河臺鈴木町五 京橋區月島九ノ七(洋行中) 麴町區三番町三六 牛込區原町三丁目七七 小石川區小日向臺町二丁目二六 小石川區丸山町一九

男爵

岡 大 小 小 岡 岡 大 崎 知 木 和 惟 菊 光 耶 郎 利 Ξ 清

> 麻布區東鳥居坂町一三 麻布區森元町一丁目二七 **麹町區三番町三〇**

男爵 高

H

畊

信

本鄉區森川町一宮前

田田

晉

東京帝國大學醫學部病理學教室 四谷區慶應義塾醫科大學病理網菌學教室

给 白

木

建

珍

四 井

本鄉區千駄木町四六

芝區東京慈惠會醫科大學病理學教室

Tノ部

直

仁

東京帝國大學醫學部病理學教室 小石川區丸山町一五

Sノ部

芝區今入町三

本郷區駒込曙町一三ホノ三 神田區駿河臺北甲賀町一一

薩

敏

夫

芝區白金三光町四五一

東京帝國大學醫學部病理學教室

四谷區內藤新宿番衆町一〇

多 田

榮

耶

義 喜

德

牛込區中里町二三

佐 佐 佐 澤 佐 藤 藤 漆

田 富 廣 Ξ 次 次

木 政 亨 吉 鄍 吉

本鄉區弓町一丁目一四

郎 麻布區三軒家町三六 麻布區山元町五九

京橋區越前堀一丁目四 マノ部 Wノ部

見

衞 重

不

小石川區小日向臺町ニノニ六 本郷區弓町一ノ一〇 本郷區湯島天神町ニノーニ 本鄉區湯島順天堂病院 四谷區尾張町七

本郷區西片町一〇ほノ三〇

京橋區築地聖路加國際病院 ひノ部

> 1 1 ス

ラ

內

1

法 朗

野

JL

白 字

上

之

和

田

助

劍

神奈川縣久良岐郡大岡川村中里 名古屋市鐵道病院內科 臺灣總督府醫學專門學校病理學效室 德島縣那賀郡桑野村大字內原 滋賀縣神崎郡南五個莊村 大阪醫科大學病理學教室 市外目黑村三四四〇 熊本市北千反烟町二五

Nノ部

兵庫縣魚崎町川西村七三二ノ一一〇 東京府下中野町三〇〇ノ三 金澤醫科大學病理學教室 京都府立醫科大學病理學教室 京都市上京區中立賣通室町西へ入 函館區船見町六三 横濱市太田町六ノ九八 神奈川縣中郡平塚村杏雲堂分院

のノ部

九州帝國大學醫學部病理學教室 東京府荏原郡入新井村不入斗一四八二 群馬縣新田郡太田町一八三

岡

武 養

文

〇會員名簿

村 村 向 地 囲 伯 A 龜 定 太 則 郎 郎 酮 知

Sノ部

名古屋市愛知醫科大學病理學教室

札幌市北十六條西五丁目

市外中野町上ノ原八一二 大阪市北區堂島北町一一 宮城縣村田町 熊本醫科大學病理學教室 府下遊谷町下遊谷二七 下關市田中町二四八 靜岡縣沼津町城內 朝鮮龍山鐵道病院 濱松市東鴨家觀晉裏五四七 新潟市營所通二番町

佐

々木 々木

二郎三郎 四方志

恒 丸 冶 z 田

造 市外瀧野川町西ヶ原二五六 金澤市下石引町二八 福島縣白河本町白河病院 仙臺市東二番町磯田內科醫院 札幌北區一條一ノー 京都市上京區小川通御池南

安 恒

> 大 緒 大 方 收 Œ

久留米市田町三八尾岡病院內

大阪市南區新町三丁目緒方病院

愛媛縣廳學務課

-6

平

不 格

京都帝國大學醫學部病理學教室 朝鮮京城大和町二ノ二四 京都市堺町三條上ル 千葉縣千葉町新町 府下豐多摩郡千駄ヶ谷八九〇鶴田方

朝鮮咸南新浦港 千葉縣香取郡橋村

Kノ部

神戸市和田宮通り五ノ二八 島根縣美濃郡益田町

京都府立醫科大學病理學教室 大阪市南區鹽町四ノ九 仙臺市北六番町二三〇

京都府下愛宕郡田中村 京都帝國大學醫學部微生物學教室 千葉縣安房郡北條町六軒町

川清清貴木木木

Ň

幹 藏

野

識 學

野

函館市富岡町五

新潟市學校町通二番町

北海道小樓區入船町 千葉縣安房郡館山町

11

名

博

合

人

整

神月市下山手通 市外大久保百人町四九

> 岩 猪 井 伊 石 于止 本 松 省 龜 戈之 健 岱 武 庸

助

北海道帝國大學醫學部病理學教室

郎 次 志 郎

高田市高田病院

香川縣綾歌郡陶村 横濱市十全病院

千葉醫科大學眼科教室(洋行

职 德

W. 磁

東京府下瀧野川町西ヶ原王子腦病院 岐阜市秋津町

横濱市元町二ノ九八

長崎醫學專門學校 德島市寺町古川病院

金澤醫學專門學校產婦人科教室 山口縣厚狹郡字部新川

Mノ部

男 嘉

也

勇 次 mi 夫 也 三重縣三重郡羽津村羽浦病院 兵庫縣武庫郡今津町百瀨結核研究所 神奈川縣足柄下郡小田原町四六二 大阪市北區南安治川町通二ノ一六

金澤市日本赤十字社支部病院 新潟市東堀前通七番町

太 + 副 則 京都市上京區高倉丸太町下ル 市外龍野川町獸疫調查所 東京府下羅野川町西ヶ原四

旗 百

> 古 古 小 風 鹿 山 11 島 久 市 野 美 Ŧ 茂 鉴 次 宏 二裕顯茂 吉 那 平 足 Z

間 政 松 森 百 八 H A 瀬 Ш H 直 捨 清 待 四 郎 道 一郎 雄 耶

六

府下世田ヶ谷陸軍獸醫學校

宮崎市宮崎縣立病院 府下青山原宿一七〇ノニー

名譽會員

特別會員

市內會員

地方會員 計二百九十八名

一四九 三四四

古吉山 本村澤

耕市惟 橋郎雄

〇會員名簿

0

静岡縣駿東郡揚原村上香質 字和島市賀古町一 市外下遊谷廣尾八八 仙臺市長刀町四 大阪市東區北濱四ノ四六

Tノ部

朝鮮總督府醫院

秋田縣湯澤町 大阪市南區北桃谷町三五 大阪市東區道修町四ノニ 新潟醫科大學外科醫局

千葉市高等女學校前 札幌市北海道廳畜產課 大阪市泉北郡濱寺町船尾八四八 東京府下大森山王二五七一 東京府下大森町二二(洋行中) 高松市外磨屋町柏原病院

H

木 明 寬 七 吉 太 治 之

雄 助

東京府下豐多摩郡干駄ヶ谷町字新町裏八九〇

ひノ部

郎

大阪市西區南堀江町上一ノ二四 市外中遊谷四七守川方

敬

京都府立醫科大學病理學教室 市外大森山王二六五五

京都市東山醫院外科 大阪市北區網笠町囘生病院

Wノ部

朝鮮京城貞洞二 山形縣鶴岡市莊內病院 越後岩井郡村上本町字飯野

Yノ部

岡

道

大阪市立桃山病院內

田 內

> 臺灣總督府醫學專門學校病理學教室 名古屋市南區熟田神宮東門前三本松

宮城縣栗原郡一迫村旗坂 大阪市東區今橋三丁目 南滿洲遼陽滿鐵監院

字都宮市二條町一二七八 京都府立醫科大學病理學教室

姬路市平野町飯塚剛一方(洋行中) 市外中野町字上町二六一八 山口縣阿武郡萩町

sts III 11 賢 運 利 次 定

田 次

月 山 南壽次

市外北品川宿山下二一〇

肆書捌賣

同同同同同同東 市市市市市市市 同同本胂本日本 區 郷 田 郷 本 郷 龍龍湯通湯 橋 春 城 島 初 切 切 石 切 石 七 大 町町通町通通町

吐南金朝南丸华 香江 堂堂 屋堂 書籍 店店店店店店店店

大 大 E E + + 年 年 月二 月 + + 七 日 B 印 發 行 刷

印 發編 刷 行輯 者

者兼

東

京

市 長

麻

布 區市

兵

衛町二ノ八八八

會社 杏 林 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 山

即

刷

所

則 叉 常 郎 舍

癌

各一歐一邦 册武文册文 郵價年價年 税 金一金四 金四回圆回 四五数五数拾款 錢錢行錢行



